

# クロスマイナス 『虚言 使いと戯言遣い』

謂篠弑椎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突如として京都の城咲、はるか上空にまでとある能力スキルで転移させられた球磨川禊は「ぼく」と偶然にも出会ってしまう。『混沌よりも這い寄る過負荷』マイナスと人類最弱の戯言遣いの邂逅は、どういう物語を産んでしまうのか。

・オリキヤラ絡み

・球磨川禊が箱庭学園に戻るまでのお話

・基本は戯言シリーズなため、原作にめだかボックスとしていますが登場人物は大抵戯言シリーズ絡み

・時期としてはめだかボックスは宗像形の初の人殺しと『劣化大嘘憑き』マイナスオールフィクションが生成され

た翌日、戯言シリーズの方は赤き征裁<sup>ハ</sup>vs<sup>ロ</sup>橙<sup>ウイ</sup>なる種<sup>ン</sup>が終わってから二か月ほど後からい。

・数々のメタ、他西尾作品の示唆アリ  
と思いきや、ちよつとした気まぐれで続けてました。

# 目次

上 水俣村	1
上の下 水俣町	17
下 水俣市	51
下の下 水俣病	83
ブリスフルーザー 虚ろな大嘘への襖	
過負荷	107
欠陥製品	121
人間失格	138
結晶皇帝	154
赤き征裁	172
嘘吐伯楽	186

病的

# 上 水俣村

『……………』

箱庭学園、三年マイナス十三組。マイナスという名前から分かるように忌み嫌われていそうなこんな教室でぼつんと一人佇んでいるのは勿論、球磨川禊である。意外と皆、登下校が早くて取り残されてしまった彼。家ですることがそんなに多いのだろうか、などと何気なしに疑問を抱いているところだ。

そんな彼がすぐさま疑問を捨てたのは言うまでもない、挙句の果てには今度誘われたら付いて行ってみようなんて考えている。何だかんだ慕われているところもあるので、拒否自体はされないだろうが不思議だと言わんばかりの表情は炸裂されてしまっただ。

『……………そろそろかなあ』

黒板に近い、いわゆる前の扉がガラリと開く。現れるは紫がかつたさらりとしていてキューティクルの光る長い黒髪を持つ人間。ただし、彼女は球磨川禊の予想している人間ではないし、性別から違う。

「あれ？ 球磨川くん、まだいたのかい、そろそろ完全下校時間を過ぎるよ？」

『大当たり』

教室に入ってきたのはマイナス十三組「妹学」担当、黒神真黒。黒神めだかの兄である。彼も年齢は球磨川禊とそう変わらないはずなのだが、学生ではなく、教師という体裁だ。

『うん、そうだね真黒ちゃん。喜界島さんに呼ばれてるから生徒会室に行くとするよ』  
「下校するわけじゃないんだね……」

流石は球磨川禊といったところか、言われたことをそのままする事は無いらしい。しかし呼ばれている、のため元より帰るつもりが無かったのだからこの場合は黒神真黒の予想が最初から間違っていたというのが正解となる。

『せんせーさよーならー』

「……さようなら」

尚、その彼は過負荷<sup>マイナス</sup>であるこの男が今また気を変えて移動すらしなのではと考えたのだが、そんなこともなくその席から立ち上がり、黒板が無い方の、いわゆる後ろの扉を開けて姿を消す。実際『解析<sup>アナリシス</sup>』まで使って考えていたはずが、やはりそれでも行動が読めることはないようだ。

『いやしつかし、手刀で殺されるのは初体験だったなあ』『まあ確か傷物語じゃ手刀で殺し合うんだし、はまり役っちははまり役だよねえ』

さらつとメタ発言である。第何の壁であろうと関係なく発言してしまうその行動は、正直二次作者にとつては予想しきれないことなので止めて欲しい。

「……僕ですら自覚してはいけない事実を君があつさり言わないでくれるかな」

『うわ!』『いたの!』

「いや。単に真黒さんにまた特訓してもらおうと思つてね、すれ違つただけだよ」

いたわけじゃない。それだけ言うと、傷物語にて手刀を使つて殺し合いをする人間と同じ声優を担当する宗像形は去つていく。再び、球磨川禊は廊下にぽつんと一人。

『あー驚いた……』『喜界島さんを庇つてとはいえ、彼には昨日殺されたのになあ』『彼は何であんなに普通なんだろう?』

一般的に考えると確かに宗像形も異常人の範疇に入ることには確かだが、その異常からも異常であると刻印を押される過負荷が言えることではない。そして球磨川禊の場合には死んでいることが「なかつたこと」になつてゐるため、気に病む方が間違つていたりする。

『……あれ?』『いつか、「僕はロリに弱いのかな?」とか言つちやつてた気がするけど』『喜界島さんつて、ロリじゃないよね……』『いや、それを言つたら安心院さん、めだかちゃんもロリじゃなめだかちゃんもロリ時代に会つたんだつた』

こんな風に独り言ですら話が一八〇度ぐるりと盛大に転換するような人間を殺した

事實は、「なかつたこと」にしてもらつて正解なのかもしれない。何よりそのような人間を殺したのが初めての殺人であるという現実は特に、受け入れたくない面もあるだろう。

『じゃあロリ順番ではめだかちゃん、人吉先生、不知火ちゃん、太刀洗さん、財部ちゃんか』『……なんかそろそろ巨乳ロリとか来そうだよね』

今までの全員が貧乳ロリであつたにも関わらずそのようなことをぼやく球磨川禊。裸エプロンの方が見たいんだけどなあ、でも最近は裸ジーンズも熱いや、なんてことも続けて呟く。何にせよ裸に何か一着、というフェティシズムは外せないようだ。

「あの……球磨川先輩、ですよね」

『!?!』

球磨川禊はその言葉に、完全に不意打ちを喰らつた。……完全に。彼が。不意打ちを。負完全である彼に対して完全を冠するなど矛盾も甚だしいが、それに加え今の彼は心配がない。そのため誰かに何のきっかけも無しに訊かれるなど、それも初対面の人間に不意打ちを喰らうわけなど、ない。

さすれば、新しい敵。そう彼は何と無しに警戒態勢を敷こうかとも考えるが、本当に敵だとすれば茶化すのが彼。いつもの通りに、優しく声をかけて名前を聞いて、先輩として威厳を示せるように甘つたるく優しく優しく優しく優しくプラスに振る舞おう。



なんて当然嘘で、軽く人体の骨と同じ数ほどを散々に螺子込んだのに。

「わ、私は水俣真美みなまたまなみといます」

そんな螺子は、どこにも螺子込まれていなかった。彼は確かに骨一本に対し螺子一本使ったはずであり、声をかけてきた人間は確実に人の形を為していなかった。と語っていても今の彼にはそれ以外の驚きが頭を包んでいる。

水俣真美と名乗ったその少女は、彼が直前に予想した、巨乳ロリそのものだった。不知火半袖ほどの体躯にも関わず現在の黒神めだかに負けず劣らずな豊満さを誇つていそうなそれが視界に入った彼の脳内では「巨乳ロリ、キター!？」と延々と右から左にコメントがループしている。

『……………』

「実は今日付けで一年マイナス十三組に転入でして……他の人達に聞いたたら、球磨川先輩に案内してもらえばいいと言われました」

『え、あ、うん』『……僕は球磨川禊おおいたまなぶじゃなくて大分学おおいたまなぶだけど、大丈夫?』

その胸元に視線を思いっきり引き寄せられつつ、その体躯の小ささと乳房の大きさのアンバランス具合に戸惑いつつも、いつも通りの球磨川節を披露したつもりである。文字数が同じなあたり、あまりインパクトは無さそうだが。

しかし、球磨川禊にとってはそうなってしまいうくらいに彼女の姿がかなりインパクトがある。巨乳ロリというのもだが、個人的にはその誰かを彷彿とさせる床にでも付きそうなまとまった長髪と、リボンのような材質をした橙色のカチューシャ。髪型という外見情報も、印象的だったのだ。

「大分なんて名字の人はマイナス十三組にいませんよね?! しかも過負荷でも吐きそうな程に気持ち悪いけど可愛い先輩なんて、あなた以外にいそうにありませんが!!」

『僕そんな風に悪く言われてるようで可愛いとか言われてるんだ?!』

喜ぶことではないが。そもそも可愛いというのは男の子にとって誉め言葉ではない可能性の方が高く、何より過負荷なのだから誉められたからと言って喜んでしまつては駄目なのではなからうか。何にせよ、この少女に対しては球磨川節が不発が続いてしまえばかりのようだ。

『ま、もう僕が球磨川禊だつてことは認めるけど、何で君はずつと左上を見ているんだい?』

「……………(´▽`)までは前生徒会長に案内してもらつていて……大きいなあ、と」

……………前生徒会長というと。

『う』『わーお』『日之影くん、いたんだー』

「……………驚きが結構雑だな」

『知られざる英雄』は無いから見えていなかったはずは無いんだがな、と、小声で呟かれる。全く以てその通りであり、加えて日之影空洞は目の前の水俣真美と名乗った小柄な少女が隣にいとそその大きさが際立つ程には図体が大きい。

球磨川禊自身もお世辞には身長が高いと言えるものではなく、体付きも華奢と言えてしまうくらいで、彼を目の前になるとこれまた大きさの違いがはつきりする。

『やだな日之影くん、気付いてたに決まってるじゃないか!』『だつて僕だよ? 天上下球磨川禊だよ? 君がこの校舎に入った時から気づいていたさ!』

「……ああ、そうかよ。じゃあまあ、その転校生の案内は任せるよ。じゃあな」

『ばいばい』

「ありがとうございました」

『で? 君は何なんだい?』

そう言い、彼らに手を振り背を向けて歩く日之影空洞が去った後。球磨川禊は、その彼の背中を見送る態勢から視線も何も変えず一気に核心を突く。

「……は? 何の話ですか?」

『日之影くんはね、下校が早い方なんだ。けど今は完全下校時間を過ぎている。仮にも案内を本当に頼んでいたとして』『日之影くんがここまで時間をかけるわけがないし』『何故、生徒会長であるめだかちゃんじゃなくて、前生徒会長である日之影くんなんだい』

？』『それに、君は最初、気配のない僕に気付いた』『大量の螺子も消されたしねえ』『そこまでの過負荷だと、下手したら僕より大規模だ。さあ、それを予想しておきながらも一度君に訊くよ』『きみは、何なんだい？』

「あーだり」

しかし球磨川禊が聞いた言葉は、そのみだつた。それどころか、今現在においてその廊下に彼の姿は無い。水俣真美、その少女一人だけがそこに立っている、が先程の大人しそうな態度とは打って変わって、乱雑に右手で頭を搔いている。

「つたくよー、何だよこいつ。記憶とか全部一時的に『騙した』はずなんだがな。

『大嘘憑き』オールフィクションを安心院とやらに返したつっのが嘘だったのか？」

口が、悪い。これが過負荷、水俣真美、なのだろうか。騙したとは言っているが、彼女自身がその過負荷を説明したわけではないため、どのような存在なのかは断言できない。

「まあとりあえず今この場からは『騙した』し大丈夫だろう。下手したら戻ってこれねえけど、それこそそれで重畳だ」

一方、球磨川禊は落ちた。どうやら異世界だか何だかに飛ばされたようで、その地面に落ちたらしい。それもマーフィーの法則だとも言いたげに、当たり前のように頭

から落ちた。しかしそんなことも関係なくさらりとまたしても『劣化大嘘憑き』マイナスオールフィクションを自動発動させ、蘇生したまま球磨川禊は呑気に楽しげな表情をする。

『うお!? 異世界だど!?』『まるでジャンプみたいじゃないか!』『これはテンション上がるなあ!』

そう喜ぶ彼の周りは森であり、残念ながら異世界ではなく同世界(なのだろうか)、京都の一部地域である。しかし彼にとつてはそんなことは分かるべくもなく、まさかの異世界転生ではと意気揚々としていて迷いフラグがピンピンに立っていることにも気が付いていない。しかも、

『よし、とりあえず右に行こうかな』

とか言いつつも左に曲がった球磨川禊だった。

『うんまあ、迷うよね』

一時間も経たないまま、当然の帰結に対して文句は無い当人。薄々と異世界ではないことは気付いているものの、だからといって迷わない道理になるわけでもない。次いで、彼は中途から何者かから尾行されておりそのあたりも気になっているところだ。

水俣真美のように初対面の人間にも関わらず、球磨川禊の「なかつたこと」にされている気配を感じ取るその感覚の鋭敏さは一体何なのだろうか、それとも、球磨川禊のそれは「なかつたこと」になっても滲み出してしまうほどのものなのかもしれない。

『螺子込んだら出てきたりしないかな』『あ、そうだ、アレをしよう』『迷った時の定番、棒倒し！を螺子でしよう』『よっ——』

「……痛」

誰かの声。球磨川禊はそんな平穏なことをするわけでもなく、実際は地面に刺して、そのまま伸ばして曲げて伸ばして、相手の目下から突き出したのだ。相手の体勢までは把握していないため、下手をすれば心臓を貫いていてもおかしくはないが、声を聞くにそこまでの重傷ではないらしい。

しかし、そこから動いて逃げる、という意志を持った声でもないため、球磨川禊はさくさくと声の方向へと歩いていく。不思議と、過負荷の彼マイナスにしては珍しくその先へと足を踏み出すのが若干だけ億劫に感じつつ。

『さてと、誰かなあ』

ただ、声を聞くにそこまでの重傷では、と先述したが当の球磨川禊は腕一本程度であれば引き千切るくらい速度与威力で螺子込んだつもりだった。彼からするとその対象が男らしいという事実の方が見に行きたくない理由になっていそうだが。

だがだからこそ、見に行きたくない気配が出ていたから、球磨川禊は確認する。そこにいたのは、

死んでから良い腐敗具合の目をした男だった。

『……誰だい』

「誰でもないし、誰でもある。好きに呼んでくれていいよ」

……それは、名前が無いという事か。名前が忌々しいという事か。名前があまりすぎるという事か。球磨川禊は、判断できない。

『じゃあまあ、なんとなく「いーちゃん」でいいや』

「……………」

目の前の男は無言を貫く。常時へらへらとした笑顔の球磨川禊とは正反対に、死んだ目と腐った仏頂面を發揮し続けるいーちゃん。球磨川禊は、そんな彼に対して思うところがあるようだが、その思うところはすぐさま思考放棄した。

『ねえねえいーちゃん、何で君は途中から僕を尾けてたの?』

そして、そんなどうでもいいことよりも益になりそうな問題を問う。

「……………ここは玖渚っていう奴の私有地なんだ。知らない奴が入れる訳が無いし、仮に入ったとしても確実に迷う。尾けてたのは単に、君が空から降ってきたからだよ。不思議で不思議でたまらないし」

『そういうことね』『酷いなあ、ここも日本なんですよ? 仲良くしてくれてもいいじゃない』

「いきなり空から降ってきて大きい螺子を持って現れた奴と仲良くしたくないよ。それ

に尾けてたつてだけで半身の自由を奪われたしね」

言われて見れば、いーちゃんにはあの螺子に左半身を貫かれていた。それもかなり思いつきり、足は皮一枚といったところで、腕なんて事もあろうか前腕も上腕も貫かれてる上、その螺子の先は頬にも螺子込まれている。そのような状態で普通に喋っているのだ、この男は。

『劣化大嘘憑き』はまだ使っていないために、出血量も凄まじい。これで痛、だけで済むとは、もしかすれば球磨川禊以上の、何かかもしれない。そんな考えがうつすらと頭に過っている自分の脳味噌に対してほんのちよつとだけ驚きつつ、球磨川禊はいーちゃんに声をかける。

『……君には命の予備が無いんだろう？ だったらもつと叫んで助けを呼ばばいいのに』

「生憎、他人の前だと叫びたくなくなっちゃう病気なんだ」

『劣化大嘘憑き』。君の半身の傷をなかつたことにした』

そのよく分からない病気については一切の言及をせず、間髪入れず球磨川禊は自分でつけた彼の傷を癒す。いーちゃんは特に驚かず、ああ、戻ってるな。とでも言いたげな目で戻った半身を眺めて、立ち上がり、一言。

「……戯言だな」



『過負荷だよ』  
マイナス

決まった文句かのように、無意識にさらりと言葉を返す。

いーちゃんにとって零崎人識が鏡ならば。零崎人識にとって石風砥石が写真ならば。いーちゃんにとって球磨川禊は絵だった。似てはいる——が、何かが違う。決定的に違う。球磨川禊の場合、いーちゃんのように中身が空っぽなのではなく、嘘や欺瞞で溢れている。

いーちゃんの外つ面だけを写しただけのように。それも、歪に、少しばかり助長と空想を含めて、乱雑に、写真なんて言えないくらいに分かり切った風な。だからこそ、絵である。

「……ついてきなよ。とりあえず玖渚の家まで案内するからさ」

彼も無意識下においてそれが理解できてしまったのか、球磨川禊を案内することにしたらしい。彼の絵であるということは、どのようなベクトルにかはよるがその向いているベクトルに置いては限りない危険さを保有するということにもなるのだが、それは気付いていないのかもしれない。

もしくは、気付いていて尚、それならば防ぐ手立てを持っていないことを知っているが故にそのような諦めたかのような行動に打って出たのかもしれない。ご機嫌伺い、ご機嫌取り、だ。

『それはありがたいや。お言葉に甘えて、ついていくとしようかな。』

しばらくして、玖渚友の住む城咲のマンションに着き、階層を登り、いつもの部屋に入る。

と。

久し振りに、その部屋は赤色に染まっていた。

「……哀川さん」

「あー？ お前まだあたしのこと名字呼びすんのかよ。いい加減蹴るぞ」

「その姿で元気ですね……」

今の哀川潤は、まだ全身包帯という状態だ。そのため、赤色に染まっている部屋も元々の白さも相俟ってその包帯の白さが加えられ、どちらかと言うと良い感じに混ざり合い、紅白のような印象を受ける。しかし蹴られかねない状況であるいちちゃんは右下るれろを思い出していたり。

「病院、抜け出して来たんですか」

「違えよ、昨日退院したんだ。いや、それはどうでもいい、あたしは十月の事についていたんに文句しかねえんだよ。それを言いにかこねーよ」

「せめてそれ以外の件で来てください」

「お前これどうしてくれんだよ、二ヶ月経ってもまだ一〇〇パーセントに回復しないん

だぞー！」

前よりも回復速度が落ちている。

「……あ？ 後ろの奴誰だ？」

そんな文句も球磨川禊顔負けの速度で放棄して、気になったことをすぐに訊く。球磨川禊も哀川潤に対しては誰だろうという疑問しか抱いていない。若干ばかり、黒神めだかに似た、理不尽な強さを感じ取ってこそはいるものの。

「さつき空から降ってきた奴です」

『はじめまし——』

『!!』

気が付いたら球磨川禊は吹っ飛ばされていた。

気が付いたら球磨川禊はブツ飛ばされていた。

「!? ちょ——何やってんですか!？」

球磨川禊が間髪も感じずに撃ち込まれたその攻撃方法は彼も知っている技で、その威力はその身を以て知っていたりする。時計塔の上で、問答無用に、ぶちかまされた、あの。黒神ファントム。ただし、座りながらであり、攻撃した本人が満身創痍だったのにも関わらず、哀川潤に増えた傷は無い。

「あん？ いや、知り合いが言ってた奴に似ててな。お前、球磨川禊だろ？」

それどころか軽々と片足で跳ねて、元の椅子に座り直す始末。しかしその問いに帰ってくるのは無言どころか無音だけで、球磨川禊はそもそも心臓からも音が消えていた。

「……？」

「あ、やべ、手加減ナシで当たったから死んでるかも」

「あんたそれ「かも」で済まされねー!?!」

流石は人類最強。その名を知らなければ本名も正確には知らない球磨川禊だが、今、目視した。把握した。確信した。理解した。哀川潤は、黒神めだかよりも強い存在だと。

「まあ、知り合いによれば生き返るらしいし？ 待つとこうぜ」

「あんた、人一人殺したのに呑気だなあ！」

## 上の下 水俣町

やあ球磨川くん。潤ちゃんに完全完成版黒神ファントムと云つても差し支えない攻撃を喰らわされたようだね。全く、君はこの時期に何やつてるんだい？ 今はめだかちゃんと善吉くんのバトルの最中なんだよ？ いや、確かにあの『歩く病氣』をこの箱庭学園に侵入させてしまった僕にも非があるんだけどね。

みなまたまなみ  
水俣真美。

この子の説明はまたいつかにしてやるよ。そうがっかりするなつて。ん？ 巨乳口リ？ めだかちゃんをも凌ぐかもしれない巨乳なのに不知火ちゃんより口リだつて？ ……水俣真美の外見の話はどうでもいいよ。

やめろ、続けるな、語るな。それ以上君のキャラを壊すんじゃない。いい加減にしろ、殴るぜ。何だよ、そこまで君は水俣真美の話を聞きたいのかよ。

仕方ないなあ。君が被害にあつた水俣真美のスキルの一つだけだからな？

アブノーマル  
ああ、水俣真美は四つ、持つてる。

マイナス  
異常一つに、過負荷が二つ。あと一つは言葉スタイルというんだが……君はまだ知らないだろうから説明はしない。さて、話を戻すとして。

君が被害を受けたスキルは、過負荷だ。マイナス『合縁忌円』ホールブラックジョークという。このスキルは……：そうだなあ、球磨川くん、君のスキルは『なかつたこと』にするスキルと、『球磨川禊』にするスキル、だろうか？ 水俣真美の『合縁忌円』ホールブラックジョークは、『騙す』スキルだ。

まず最初。日之影空洞くんの記憶を『騙した』んだ。だから彼は彼女を案内していた数時間、生徒会長だと『騙さ』れ、下校時間がまだそこまで過ぎていないと『騙さ』れていた。勿論、その部分だけだから不知火ちゃんに『知られざる英雄』を喰われたのは覚えていたけどね。それに、あくまで一時的に『騙した』だけだから今は彼は水俣真美の存在すら覚えていない。

次に、君の気配を『騙した』。そして現実を『騙し』て、螺子を消した。それが真実。更に最後に、現実がまた『騙さ』れ、球磨川くん、君は京都の城咲というところに飛ばされた。かなり上空にね。

何故途中で君が『騙さ』れたことに気付いたからだった？ そりゃあ、君がひねくれ者だからだろう。正確に言うくと、君が劣化大嘘憑きを自動で発動させたんだ。君が死んだときみたいだね。

さて、説明はここまでだ。潤ちゃんによろしくね、球磨川くん。あ、あと××××のこ  
とだけで、彼は——

ちよ、おい、聞きたいとこだけ聞いてオサラバかよ！ 酷いなあ、球磨川くん——

「一時間経過してませんが、生き返りませんよ」

「……………気のせいだって」

「流石にそろそろ通報しますんで、自首してください」

「いや待て。あと一分待て」

「もうそれが続いて三〇分——」

途端、先程まで死体だった死体が起き上がる。ゆったりと、のらりと、くらりと。

『『劣化大嘘憑き』——僕の絶命を、なかつたことにした』『全く、それはないよ哀川さ』』

『『安心院さんによろしくねって言われたしき』』

そのさざりとし、淡々とした台詞に対し、哀川潤はけたけたと笑いながら、な？ と、言う。

「……………戯言だろ……………」

しかししいーちゃんにはあ、と呆れながら、頭が痛いらしく額に手を当てて、その溜息と共に言葉を吐きだす。

『嘘憑きなだけさ』

生き返ってきた当の球磨川禊はまたしても定型文に対して同じくそれへのテンプ

レートである返しかのようにそう、括弧つけて、言う。

「いやしかし、確かになじみんの言う通りだなー。いーたんより蹴り甲斐があるとはなー。それは誇つていいことだぜ、クマー」

『……人の名前をきちんと呼ぶつてことができないのかい?』『哀川さんは』

言いくいことを、さらつと言い放つ球磨川禊。相も変わらず余ほど命が必要ないと見える。『劣化大嘘憑き』を持つている彼にとつて命はそれ必要ないというか、掃いて捨てられるものではあるのだろうか、その過負荷マイナスは完全ではないのだからあまり冒険はするものではないだろうに。

『いーたんだったり、なじみんだったり、クマーだったり』『玖渚ちんだったり』

「待て、何で最後のを知つてんだてめえ。あとあたしのことを名字で呼ぶんじゃねえ」

もっぺん蹴るぞ、といつものように怒りながら言う。哀川潤も哀川潤で、球磨川禊の命を考えていないような発言。あのとんでもない攻撃は間違つてもいーちゃんには当たらないだろうが、球磨川禊には容赦しないようだ。

『やだなあ、冗談ですよ冗談』

「お前の場合冗談と嘘と本音が区別つかねえよ」

あたしの読心術も効かかねーしよ、と続けざまに愚痴る。

「え? 読心術が……効かない?」



「おおともよ。何だか、こいつには「心」が介在しねー、っーかよ」

愚痴の一言に対して「いーちゃんが反応する。心が読めない、そういう系統の発言を誰かにした誰かを、彼は知っているからこそである。」

しかしそれは、あの隔離された島で殺された、脳漿を撒き散らして暗殺者に殺された、超能力者。いーちゃんとも、哀川潤とも相容れなかった超能力者が、玖渚に言った事象より酷かった。

「見えない」ではなく——「効かない」。

『いやいやおいおい』『人をそんな風に言わないでくれよ、傷付いちやうなあ』『心外だぜ』『……お前は絶対傷付かねえよ』

心が存在しないなどと言われているのだからそう思われても仕方がない。

『あと、僕は箱庭学園に戻りたいんだけど?』

話の腰を完膚なきまでに粉碎した上で、球磨川禊は、凶器を、狂気を出しながら、おぞましく言う。先刻まで普通に会話していたにも関わらず、だ。混沌より這い寄る過負荷——球磨川禊と言われるだけはある。天上天下球磨川禊どころか、天下最下球磨川禊なのだ。

教えてくれなきや、心を折るぞ。少しばかり、遅いハロウィーンと言ったところか。

「あん? それは仕事依頼かよ?」

だが、人類最強こと哀川潤はそんな球磨川禊の狂気なんて気にも止めない。いつそその狂気をこそそを折り曲げてゴミ箱に捨てる風にさっぱりとした反応で返す。

『ああうんそうそう仕事依頼……なんだっけ、何でも屋だっけ』

「何でも屋って……ちげえよ、正確には請負人という。人類最強の請負人」

『これはこれは度々すみません』『人類最強の万屋でしたか』

「お前今人の話聞いてたか!？」

『請け負ってくれるんですか？ 僕ごときの頼みを』

どうやら話は聞いていたうえで故意に間違っただけらしい。頑張っただけとはいえないわざわざ場の雰囲気作りがてらに出した狂気をさらっとなかったことにされたのは不服だったのかもしれない。そんな球磨川禊に呆れつつ哀川潤は、

「お前、小唄と気が合いそうだな……いや、あたしは請け負わない。が、代わりに」

×ーちゃんを指差して。

×を指差して。

「い×」たんが請け負うんだぜ」

オバキルドレッド  
赤き征裁は、そう言った。

「いやいやいや——はあ!?! 何言ってるんですか!?!」

「いーたんが請け負うんだぜ」

先程の言葉をそのままリピートされる。

「そういう意味ではなく！ 何を根拠に言ってるんですかって言ってるですよ！」

「えー見て分かれよ、聞いて分かれよー感じろよー」

彼女は座ったまま、可愛らしく口を尖らせて何かの売り文句のように、文句を述べる。それを見て、この二人の掛け合いはおもしろいなと球磨川禊は二人の掛け合いを眺めつつ、そのような考えが走る。どちらも弱点が強さに埋もれており、否、片方は強さが弱点に埋もれており、どちらにせよ良いタッグだと感じざるを得ない。

最強と、最弱。

それこそが、最強タッグ。どこかの誰かたちも、そんな風なタッグだった。今はそれが拗れてしまっているものの、強さと弱さを受け持つのは——それだけでも最強の証だ。

けど、人の上には人がいるし。人の下には人がいる。無論「下」は球磨川禊であろう。ならばこの場合「上」は？ 完全院さん、あたりしか存在し得ないのかもしれない。

「いやだつてあたしは動けねーし。大体、いーたんはあたしのライバルになるつつつたじやねえか。だからこれがそのための試練、もと~~い~~依~~頼~~第一母~~だ~~ろ」

「……そもそも僕はハコニワガクエンなんて知りま~~×~~市~~×~~区~~×~~にある」ああはいそうですかありがとうございませう行つてきます」

×××××××  
×××  
××

台詞の間に台詞を言う哀川潤。球磨川禊にとって、安心院なじむ並みの暴虐無人さを印象付けてしまうくらいである。もしくは、安心院なじむと馴れ合ったことにより、そんな荒唐無稽な真似をしているのだろうか。

『とういか何で僕はこんな乱暴に引き摺られながら案内してもらってるんだい?』『何もしていない手が疲れちゃうよ』

「何もしていないのに疲れるのか……」

『ああ痛い痛い!』『せめて曲がり角は気を付けて!』

箱庭学園、ではなく水槽学園の制服の襟をいーちゃんに掴まれたまま、角も配線も関係無しにずるずると引き摺られる球磨川禊。このマンションの角はきっかり九〇度であるため、軽い刃物とも言えるくらいだ。

『それ以前にこのマンション白過ぎない?』『今にも汚れちまいそうだけ』

「お前はこれ以上汚れねえよ」

そういうと、ようやく手を離してくれた。髪も黒く制服も黒く腹も黒い彼であれば、確かに汚れる理由が無い。何より白いから汚れそうという辺り、過負<sup>マイナス</sup>荷らしい。綺麗好きである彼からすれば真つ黒な空間の方が清潔に感じるのだろうか。

「玖渚は何故か白色が好きなんだ。さっきのが「汚れが目立つ」って意味なら共感できる

けどね。因みに、エレベーターも白い」

『ここ三階だか三二階だかだっけ？ また一階まで一気に下りるんだねえ』『というかここ、京都タワーより高いよね』

「高いね」

『市役所辺りに怒られなかった？』

「国に怒られたらしい」

市どころか国。実にスケールの大きい話だ、球磨川禊にとつては国がそこまで京都タワーを大切にしているという事実も少しばかり現実離れしていて、意味不明だなあ、と思うばかりだ。

国に怒られたにも関わらず、住み続けている玖渚友やおそらく揉み消したのであろう玖渚機関についてはもう精神が凶太いという勢いではないが。

『エレベーターが降りる時の浮遊感と言ったら、堪らないね』

「子供か」

『エレベーターの止まる時って、目が回るよね』

「どの意味でもそれは共感できない」

ちよつとした受け答えをして、球磨川禊のいーちゃんに対する印象が更新される。最弱という彼と似た立場でありながら、役柄は人吉善吉のようなツツコミに相對するもの

だからだ。一般人、箱庭学園に通う生徒が一般人なのか、黒神めだかと戦う人間が一般人なのか、怪しいところではあるのだが。

そこでふと過負荷は疑問が一つ。役柄が人吉善吉と同じならば、伝家の宝刀、ノリツツコミは出来るのか、と。

『ねえねえ、いーちゃ——』

「いーちゃん、今すぐその人から離れて。」

しかしそのノリツツコミのための渾身のボケが如何様なものだったのかは判明する前に、そのような雰囲気ではなくなる。エレベーターが開くと、それはもうおっかない黒服の危なげな方々に銃器を突き付けられ、言葉を紡ぐと撃たれてしまうような状態なのだ。

そして、そう言った目の前にいる少女の身長は小さめだ。少なくとも哀川潤よりは小さく、未熟。加えて哀川潤と逆であり、青っぽい。否、蒼っぽい。球磨川禊からするとその蒼色は若干、水俣真美を想起させたりするのだが、それは置いておいて。

「……何でだ、友」

『何々？ いーちゃんの彼女？』

「今そういうノリはやめてくんないかなあ?！」

しかし、実際に彼女でもあるためにいーちゃんは否定しない。その関係性を否定が無

い現実だけで理解した球磨川禊は何となく嫉妬の念に駆られかけたが今はそういう場合でもない。

ただ、昔ならば、ムカつくこともなくただ単純に目の前に立ち塞がられたからという理由だけで螺子を構えていた可能性はある。劣化過負荷、マイナスマイナスと言えなくもない存在になつてしまった彼は、随分と甘くなつてしまつているのかもしれない。

「……友、単にこいつは学校に帰りたくて僕はその見送りを哀川さんに投げられただけなんだから」

「駄目。球磨川禊の場合、いーちゃんの『無為式』より酷くなりかねないの」「けど」

瞬。

連続した轟音と共に、その少女を含めたいーちゃんと球磨川禊、二人を除く全員の心臓の位置に。真横に線が掘られたヘッドの螺子が一本ずつ、螺子込まれる。人数が人数だったが故に建物も破壊痕だらけになつてしまつており、下手をすれば倒壊も有り得る。

「!？」

驚愕の符を出したのはいーちゃんだ。彼ら以外は、その符を出すことも敵わないくらいに素早く、封じられてしまつている。髪は白く抜けていき、全員の目が、いーちゃん

とは違つて純粹に死んでいく。

口もだらしなく開けられたりして、その表情からは生気が全く感じ取ることが出来ない。その異様な光景を瞬時に目の当たりにさせられたからこそ、いちちゃんは流石に驚いた。

「なっ……」

『いやあいちちゃんはこんな僕を庇うなんて』『君は過負荷マイナスみたいだねえ』『しかし、それでも君の言葉は甘いね』『過負荷マイナスだろうとそれは甘過ぎる』『だがその甘さ』『嫌いじゃあ、ないぜ』

恰好付けて、括弧付けて、言う。それがいちちゃんは不思議だった。それに、目の前には螺子による地獄絵図。理解するしなく、その行動原理から脳髓が拒否反応を示している。何が起きているのか。

何をしたのか。そんなこと、気にしては駄目なのだ。だがしかし、さしもの戯言使いであろうと、混沌より這い寄る彼のその犯した行為は、問わなければ始まらない。

「……何をした」

『却本作り』『なあに、痛みはない』『ただちよつとばかり、封印しただけさ』『警備員は百年くらい、その蒼つ子ちゃんなら三十年で抜けられるよ』

「……君の気が変わることを祈っておく。ま、死んだ訳じゃないならとりあえず行こう



か。玖渚のマンション内ならどこで寝ようと無事だろうし」

彼女持ちにはあるまじき冷酷さである。

『君の感情は欠陥マイナスなんだね』

「君に言われたくないよ、虚言使い」

『虚言使いか……いいねえ、それ』

「へえ、その水俣真美とやらにここまで飛ばされたのか。大変なご身分だね」

『ははは』『全くもってそうだね』

駅まで歩く途中、球磨川襖はいーちゃんに事情を普通に説明していた。車で送るだとか、飛行機に乗るだとか、色々と交通手段は考えたのだが車は出たくないといういーちゃんちゃんの意固地により、電車の乗り継ぎで手打ちとなったのだ。

それでも、幾分かの金銭が吹き飛んでしまったりするのだが。

「通称が『歩く病氣』っていうのは多分、水俣病からなんだろうね」

『あー、確かに水俣ちゃんが使ってたスキルの具現化が水銀っぽかったかも』

「……後ろからいきなり飛ばされたのによく分かったもんだ」

『僕が飛ばされた事を「なかったこと」にした』『確認するだけ確認して、そのあと』『その場に僕がいるという事実を「なかったこと」にしたらここに飛ばされたんだ』

この言葉、球磨川禊でなかったらいちちゃんも少しばかりは信じる気はあった。が球磨川禊だと無理だ。正当な事だろうと正直に言おうと嘘にしか聞こえない。何より、水銀みたいだったという情報が如何にも後付け過ぎる。

そしてこの男は本当にそんなことはしていない。やろうと思えば出来たことではあるのだが、そんなことを考えるまでもなく彼はどこかに飛ばされたという事実心浮かれていたためにそんなことを思いついていなかった。

「要らない嘘は吐かなくていいよ」

『無理無理。僕は嘘に憑かれている嘘憑きだからね』『三分に一回は嘘を憑かないと死んじゃうんだ』

「結構な頻度だね」

しかし何分に一回どころか、返す言葉言う言葉に嘘を混ぜているいちちゃんが言える言葉ではない。

『ひゃ』

「………何だい」

どうせ碌でもないことだろう、という溜息混じりの返事。

『後ろからロリっ子がついてきてるんだけど』『なにその子、いちちゃんのロリ奴隷？』

「!？」

「いーちゃんは驚いてバツと振り向く。どうも気付いていなかったらしい。さして気配を消していたわけではないため、いーちゃんでも勘付けはするのだが、球磨川禊の過負荷具合に痺てられているのかイマイチ索敵できていないようだ。」

「あ」

後ろにいたのは随分と暗い色にも関わらずツヤの濃い光沢が輝く黒髪で、その髪と太極図かのように相反する形で白磁のように抜けるような無垢に白い肌の、そしてその柔い肌を存分に見せるワンピース一枚を着た幼女。闇口崩子である。

「……崩子ちゃん。なに、いつの間に僕に気配を感じさせないほど尾行が上手くなったの」

「潤さんに教えてもらったのです。将来役立つだろうからって」

「あの人がいたいけな少女に何教えてんだよー」

尚、いーちゃんはいままで経とうとロリ奴隷だということを否定しない。彼女だけでなくロリ奴隷までいる身、それを球磨川禊はだんだんと普通に羨ましくなってきたりする。それもどちらも絶世の美貌を誇るといふのだから。

そして何故かどちらも幼女体型だといふのだから。

「それで、何の用事？」

「え……用事もなく近くにいたら駄目でしたか……？」

「いやいや勿論良いよ良いとももう本当いてくれて良いよいやむしろ僕の方からいってくださいと頼むところだったんだ崩子ちゃんはいるだけで僕にとっては癒しだし眼福だし疲労なんて感じなくなるし楽しくなるし嬉しくなるし最高最高の高くて奴だよいやあ崩子ちゃんは僕のそんな感情を理解している上に空気も読めていてとても賢いし可愛いし良い子だ！」

球磨川禊でも不自然と思えるくらいの意見の変え方。何と、あの球磨川禊が絶句してしまつたほどである。いつそいーちゃんがどこまで闇口崩子に対して甘いのか気になるくらいに。

「つて言つても、ここ、あの元骨董アパートから相当離れてるよ？」

そのテンションをすつと戻して、素朴な疑問を一つ言う。元骨董アパートとはいーちゃんと闇口崩子、そして他にも多数の住人が暮らしているアパートのことである。元々はその骨董アパートという名に違わず古めかしい建物で家賃も格安の破格だったのだが、とある事情でとんでもないことになつた経緯がある。

「いえ、虫を殺そうとしたら戯言遣いのお兄ちゃんに気配が似ている可愛い猫を見つけたので追いかけていたら道に迷つてしまい、とりあえず細道から抜け出したところ、戯言遣いのお兄ちゃんの姿を見つけたので駆け寄つたのです」

「その猫、黒猫だらうな……」

自分が不吉だと自覚しているいちちゃん。彼の場合、どちらかといえば鳥の方が似ているはずだが。

「それにしても」

若干シヨックを受けているいちちゃんはさておいて、闇口崩子は目線を球磨川禊に移して、一拍置く。

「戯言遣いのお兄ちゃんが一緒に歩いているこの方は殺した方がいいと思うのですが、どうでしょう?」

『へえ、ただのロリ奴隷じゃないんだね』『その年で「殺した方がいいと思うのですが」って』『いやあこの驚きは財部ちゃんがパンツを見せながら苛めてくれた日以来だ!』

要はそこまで驚いていない。流石は球磨川禊、こと生死を問われる事案に関しては暇がない、慣れてしまっている。というよりは、慣れる気が無いのだろう。気にする気も無いのだろう。彼にとって、些細なことなのかもしれない。

『まあ箱庭学園じゃめちやくちや恐くて怖い眠りロリ姫がいるからね。そこまで驚かないけど、初対面の人に失礼じゃない?』

「あなたの気配の、存在の方が失礼ですよ。言うこと言うこと、とことん私の父親と真逆で苛つきますね。戯言遣いのお兄ちゃん、殺しの許可をください」

「そいつに関わったら崩子ちゃんだと心が折れすぎて曲がるから却下」

心が折れすぎて曲がるとは。心が曲がりすぎて折れるわけではなく、折れすぎて曲がる。否、この場合は「禍害」という意味合いなのだろうか。骨董アパルトその他から人気がある彼女が球磨川禊のような負完全に染まってしまふのは拒みたいのか。

「ですが」

「あんまり聞き分けが悪いようだ、帰った時のお仕置きが悪化す「今すぐ帰りますごめんなさい」

その言葉を聞いて、彼女は目にも止まらない速度で走り去っていった。

『……どんなお仕置きをしたらあなるんだい』

「秘密」

しばらくして、球磨川禊といーちゃんという最悪タッグが駅に入ろうとした時。いーちゃんの携帯へと、哀川潤から電話がかかってきた。嫌な顔一つせずさらつとすぐさまいーちゃんは出たが、内心では何となく嫌な予感はしている。

「あたしあたし！ 今さー、玖渚ちゃんに捕まっちゃった。釈放されたいから一五〇万振り込んでくんないか？」

「真実と詐欺を混ぜないでください」

「ま、起きたら玖渚ちゃん達が螺子伏せられてた？ って感じかな。とりあえず刺さって

た螺子抜いたらさあ」

抜けたらしい。『却本作り』<sup>ブックメーカー</sup>は怪力や力ずくで抜ける代物ではないはずだが、一体どう  
いう原理で抜いたのだろうか。おそろしや哀川潤、下手をすれば安心院さんよりも凄ま  
じいのやもしれない。

「意識が戻ったみたいで、あたしが捕まえられてな。いーたんとクマーを連れ戻せーつ  
て」

哀川さんがそう言い切った瞬間、辺りが静まり返る。駅近くであり、街中であり、間  
違つても人々の喧騒が一瞬でなくなるなど有り得ない場所。そんな場所で、人影すらも  
すんと消えたのだ。

「君が球磨川禊かい？」

そんな中、いーちゃんんと球磨川禊の前に二人だけ、目隠しをした女性が現れる。その  
現れた瞬間も目視できておらず、いーちゃんは戸惑つたままだが、片方の女性は球磨川  
禊に対してそう言った。

『うん？ そうだけど何、君？ 僕のファンかな？』

しかし球磨川禊は特に何も思わず、いつも通り言葉を返す。

「おーい、いーたん聞してるかー？」

「すみません哀川さん、玖渚にも無理だつて言つといってください。今から、多分ヤバくな

りますので」

「あ？　おい、あたしを名字で呼ぶ——」

流石に緊急事態と身体が分かってしまったのか、いーちゃんは電話を切る。哀川さんに蹴られないよう祈れなくなるまで祈つといてあげようというのが、その行動を見た球磨川禊の感想だった。

『で何？　また知り合い？　今度はいーちゃんのそういうフレンド？』

「いねえよ」

いないそうだ。

彼女とロリ奴隷がいたために、球磨川禊からすればもういーちゃんという人物の周りどれほどのヤバイ関係の女性が紛れていようと驚かないし疑問に思わないことにしたところだというのに、そういうフレンドはいないらしい。

「多分だけど、多分だけど——時宮じゃないかな」

『ときのみや？』

『『呪い名』序列……って言っても分からないのか、うーん』

いーちゃんの地域に関しての知識が乏しい球磨川禊に分かりやすく言うには何と説明したものか、と彼が言葉に迷っていると彼に時宮と想定された女が喋り始める。ノイズがかかっているかのように、判別が上手く付かない声。だが、その声の主軸は、球磨



川禊だけは何となく、知っている声だ。

「正解正解。記憶力悪いんじゃないやなかったの？ 『いーちゃん』。まあ僕は『いーちゃん』じゃなくって球磨川禊に用があるんだよ。因みに僕は時宮刻弥きざみね」

『そうかい——』

螺子。

直感でも直観でもそうとしか思えないほどの量の螺子が時宮刻弥に投げられた。腕だろろうが足だろろうが心臓だろろうが脳味噌だろろうが、全ての部位を破片にして肉片にする気しか無いほどの量。彼女からすれば、視界が螺子まみれになったことであろう。が。

「おいおい球磨川くん、不意討ちとか当然のことをしないでくれよな」

時宮刻弥は目隠しを外していて。

『あ………安心院さん!?!』

球磨川禊から見たら安心院なじみでしかなかった。

声、姿、体格、喋り口調。性格においては今しがた判別しづらいが、少なくとも現在確認できる全ての情報において、球磨川禊から見た時宮刻弥はどうしようもなく安心院なじみだったのだ。

「……………操想術師……………！ そいつは——」

「おっと！ 君の相手は私だよーん！」

そう言い、立て続けに球磨川禊へ時宮の情報を教えようとしたいーちゃんを制止したのは、死んだはずの占い師。否、天才・占い師。鳥の濡れ羽鳥にて出会った、相容れそうにもない、あの人間。

「な——」

「私は時宮刻弥の姉、時宮指針ししんだよ。私達姉妹は相手の『嫌な奴』になる操想術師なんだ」  
時宮時刻じゃないだけにやりづらい。不意討ち過ぎて対応できていない。覚悟が決まっていないからまんまと術中に嵌ってしまった。時宮だというのだからそう判断した時点で何かしら心的感情に訴えかけてくることは危惧して然るべきだった。いーちゃんは時宮指針の、特に面白くもない攻撃を避けながらそう考える。

とにかく、はやく慣れねば。と。

「……『嫌な奴』、ですか」

「そうとも。とは言っても私が一体誰になつてるのかなんて、わかりやしないんだけどね」

「ということは『嫌な奴』の前だと自身の本領を發揮し過ぎて本末転倒になることを狙っているということなんですかね。それとも、嫌よ嫌よも好きのうち、という意味での『嫌な奴』で、本気を出せないようにして隙を狙うということなんですかね？」

『僕の相手が安心院さんだから多分後者だよ』

「今は黙つといて」

球磨川禊の応答をさらりと流す。

「んー？ ま、そうなるかな。だって今、心情が揺れてるだろう？ なら私の思惑通り、少年は元々の力を出せるわけがないのさあ。て言っても特に鍛えていゝるわけでもない君相手だと身体関係は問題ないがね」

問題は大有りだったりする。いーちゃんは確かに膂力こそめばしくもないものの、意識の在り方が違うからだ。人間、タガが外れていると例え力が無くとも恐ろしいことになる。その骨頂、とまでは言わないが、筆頭になれるくらいの男ではあるだろう。

「つまるるところ、ガワだけだと？ その人間の、能力などは一切。性格すらも」

「否定はしないよ、でもそのあたりは君という人間が補完する。当たり前障りのない、それらしい言葉を連ねておけば勝手に補って未完成を完成させてくれるんだ」

本当にガワだけ。外側だけ。姿形だけ。ならば、いーちゃんにおいてはその操想術の意味が為されなくなる。確かに外見さえ似ていれば驚いてしまうが、彼が彼女を苦手だと思っていたのはその性格そのもの。

それ故、その問答でいーちゃんは落ち着く。落ち着いてしまう。落ち着ける時間を与えられてしまう。

嗚呼、何て不完全な術だろうか。

時宮時刻なんて比較にならない。低俗すぎる。低レベルすぎる。つまらなさ過ぎる。くだらなさ過ぎる。きつと、中身までも投影できてしまうような術だったならば、いーちゃんにとって大打撃だったろうに。

「では、もう一つ訊きますけど」

そして、

「あなたは」

人類最弱の戯言遣いは、

「誰にも。世界中の誰にだろうと、」

時宮指針の、

「きつとそちらの姉妹の方にすら、」

心を、

「本来の姿を見てももらえない、可哀想な孤独な孤高の、独りぼっちさんなんですね。」  
折る。

「どうしました？ 時宮指針さん」

気持ち悪い。それが、時宮指針が抱いた最初の率直な感想だ。粘りつくような、まわりつくような、気持ち悪さ。よりもよって、時宮指針は失敗したわけである。もう

終わった「狐さん」に気に入られようとして、『いーちゃん』を狙ったのはただの失敗だった。

いや、ただのではない。完全なる失策だった。

彼女の意識は失墜した。

『……へえ』

球磨川禊がそのいーちゃんの戯言具合に感心した途端、いーちゃんは彼女の頭を掴んで、目を合わせる。死んでから、死体としては絶妙なタイミングを迎えている腐り落ちた瞳と、合わせられる。

「あなたは、時宮時刻に近いんですね。僕が会った時宮時刻も実はそういう類いの操想術師だったらしいです」

その時宮時刻とは、催眠にも長けていた、「狐さん」が想影真心を制御するにあたってその三分の一を務めた時宮時刻。そう、事実、いーちゃんは西東天の十三階段のうちの一人、時宮時刻を突破してしまっている。最初から、勝ち目など無かったとも言える。

「……やっぱり心の問題だったか」

いーちゃんが呟き。時宮指針の頭から手を離し、顔も離す。

「結構美人さんなんですネ」「!?」

途端、発した言葉に対し、金髪ボブカットの少女が驚愕の顔をする。眼を見開き、見

たことを無いものを見るかのような、そんな目線。多少の冷や汗も掻いているだろうか、少なくとも口腔内は乾き始めている。

「なっ……まさか、見え……？」

「『嫌な奴』なら『嫌な奴』だと思わなきゃいい話でしょう？」

「そんな、人間にはしづらいことを、出来るわけが——」

嫌な奴。それが操想術の対象ならば、その対象は生きている人間ならば絶えないことが普通なはず。多少なりとも、嫌だなあと思う人がいる。そのため、この術は本来ならば少しかけであろうと人を揺さぶることが確実なのだ。

だが、いちちゃんは違った。

何故なのか。と、言う。

「僕は。極端な話、言ってしまうえば全部嫌いですよ。嫌ですよ。でも、そのなかで一九年近く生きてきました。『嫌な奴』を『嫌な奴』にしない自己暗示なんて、毎日してるんですよ」

「だからって！ 時宮の操想術を破られるなんて——」

「いいんじゃないんですか、別に。やっと他人に本来の姿を見られて、良かったでしょう」

「！」

その通りである。今まで、妹ですら見れなかった時宮指針の姿が、他人に、見られているのだ。それは、何とも、

「……そつちは終わったのかい、球磨川くん」

謎のトリップに入ったらしい時宮指針を置いておき、球磨川禊の方を気にするいちやん。この二人とは違い、球磨川禊と時宮刻弥の二人は盛大に肉弾戦をしているため、本来ならば答えられる状況ではないはずなのだが。

『え？ いやいやいや僕にはそんな話術がないからねえっ！』

そんなことも考えずに喋る球磨川禊。そして安心院なじみ、否、時宮刻弥の蹴りがまともに入る。正中線、腹のど真ん中。若干ばかり中の物が出そうになっているが、嘔き出すまでには至らない。

「わっはっは、やつとまともに君に蹴りが入ったねえ」

『……僕相手に「まとも」を云うなんて、笑い転げそうだぜ？』

ただ、こちらでもガワシしかコピーしないその欠陥が、仇となる。

「それがどうしたんだい？ 一応僕の操想術は『嫌な奴』且つ『最強』の方なんだぜ。だつたら僕は、君に完全勝利を出来るんだ」

確かに、『劣化大嘘憑き』マイナスオールドフライングで怪我を戻してはいるが、球磨川禊はまともに入っていないことも、かなり攻撃を受けてしまっているのだ。幾度となくボロボロになったことのある

る服が、またしてもボロボロに。

そしてそのボロボロが一瞬で戻る。が、またボロボロになる。しかし、そんなことはどうでもいい。問題は、時宮刻弥のその迂闊な発言群。こともあろうか相手は球磨川禊。球磨川禊である。

混沌よりも這い寄る過負荷。混沌よりも、這い寄ってくる存在なのだ。そんな奴に、這い寄る理由を与えてしまったのが彼女。

『だったら、僕に勝てなかったら君は明日から』『裸エプロンだ』

「はっ……球磨川くん、君はまだそれを言うのかい、懲りないねえ。まあいいだろう、僕が君に勝利を収められなかったら、裸エプロンでも裸ジーンズでもなんでもしてやるよ」

『……僕に対して、「完全」を称するなんて、本当に』『片腹痛いぜ、金髪ロリ』  
「……え？」

金髪ロリ。そう呼ばれたことに驚く時宮刻弥が違和感を感じた右肩を見ると、螺子。しかし、今まで投げていた螺子と何ら変わりはないプラスヘッドの螺子。それがまるで、彼女の右腕を螺子切るかのように螺子込まれている、

『マイナスオールフイグシヨン』  
『劣化大嘘憑き』

ような、気がした。



『螺子が君に螺子込まれるまでの時間をなかったことにした』『そして』

『君の訳の分からない操想術とやらもなかったことにした』

その言葉を発されてから、数秒の無言が続く。観戦しているいーちゃんも、おお、と言っていてどうやら時宮刻弥の本来の姿を目視できたらしい。そもそもとして時宮指針を破った癖に、時宮刻弥を破る気が無かったというのもどうだという話だが。

「!? そつ——そんなこと、を、出来るわけが……ないだろう!？」

『何で?』

「きつ君の能力は理不尽な急速快復だろう! だつたらー!」

『あはははは!!』『本当に片腹痛いし笑い転げちゃったよ』『いやいや時宮さん。時宮刻弥さん。』『僕は「完全」じゃなくて「負完全」だ。そんなどこぞのアセロラオリオンじゃないんだよ』『「現実」<sup>すべて</sup>を「虚構」<sup>なかったこと</sup>にする——いや、今は劣化してるから全てとはいかないけどね』

だが、時宮刻弥の能力くらいであれば、「虚構」<sup>なかったこと</sup>に出来てしまった。まだ使い始めて二日目であるために、彼自身まだ限度が分かっていない。元々の『大嘘憑き』<sup>オールワイクシオン</sup>ですら、「虚構」<sup>なかったこと</sup>に出来なかったものがあるというのに。

「……そんな、使い方からして、——」

『その思い込みが君の弱点だね。そして僕は嘘憑き、大嘘憑きだ。』『やれやれ、君の未来

が見えるようだぜ』

運絡みとも言える勝利だった。ああ、勝利だとも。球磨川禊が、勝利したのだ。だが、運絡み。それも、相手が間抜けでなければ勝てる見込みなどなかった。運と運と運が混ざった上でのちよつとした、しようもない勝利。全く、それこそ片腹痛い。

それを勝利と認めるなど、週刊少年ジャンプファンが許すわけがないだろう。虚しくない勝利など、球磨川禊のモットーのうちではない。勝てたなど、言いたくもあるまい。『また勝てなかった』『とは言えないなあ』『でも』『やつと勝てた』『なんて絶対に言いたくない』『こんなしようもない感じで勝ちたくないよ僕は』

「馬鹿をつ……言え………」

一度は膝から崩れた時宮刻弥だったが、どうやら簡単に勝たせてくれるわけではないらしい。例えば操想術を消されようとも、相手はいち人間。そして何より、ただ単純に打ち合いをしてのめされただけで、彼女は心が折れていない。

球磨川禊のいつもの、過負荷マイナスとしての負越マイナスがまだ発動していない。だから、戦闘はまだ終わっていないのだ。

「時宮病院を、嘗めるなよー！」

『おつと』『これまた』『実直で愚直だ——まっすぐ突っ込んでくるなんて』

しかし、操想術を失った時宮など、その恐怖が薄れてしまっている。加えて、この二

人は名前から分かる通り、時宮としては及第点ギリギリの者達であり、何が間違っても少なくともいーちゃんをどうこうできるレベルに達していない。

『ま』『それが正解なんだけど』

「は!？」

本当にまつすぐ突っ込んできて、時宮刻弥が彼に膝蹴りを喰らわせたところ、思い切り吹き飛ばされて地面へと後頭部スライディングをキメる球磨川禊。盛大にアスファルトを擦っていったせいで血の跡が酷い——が、すぐにその怪我也血も「なかったこと」になる。

『いやー』『まともな肉弾戦とか、僕参っちゃうよ』『どこに打ち込まれても致命傷だもん』『大変だなあ』

「どういうことだ……? さっきまでのあの勢いは虚勢だとも!?」

『うんうんそうそう』『虚勢』『良いよねえ虚勢』『なんてったって勢いが虚ろなんだぜ?』『最高だろ』

話が地味に噛み合っていない。いや、噛み合ってはいるのだろうが、歯車で言うのなら本来の型と違うものと組み合わせられているかのような、絶妙に微妙な、そして致命的なズレが起きている。

時宮刻弥は意味が分からない、という顔をしつつも勝利のために球磨川禊への一方的

な暴力をしかけてみるが、そのどれもがクリティカルヒットを成し遂げる。が、無論すべて「なかったこと」にされ、次第に彼女の体力の方が保たなくなっていく。

「何……なん、だ………お前は……！」

『いや』『え?』『君、僕の名前知ってたよね?』『能力についても予想してたし』『なのに今更僕の正体を訊かれても困るなあ』

殴れば骨が折れる音がするし、蹴れば皮が裂ける音がする。頭突きをしても頭蓋が割れる音がしたし、叩いただけでも関節が外れる音が響いた。だが、その痛みが「なかったこと」になっているとはいえ平然と。

球磨川禊は飄々と立ち上がる。

「いい……もういい……! 私を負けでいい! だから、見逃してくれ! 嫌だ、もうお前とは関わりたくない!」

『まだ僕何もしてないんだけど』『その言い草はちよつと不満だなあ』『ほら、諦めは最大の敵だつて言わない?』『そういうのは駄目だと思っただよ』『でも確かに金髪ロリっ子相手に嫌がられるのも嫌だなあ』『じゃあ、そうだ』『もつとこう単純に分かりやすく勝負を決めようじゃないか』

「……何をすつて言うんだ………?」

疲れつつも身構えたままの時宮刻弥と目を合わせる球磨川禊。そのまま視線を下へ

とズラしていき、一度螺子を螺子込んで螺子切られた服から見える肌を通り過ぎ、その足元まで舐めるように見た。ところで、また顔を上げて。

『野球拳しようぜ』

「アホか」

後頭部にいーちゃんの手刀が直撃。

「人目がなくなつてるとはいえそんなはたしない勝負を今からするな、僕が困るわ」

『ええー、でもいーちゃんも見たくない?』『裸』『それも徐々に脱いでいくことによつてどんなフェティズムが開花するのか分からないドキドキとか』

一応は思春期男児、ふむ、と顎に手を当てて考えてみるが、

「いや球磨川くんが負け続けて裸になつて終わりだよな? そういう存在だよな君?」

『うつわ本当じゃん』『気付いてくれて助かったぜ、さんくーいーちゃん』

「その言い方は凄まじく友と被つてから今後絶対に言わないでくれ絶対にだ」

ぼかんと惚けたままの時宮刻弥を放つたまま、虚言と戯言の応酬は続く。球磨川禊が球磨川禊であるだけに、玖渚友を彷彿させるような言動はしてほしくないらしいーちゃんという新しい一面が見られたが、彼女にとつてはそんな会話はどうでもよく。

ただ、どうしても野球拳を言い出した彼と、それをチョップで防いだ彼を見ていると勝負をするのが馬鹿らしくなつているところだった。要の操想術も「なかつたこと」に

なっているうえ、妹の指針は謎にいちちゃんを見つめたまま無言。

そのため、身構えるのをやめ、小さく挙手して、それを二人の欠陥品が気付いてこちらを見てくれたところで質問をぶつける。

「えっと、どうなった？」

その質問に対し、その二人は互いに見つめ、

「こっちの不戦敗で」

『また勝てなかった』『ということだ』

話はあっけなくつまらなく終わった。

## 下 水俣市

「さあ、駅に入つて新幹線に乗らないといけなただけど。持ち合わせある？」

時宮姉妹が退去していくのを見届けたところで、いーちゃんは気分を変えるように訊く。

『んー？ ないよ？』『過負荷だからそうそう持つてないなあ』『いやまあ、持つてる』

過負荷マイナスもいるけどね。親が遠巻きに見てるだけの過負荷マイナスだとそれなりに持つてる』

「どつちにしろ君はないんだね……」

僕の貯金も今月は引き出せないしなあ、と言いながらいーちゃんは携帯を触る。そのままダイヤルから、とある人物に連絡しようとするのだが、そこで一つ、思い出す。とても嫌な顔をして、それはもう嫌な顔をして。

「……あ、そういやさっきの戦闘前に哀川さんから用件伝えられてたんだ……うわー、電話したくない」

『僕を連れ戻せ、とかだっけ？』

と、言いつつもそのまま電話をかける。

「そうだったはず……あ、出た」

「おいおいーたん、さつきはそつちから切つといてその後こそつちからかけてくるつてどういいう度胸が出来たんだよ。帰ってきたらさば折りされる覚悟はあるんだろうな、え?」

「い、いやいや、ちよつと退つ引きならない状況だったんですよ。で、今から駅に入ろうとしたんですが、この虚言使い、持ち合わせが全くないらしいです。それで貸してもらいたいんですよ」

「却下。とにかく帰つてこい。さもないと皮全部ひつpegすからな」

「どこの拷問ですか、それ!? ……て、切れたし!」

この場合は球磨川禊が悪いのか、水俣みなまたまなみ真美が悪いのか、いーちゃんが悪いのか、哀川潤が悪いのか、玖渚友が悪いのか。何にせよ、その責任を負いつケを払うのはいーちゃんであることは確実である。

「仕方ない……一回戻るよ」

『はいはい』

言えば、悪いとすれば球磨川禊の運。球磨川禊自身は悪くない。僕は悪くない、という奴だ。いーちゃんの運も悪いと、言えなくもないのだが。

「やつほー、いーたん」



「呼び返しておいてやつほーも何もないでしょうよ……」

『あつはは！』『いやしかし、袁川さんなら戻ってくる途中で捕まえると思っただんですがね』『何もしませんでしたねえ』

「……それは挑発と受け取ったらいいか？」

球磨川禊は思いきり睨まれる。行きはよいよい帰りは怖い、といったところか。箱庭学園に戻ろうとしたらこのような怖いお方に怖い眼で怖く睨まれるなど、早々ない体験である。

「つーかさ、玖渚ちゃんはやたらクマーのことを煙たがってたんだが。お前、何やったんだ？」

『何もしてないのに……』『ちよつと不意打ちで螺子伏せただけなのに……』

「……あれ、お前のせいだったのか。そりゃ嫌われもするだろうよ……」

「それ以前に、ただでさえ『普通』になりつつあるんですから。こいつの障気は耐え難いんでしょようよ」

『……何か酷い事しか言われてない気がするけど』

「いやいや、長年いーたんの傍にいたんだから、それはないだろうな。多分」

「こいつと一緒の扱いつていうのは、些か不愉快なんですが」

『僕もちよつとごめんかなあ』

「しかしだな、やっぱ似てるんだよ。ま、どこその零崎とは違うんだけどさ。上っ面が似てるっつーかね」

その場合、果たして不知火半袖はどうなるのだろうか。球磨川禊と似ていると多数から宣われた、あの少女は。本人曰く、全く似ていない、むしろ止めてくれだとか何だとかそんな話だったはずだが。

「あ、そーいやさあくマーよ」

『何です?』

「箱庭学園つてさ、あれ、なじみんが計画した……何だっけな……フラスコ計画だっけ?

まだやってんの?」

流石は人類最強、離れている学園の情報でさえお見通しなんだそうだ。

『やってますよ。いえ、箱庭学園としては凍結中です。ただ、安心院さんが個人的に続行中です』

「はあ? 個人的に?」

『とある普通ノーマルを主人公化させようと、今頃修行中でしょうね』

「なっ……普通ノーマルにさせてんのかよ、あれを!」

普通といつても、ただの普通じゃない。主人公の隣に十三年間続けた、根性の塊。

球磨川禊は本当に、彼が妬ましかった。彼と彼女の関係性が妬ましかった。彼女の彼に

対する気持ちちが妬ましかった。

あの子に先に会ったのは球磨川禊だと言うのに。なのに、あの子の気持ちにも気付いていない。あの子が何故ああなのかも分かっていない。そんな、無責任な彼が本当に――

――妬ましかった。

『そうですよ。一介の一般の普通の高校生の恋心を理屈に、主人公に勝てる主人公にしようとしてるんです』

「……………まあ……………なじみんが選んだんなら、普通じゃない普通なのは分かるが……………」  
「あの……………話が読めないんですが。フラスコ計画ってなんですか？」

途端、喋ってなかったイーちゃんが喋る。流石に理解が追い付かなくなったらしい。球磨川禊に対して呪い名など何だかんだ理解しがたい単語を連発していた彼だが、自分の知らないことはさらっと質問していくらしい。

「あー、やってることはお前の大っ嫌いなあそこと一緒だよ。人為的に、天才を作り出す。又は、主人公を作り出すことを目的とした大規模な学校裏の極秘計画さ」

「ああ、だから哀川さんが行かないんですね」

「ご察しのよろしいことで。あと名前で呼ぶな」

はいはい、といーちゃんが流す。

「あたしが行ったら、取っ捕まえられて監禁されて、材料にされるのがオチだろうよ」

「潤さんだったら、捕まらないと思いますけどね」

「そう簡単には問屋がおろさねえよ。箱庭学園の規模は玖渚機関に匹敵するぜ?」

「……ただの変人奇人びつくり箱な学園が、ですか」

「ただの変人奇人びつくり箱な学園『だからこそ』だよ。つーか、クマーはそのびつくり箱に戻りたいわけ?」

『あれ、戻してくれるんですか、哀川さん』『いやあそれは感激ですね。今すぐ帰りたいんですよ』『じゃないと親が心配しますしねー』

「いいぜ、別に。ただし、玖渚ちゃんから頼み事があつてよ。なじみんからも同じことさつき頼まれてよ」

『あの人善吉ちゃん修行中にここに来たの!』『何でいるんだよ、というか連れて帰ってほしかった!』

その球磨川禊の怒涛の反応を無視して、哀川潤は一つ、その頼み事という名の条件を提示する。無論、そんなものは嫌な予感しかしないのが当然だ。何せ、言う人間は人類最強の請負人。

そんな請負人への依頼、なのだ。無理難題に決まっている。例えば、  
「帰りたいかったら、あたしを倒せ。」

とか。

「ちよ……いやいやいや！ 何言ってるんですか!? あんたに勝てる人間なんていないでしょうよ！ 今や真心でも難しいってのに！」

「ん？ いや、別に仲間呼んでくれていいんだぜ。あ、でもやっぱ真心は駄目な。あいつは桁違いだからさー」

「仲間連れてでも戦いたくありませんから言ってるんですよ！」

『甘いなあ』『見苦しいぜ、いーちゃん』『ま、その甘さも嫌いじゃあないけどね』『しかし』『たかが人類最強でしょ？ 無敗じゃないんでしょ？ だったら！』『僕の価値をあなたの負けによって決めるとしますよ、哀川さん！』

「……………好きにしてくれ…………」

ついてけない。そう言つて、いーちゃんはそこに座り込む。どうやら観戦するらしい。

「おいおい。何言ってるんだよ、お前過負荷マイナスだろ？ 過負荷マイナスは、価値がないから負越マイナスなんじゃないのかよ？ まあいいや、いーちゃんに似てるお前のことだ、楽しませてくれよ

！ 球磨川禊！」

『何の気なしに飛ばす奴が悪い。だから』

『帰りたい奴を止める奴が悪い。だから』

『先に仕掛けてきたほうが悪い。だから！』



達と戦わしていたのと似た状況。既に、玖渚友と安心院なじみには負けている。

二人に負けて、一人に勝てるか。

勝てない。

「……勝てないと仮定しても、ここまで戦えれば十分なんだろうけどね。僕じゃ、十秒も保たないだろうなあ」

「！」

しかし。

勝てなくても形勢が逆転することは多々ある。その後にもまた形勢逆転されるとしても、だ。それが今だった。

「……なっ……………」

深々と哀川潤の正中線上に、心臓の位置に、ぴたりと。ヘッドの窪みがマイナス型の、螺子が一本。刺さっている。長く長く、胸を貫いて床にまで先端が刺さってしまったている、一本の螺子。螺子込まれた、螺子。

「……………これが……………『却本作り』……………っ!!」

安心院なじみから聞いていたのだろう。その効能を、知っているようだ。

「……………『あんまり『劣化大嘘憑き』に頼りたくなかったし』『同じ技も使いたくなかったんですけどね…』『哀川さん』『あなたに』『却本作り』が刺さるまで





『ならばお望み通り見せつけ——』 『——ません!』

勿論、今のもフェイントだ。哀川潤に勝つにはフェイントの嵐の中で、僅かな隙を狙うしかないだろう。足を狙って螺子込み、哀川潤を後ずさらせる——はずだった。が。

哀川潤は螺子込まれた螺子を、そのまま受けた。

『!?!』

「ほーう、その反応を見る限り、何か狙ってたな……虚言使い。だけどな、「虚を突く」って知ってるか? いやあ、実際、こつちを想定してんじゃねーかってひやひやしたぜ。ま、嘘に憑かれてるお前にや虚に突かれてるのが毎日だろうがな」

『……………』 『流石、ですね。驚きですよ』 『そんな事をするなんてね——』 『で』

『まあ』 『これでもう僕はネタ切れですよ』 『あとは——』

「惨めつたらしく! みつともなく!! 勝ちに固執して最後まで戦いましょうか!!」

途端、球磨川禊の雰囲気が変わる。それを、いーちゃんは感じる。括弧付けずに……格好付けずに、言った。

清々しく負けようという意思だろうか?

それとも本気で勝ちにいくのだろうか?



「は、あっ」

「く、は」

二人同時に床に膝を付く。そのまま、微妙な平行線のように、倒れる。

「があああああっ！」

しかし、結末はやはり、いつかと同じ。

「はっ……清々しい勝利だぜ、全くな！ あははは！」

哀川潤が、立ち上がって勝つ。

「……………ちゃんと、また負けた。畜生、悔しいなあ！」

「ま、お前は帰れないんだけどな……………ならまたすぐ戦えるだろ。明日にでもやろうぜ」

「……………はは、嫌ですよ」

どちらにしても。

「……………それはいささか厳しすぎるのではありませんの、ディアフレンドお友達？」

「！」

「小唄……………てめえ見てたのかよ。見てたんなら分かるだろ、こいつは負けた。だから残る」

「三全ですわよ、お友達。了承ならきちんと貰いましたわ。球磨川禊を、箱庭学園に帰す了承ならば」

すると、石丸小唄は一枚の紙切れを取り出す。見ると、確かに球磨川禊の帰還了承についてかかっている。安心院なじみのサインと、玖渚友のサイン付き。この短時間で、それほど書類を整えてくるとは。いつしかの戦拳よりも早い。

どこかの誰かが、こんなことを見越してどこかの誰かに事前に知らせておいたのかも  
しれない。

「……裏でルール変えてんじゃねえよ」

「しかし、言ったとしてもあなたは興味本意で球磨川禊と戦ったのでしよう？ お友達」

「……仕方ねえ、費用は後払いであたしが受け持つてやらあ。代わりに、安全に箱庭学園  
まで返してやれよ」

「請け負いましたわ、ディアフレンド お友達」

石丸小唄のヘリコプター内。

『へえ、自家用ヘリですか』『お金持ちなんですわねえ』

「……私はあまりあなたと話す気はありませんわ、球磨川禊」

『つれませんね』

「哀川潤の言う通り、確かにあなたとは気が合いそうですが。あなたには根尾に近い雰  
囲気がありますわ」

『しかしですね、お礼くらいは言わせてもらいましょう』『ありがじ——』  
「お礼なら」

球磨川禊が渾身のブリザード級のベタなギャグを言おうとしたところを、一言で遮る石丸小唄。流石である。似たような者と謳われるだけあって、扱いはお手の物ということか。ただ、それが果たして似ていることに通ずるのかは確証は無いが。

「お礼なら、とあるお友達に言つて欲しいところですね。実際、あの子が伝えてくれなければ、私はあなた達の戦いを一全も知りませんわ」

『……………ひとつ質問ですけど』

「何です？」

『そのお友達は、不知火半袖という子ですか？』

「そうです。そうだと何か不都合でもおありでしたの？」

その後には、ヘリの駆動音以外の音が響かなかった。その駆動音自体が止まるまでは。

撃ち落とされた。

それが一番正しい表現方法だろう。明らかに誰かから撃たれていたのだから。正確に言う、石丸小唄の頭とヘリコプターエンジン部を狙つて。実際当たったのはヘリコ

プターエンジン部だけだが。

「誰でしょうか」

『気になるなら確認しに行けばいいんじゃないんですか』『どうせこのへり、墜ちるでしょうし』

「それも十全に一理ありますわね」

「おやあ？ おつかしーなー……暗殺しないといけねえのに……暗殺できてねえじゃん。これじゃ闇口の評判がた落ちじゃん、けひゃひゃ」

奇異な笑い方をする、女が喋る。

「ふむ——闇口衆の方ですわね」

『……………あ』

石丸小唄は上から飛び降りて颯爽と現れたが、球磨川禊は普通に落ちただけだった。いや、ただ落ちた、というか落ちただけならそれはもう派手に落ちた。というか死んだ。頭から落ちて脳漿と血液を撒き散らして、首から上——否、首から下を無くして豪快に死んだ。京都に落ちてきたときと全く同じ死に方である。

「…………暗殺対象じゃないのが死んじゃったじゃん」

が、今回ばかりはその死に様の目撃者が二人ほど。流石に闇口衆であろうと、ここまではあつてなく自殺並のことをして死んだ人間は見たことがないらしい。おそらく、これ

からもないだろう。

「一周してむしろ十全な死に方だと褒めてあげたくなくてきますわ……」

石丸小唄も驚きと呆れを見せていた。明らかに呆れの方が大きいが。

『劣化大嘘憑き』  
マイナスオールフィクション

「！」

しかし球磨川禊の能力を知らない闇口衆は、更なる驚きを隠せない。何せ、死んだはずの人間が生き返るのだから。死んだと思つたら実は生きていた、などではなく。どう考えても死んでいた人間が蘇る。尚、石丸小唄は既に知っていたのか全く驚いていない。

『いやはや、すみませんねえ』『ちよつと手と足と頭と胴体と関節が滑りました』

「それは全部ではありませんの？」

「な……な、なあつ?! いやいやいや、おつかしいだろ、生き返ったとか! どういう神経してんだよつて話じゃん! お前それ、何をどうやって説明できないじゃん!」

『なんか、いちいち説明するのも面倒臭いなあ』

石丸小唄と球磨川禊の戯れ合いは置いておき、盛大に分かりやすく驚嘆してくれる闇口の間人。だがついに球磨川禊は自身のスキルの説明すらする気がなくなつたらしい。箱庭学園においてはその自己紹介をする機会があまりなくなつていたために、今更この

ように立て続けに説明するのは骨が折れるのかもしれない。現に、首の骨は折れたわけだが。

「い、いや、お前はいつでもいいんじゃない。私は、石丸小唄を殺しに来たんじゃん。つーわけで石丸小唄ぶべらっ！」

そんな宣言を無視して、十全なる蹴りが十全に闇口衆の鳩尾に入った。名前を名乗れてすらいない。名乗る前に十全に気絶してしまっている。そのため、先程からこの闇口の名前を記すことが出来ていないではないか。

「じゃんじゃんじゃん五月蠅いですわ——闇口衆程度が、私を殺せるなどと思いががらないで欲しいものですわね。むしろ殺していませんので、生存料として主人を教えてもらいたいですわよ？」

『いや、気絶していますから』『聞こえちやいけませんよ、多分』  
「あら」

どうやら気付かなかつたらしい。あんな蹴りが入れれば、普通気絶すると思えた事はないのだろうか。加えて、その行動を見てまさかの球磨川禊が常識人のような立ち位置に収まってしまっている。

『『殺し名』というからには、相当な頑丈さを持っていると思いましたが……意外に脆いですわね』



しかも、故意的に力を込めたそうさ。信頼、なのだろう。一応。

『……で、どうするんですか?』

「どうするも何も。あなたが無事では無くなった以上、あなたを送るといふ請け負いが破綻しましたわ。それに、ヘリも無くなってしまったのですから」

『いえ、この人をどうするのか訊いたんです』

「でしようね」

そしてやはり、何故か球磨川禊が常識人枠になりかけている。

「……あいつら……私が目が醒めてもまだ話し合ってるじゃん……。私ってそんな影が薄かったか……?」

暗殺者であれば影が薄くて正解なのだが。それでも、この状況だと普通にハブられていっただけな気がするようだ。

「おや。目を醒ましましたか。上手く調節できたようですね。十全に気絶させたとはいえ、吐いてもらいたい事もありましたのでね。少し浅目に入れられてもらいましたわ」

闇口衆は無言を貫く。尚、上手く調節したなどと宣っているが、石丸小唄はそんな調節を全くしていない。さきほどの気絶させた下りの話をこの闇口が聞いていない上で

のはったりである。そのあっさり加減もあつてか、球磨川禊にとつてはこの者は先程の時宮と同様の所属か、と思つてゐる。

「私は拷問された程度で吐くような情報なんて持つてないね、拷問以上の事をされても吐かないね！」

『どんな拷問がお好みですか小唄さん？』『個人的には拷問以下のことがしたいんですけど』『なんかあります？』

「それならばあなたは何もしないでいただきたいですわ。これは私を殺しに来たのですから」

それを静かに制止する石丸小唄。当然である。

「はっ——私は何も吐かないつて言つてんじやん。なんなら、一つでも私から吐かせたなら知りたい事全部吐いてやる」

「ほう。言いましたわね？ 言つてしまいましたわね？ いいでしょう、二言もありませんでしようし」

「ふん、吐かせれるもんなら吐かせてみるつて話じやん——やつてみなあつ！ けひやひやひやひやっぶつっ!？」

蹴った。

いやもう、それは思いつきり、胃を。

そのブーツの踵が見えなくなるくらいにまで闇口の腹に食い込ませたのだ。それも球磨川襪はおろかその闇口でさえ捉えられたかどうか怪しいくらいの速度で。

「げ、ぼっ……お………っ！」

そして嘔吐。胃の中の物を殆ど吐いていそうなくらいにまで嘔吐を続ける。因みに石丸小唄は即座に足を退けており、その吐瀉物が自分の足にかかるなどというヘマはない。ただし、その行為行動については球磨川襪からすらもドン引かれているわけだ。

「文字通り一つ吐かせましたが、何か文句でも吐いてみますか？」

「ぐ、う………てめっ……頓知じゃねえぞっうぶうっ！」

再度蹴る。

先程よりも強く、一瞬背骨が外れたのではないかと疑ってしまうくらいの音を発させながら。これはもう、暴力。実力行使ではなく暴力行使である。一度目の蹴りで何とか多少残していた胃の中の物も、本当に全て吐き出してしまう。

「それで、次は何を吐くのですか？」

「くっ………ふ、あ………」

その後のシーンは割愛させていただいて。因みに彼女は闇口門音かどねという。主人は張空機関所属。一度、斜道研究所の窃盗についての濡れ衣を被せられた事を恨んで派遣し

たのだとか。名前以外、球磨川禊には分からない話である。

挙句、球磨川禊の帰還方法については、結局いちやんが車で送る事になってしまった。車で送るのは嫌だとか、電車を乗り継ごうにも金が無いだとか、哀川潤との決闘だとか、石丸小唄の請負だとか、何もかもなかったことかのように、そうなってしまう。『なんとというしよぼさ』

「しよぼさとか言わないでくれ。僕だつてビックリしたよ、まさか闇口にも関わっちゃうとかね」

『呪い名』の後に『殺し名』と関わるとか、どんな順番の逆転だよ。といーちゃんは車を運転しつつ、独り言のように呟いていたが、結局球磨川禊には分からない話なのだ。

『ていうか、車で送れる距離なんだね』

「急に喋り出さないでくれ。驚くから。……まあ、ガソリンの継ぎ足しを何回するかは知らないけどそう言っても過言ではないんじゃないかな。日本国内なんだし」

要は近くない。箱庭学園が何県なのか、通っている球磨川禊ですら若干記憶に乏しかったりするのだが、しょうもない情報を日常の間に提供することに定評のある人吉善吉が「九州の地名姓が多い」だとか何だとか、言っていたような言っていなかったような気がしたために今のところ球磨川禊にとつて箱庭学園は九州のどこかに位置している。

何にせよ、京都からは遠いわけだ。トンネルや橋があるとはいえ、海を挟んでしまっているのだから。地方であれば、中国地方を挟んでいる。車で向かうならば片道、半日弱といったところか。昼下がりに、夕方前という微妙な時間である今から渋滞に巻き込まれずスムーズに着いたとして、明日の登校時間に間に合うかどうかと言ったところ。

尚、球磨川禊はマイナス十三組なうえ、生徒会であるため無断で休んでも特に成績に響きやしない。が、流石に人付き合いがなんだかんだとある身の上だ、あの子達にいらぬ心配はかけたたくないのが、今の球磨川禊の心情。

『……………』

ただ。

それは、球磨川禊という過負荷において有り得やしなかつた心情だ。前々から甘くなつたとは自覚しているが、あの子達にいらぬ心配はかけたくない、など。会つて数日の普通ノーマルに何を謙遜しているのだから。

そもそもとして、何故、心配されるとさも当然のように思考してしまっているのか。同じ学校の皆からは蔑まれ、忌々しく思われ、避けられ、疎外されるのが常である過負荷。の、頂点と言つても否定はされない、彼が。

甘くなつたところじゃない。

温くなつたところじゃない。

これは、球磨川禊にとっては重大な問題だ。そんな彼は、球磨川禊は——マイナスか？ これでマイナスだと言えるのか？ 無論、水俣真美に会ったとき、多少驚きこそはすれ、ずうつと今までいつも通りへらへら笑ってはいる。だが、それは表面上の話。内心は？ 前の通り芯まで髓までマイナスか？ ではないだろう。そんなことを考えている現在、これだとまるで、ただの。

ただの。

「あいつらと同じプラスじゃないか……！」

「?!」

いーちゃんが驚く。そりゃあいきなり大声を出したら誰でも驚くだろう。加えて、彼は運転中であり、何となく球磨川禊からのどうでもいいいちよつかいが無いなどは考えていたが何かしら考えているようだったため、存在を無視していたところがある。

「……どうしたんだい」

だが取り乱したらしい人間へのケアは取ろうと思ったのか、問う。勿論、運転中なため目を合わせず。

『……気にしないで』『何、ただの独り言だよ』『独りで自虐しているだけなんだよ』

「……………そう」

「おいこら俺の敵。お前戯言専門ならこいつの嘘くらい見抜けよ、そうじゃないと物語

が進まないだろうが」

『!?!』

今度は球磨川禊が驚く。これまた当然だ、いつから人の横に座っていたのか分からない、それも死に装束なんてものを着ている人間。車に乗った時に視認しておらず、本来ならば誰も乗っていないはずの席。まさか、運転中に忍び込んだわけでもあるまいし。

「……………狐さん……………急に出てこないでくださいよ。心臓に悪いんですから」

「ふん、お前がまた何らかの物語に関与しているのが分かってな。ついてきただけだ。最初っからいたぜ、俺の敵。それと俺のことを狐さんと呼ぶな。仮面は外したし、本名も教えただろう」

「それだったらあなたも僕のことを俺の敵なんて言わずに本名で呼んでくださいよ。僕も教えたでしょう」

『『それだったらあなたも僕のことを俺の敵なんて言わずに本名で呼んでくださいよ。』馬鹿を言うのもほどほどにしてみらいたいな。呼んだ奴が悉く死ぬ名前なんかを呼ばすとはなんつーブラックジョークだよ。笑えねえぜ』

「普通を求める天才よりは僕は馬鹿でいいですけどね」

『『普通を求める天才よりは僕は馬鹿でいいですけどね。』……………なかなか反抗的だな、俺の敵。ま、良い。今日は単に物語が止まりそうだったのを動かしに來ただけだからな。』

本来ならば先程の談笑もカットしていいくらいだ」

「それをするならまずそこで置いてけぼりになってる過負荷マイナスに自己紹介をしてください」

球磨川禊が付いていけるべくもない。

「あん？　なんだこのお前の絵みたいなの野郎は。出てる雰囲気からしてすげえ負け犬っぽい」

初対面で酷い西東天。球磨川禊の雰囲気だけで負け犬だと決めつける。確かに負け犬であり、本人も時たまその名称を呼称していたりするが、それにしたってなかなか言い方だ。

「確かに一度も勝ったことはないらしいですけどね」

「お前より強そうだが」

「なんてこと言うんですか、当たり前でしょう」

当たり前前らしい。なんてこと言うんですかと言ったにも関わらず当たり前前らしい。流石は人類最弱の戯言遣い、自身の最弱具合をきっちり認識しているわけだ。

「……流石だな。とりあえず物語は進んだし、俺はまた次に止まった時に起きる。だから起きすな」

いきなり現れ、喋り、貶し、寝た。その自由奔放な姿を見て球磨川禊は正直「何だこ



の人」という雑な感想しか出てこない。傍若無人さが若干ばかり哀川潤らと通じるところがあるようにも思っているが、

『……………なんか、この人には一生会いたくなかったね』

「もう会っちゃったけどね」

『二度と会いたくないね』

「僕は一度として会いたくなかったよ」

『戯言だね』

「嘘吐きなだけさ」

結局、箱庭学園周辺には夜中に着くこととなる。この辺りで降ろしてもらっても球磨川襖は構わないのだが、いーちゃんの運転が止まる気配がない故に、正門辺りまで送ってくれるのだらおうと踏んで、楽しんでくつろいでいる次第だ。

「道中何もアクシデントが無かったのが奇跡だね」

『だったらこれからあるんじゃない？ 立て続けに』

「いやな予想をしないでくれ」

奇跡はそうそう続かない。何より、いーちゃんと球磨川襖どころか西東天という、どうしようもないマイナス三人がいてそんな奇跡があつた事実が既に奇跡である。誰か

が死ぬ分は僕球磨川禊が受け取つてるとしても、そろそろ誰かが死ぬのかもしれない。

「……狐さんはいつまでついてくるかな」

『あんまり学園に招き入れたくはないよ』

あの理事長なら許してしまいそうだが。

「……ごちやごちやうるさいな、全く、俺なんかを忌み嫌つてんじゃねーよ。てめえらも

同等だつつの」

『「同族嫌悪ですかね」』

「……仲良しだな」

『でも過負荷はいつでもへらへら笑つてるのが過負荷ですからねえ。いーちゃんは

過負荷じゃないかもですから仲良く出来ないかもね』

「何を言う、僕ほど逆境でへらへら笑っている人間はいないぞ」

「お前はへらへらつつか笑うと不気味なんだよ」

「……………」

分かりやすく肩を落とし、目線も落とすいーちゃん。完全に凹んでいる。何か、昔どこかの誰かに似たようなことを言われたのかもしれない。

「球磨川くん」

しかし、目線は落としていれど運転中、前方確認は怠っていないため、現れた異変に

ついてきちんと気付いており、それがどういうことを示すものなのか、この辺りに詳しいであろう球磨川禊に訊いておく。

『なんだい』

「箱庭学園らしきところの正門らしきところに人らしき影が見えるんだけど知り合いかかい」

止まってこそはいないが、いーちゃんが車のハイビームで照らしている。その光の先にはいるのは、茶髪に目にくまのついただらしなさそうな小さい人。趣味の悪いイヤリングもしている。が、球磨川禊にそんな知り合いがいた覚え、素直に無い。

『知らないなあ』『学校内でも見たことないよ、誰あの人』

「ん？ あれ、確かあいつだあいつ」

「どいつですか狐さん」

「約の従姉の娘の義理の父親の又従兄弟の息子じゃないか」

「誰ですか」

『それはもう他人なんじゃ』

「あと確か、俺があいつの母親から研究資料を奪った気がする」

「めっちゃ私怨あるじゃないですか。ていうか何で箱庭学園にその人がいるんですか」

「ここら辺に住んでるんだっけな。多分誰かが俺がここに来るって教えたんじゃないの」

か？」

「あんた……」

「別にどうでもいいだろ。しかし正門、それも丁度車を止めるにや良過ぎる塩梅の位置に立ち塞がってやがるじゃないか、どう停めるんだ、ええ？ つつても死にやしねえだろうから、まあ、」

西東天は、いーちゃんの停車方法を訊いているにも関わらず聞き終える前に、  
「轆け。」

さーらつと言う。

「いやいやいやいや！ 轆きませんよ！」

「あーあーいいから俺がアクセル踏むからお前はハンドル支えとけって」

「尚更轆かせませんよ!？」

いーちゃんと西東天、この二人もこの二人で仲良しだ。が、球磨川禊にとつては疑問でしかない、目の前に立っている人間。何故そんな他人がわざわざ箱庭学園前まで来るのか、である。十中八九、水俣真美の差し金ではあるはずだが。

だとすれば、そんな他人を勝手に巻き込んだことに関して水俣真美へ先輩として灸を据えないと、と思うのが球磨川禊。既に散々他人を引き摺り回して苦勞させている自分のことは棚に上げて、だ。

「はいアクセル踏んだ」

「あー……………南無阿弥陀仏……………」

諦めるいーちゃん。しかも死ぬ前提で。とはいえ、例え死んでも『劣化大嘘憑き』マイナスオイルワイクシオンで蘇生できる。が、赤の他人なうえ男の人を蘇生したくないかなあ、などと考えているこの過負荷野郎がその能力の持ち主な時点で、心配である。

しかし。その心配はいらなかった。

その男の子は車が当たる前にはねあがり――

西東天が驚いてアクセルを離し――

その瞬間にいーちゃんがブレーキを押し――

そして止まった車から球磨川禊達が急いで出ると。

彼女はそこにいた。

「あつるうえ!! 私轢かれる様な『騙し』したかあ? いっちばんぶつちぎりですつけえ  
マイナスを恨んでるっぽいヤツに騙したんだがな、誰だろねアレ! そつれつでつさ  
!」

彼女は甲高い声でテンションが上がった声から、低い声でテンションを駄々下がりにした声で話す。不安定。そんな言葉がお似合いだ、情緒が、不安定なのだ。最初、球磨川禊に会った大人しきは無い。

「球磨川ああああ……てめおなにけろれりんっ☆ つつー風に戻ってきてんだよお……ちやつつっかり同類以上のバカでけえマイナスまで連れてきやがってよおお。私の計画大失敗じゃねーかよ」

そして今度は人を唾うような声で。

「でもさっ！ 今考え付いたんだけどあの程度で騙せるんならてめえを抹消出来るんだと至ったぜ！ ひやはははははは！ どうせそのオトモダチもてめえを裏切っちゃうだろおしさ！」

更には弱気な声で。

「……だから……私はてめえ達を止めるんだ……止めて……騙して……殺して……刻んで……張り付けて……晒すんだ……。てめえら程度のマイナスごときが私に及ぶわけないって……」

極めつけに、元の声で。

「そして！ 私はこの学校を絶つ！ そしたら世の中の過半数がこの学校を憎み恨む……。この学校に騙されたつつつてさあ！ その計画を完遂するためにも球磨川禊い！ てめえは殺す！」

そう宣言したこの少女こそが——安心院なじみ曰く『歩く病氣』水俣真美。

下  
の  
下  
水俣病

「ああ因みに？」  
みなまたまなみ  
水俣真美は。

「こ  
の  
言  
葉  
が  
変  
な  
様  
に  
聞  
こ  
え

うろだいなて勝はに私はえめてらなる



「よ」

「！」

一文字ずつ、変えて言う。

落ち着いた声で。

荒ぶった声で。

怒った声で。

静まった声で。

発情した声で。

死んだ声で。

苛立った声で。

腐った声で。

泣いた声で。

悲しむ声で。

喜ぶ声で。

諦めた声で。

元気な声で。

驚いた声で。

蕩けた声で。

敵しい声で。

怯えた声で。

戸惑う声で。

愛しい声で。

悩んだ声で。

恥ずかしい声で。

頼った声で。

分かり切った声で。

恨んだ声で。

切ない声で。

楽しい声で。

虚しい声で。

優しい声で。

蔑む声で。

悔やむ声で。

安心する声で。

だが、その台詞自体は、球磨川禊ならば嘲つて返すものでしかない。

『勝てないだろうよ?』『何言つてんだか——僕は過負荷マイナスなんだよ?』『君みたいに幾つも違うモノを持つた半端者じゃなくて』『純正の、ね』『でもまあ、そこまで言われちゃカチンときちやうかな』

だから、手加減はしない。躊躇なく。

「……………か……………はっ」

地面に彼女を磔にする。螺子で。

「……………これ、僕らは送るだけという事ですから傍観してて良いんですよね?」

「ふん、良いんじゃないか。面白くなくなったら動いてはもらうが」

「……………僕に、なんでしようね、それ」

再び観戦を決め込むいーちゃんと、それに付き添う西東天。と、言つてもどちらとも面白そうだからというのが西東天の本音なあたり、人格が知れる。流石は人類最悪の遊び人、遊ぶことにおいては暇がない。

「前は受ける前に『騙し』だから気付かなかったが、はあん。これが『大嘘憑オールフィクションき』か」

おかしい話だった。球磨川禊はそれこそ徹底的に、彼女に会つたときと同じように喋れないよう、喉にも螺子込んだはずなのだ。が、水俣真美はさらりとその螺子の刺さつていない声帯を使って喋る。予想できるは一つの効果。

「残念ながら、受けた後でも『騙す』事は出来るんだぜ?」

球磨川禊に匹敵する過負荷<sup>マイナス</sup>。否、似ている過負荷<sup>マイナス</sup>か。何より、その使い方そのものが似過ぎていて。螺子込まれた量は明らかに致死量、どう足掻いてもどこもかしこも螺子切られているはずで、生きていくわけがないのだった。けれど。

死んでも、死を「なかったこと」にする彼と。

死んでも、死を『騙し』てしまう彼女。

『いやあ』『戦い甲斐があるつてもんだよ!』

「そりやどうも! でもな、私にはまだ——三つ能力が残ってるんだぜ?」

『——つ鎖!?!』『くっ……!』

水俣真美の掌から、鎖が射出される。その鎖の先は別段尖っているなどでもないが、水俣真美は四つの能力持ち<sup>スキルホルダー</sup>であるため、そのどれかとするのが正解だ。そのため、球磨川禊は避ける。

わけがない。

「はっはあ! 受けたな! その能力を受けたな!」

彼女は嗤う。

彼女<sup>メイキングチエーン</sup>は嗤う。私が持つてる異常<sup>アフノーマル</sup>だよ!」

「腐封」——先程の鎖を受けた右腕が、溶け出す。服も皮も肉も骨も関係なく、まるで

腐ったかのように、全てまとめて。加えて、鼻が曲がりそうになるほどの悪臭を放ちながら。その臭いだけで思考が途切れてしまうくらいであり、次いでその溶けていく手の痛覚は健在。絶叫ものの、痛み。

「……腐ってますね」

「腐ってるな」

その姿を見て、さらりと判断を下す最弱と最悪。

『何の！ 僕には『劣化大嘘——』『あれ』『効かない？』』

「そりゃそうだ！ 『腐封』はどんな能力を使っても治癒できない不可逆！ 文字通り、封印も同時にしてるんだからなあ！」

そう言う。と、球磨川禊は笑いを零す。当然だ、相手は絶世の過負荷、球磨川禊。そもそもそうでなくとも、戦闘中に能力のネタばらしをしてしまつては、いけないだろう。

どさと、溶けかけ、肘から先は既に無くなっている彼の右腕が地面に落ちる音。

「な……！」

彼女は何をしたのかと聞いたような顔をして、球磨川禊を睨む。何てことはない。ちよつとばかり、右腕を螺子切つただけなのだ。当たった部位を溶かし、そして対象の能力すらも封じてしまう能力。

しかし、わざわざ当てなければいけない理由が無いし、当てた時に思考を奪うような

腐敗をさせる意味が分からない。能力封じの能力ならば、もつと相手に危害を加えなくて済むだろう。ならば、どこか欠陥マイナスがあるはずの異常プラスということになる。

何せ、螺子切ったあとにその右腕は戻なわっているのだから

『部分的に封印されているならね』『その封印している部分を丸ごと捨てるのが定石に決まってるじゃないか』『もしかして僕が自分の身第一な奴だと思ってた?』『そうなら甘いなあ。なかなか癖になる甘みだけ』『少しばかり不純物の混ざった甘さだ。』

「聞いていれば……散々言いやがって……! 何が甘いだあ!? ふざけてんじゃねえよ、格下が!」

また鎖を投げる。

『呆れる。』『そう何度もしても——』

呆れた調子で喋る球磨川禊は、その鎖を螺子で弾く。

事すら出来ない。すり抜けた。すり抜け、彼の心臓部にヒットする、も、痛みは無い。溶けだすこともない。しかし貫通したわけでもないらしい。心臓に当たった瞬間にその鎖は消える。能力が使えなくなる違和感があるわけでも無いらしい。

『……………この能力は?』

『能拘束』。てめえは今からその能力を使う度に、死ぬ!」

水俣真美はまたしても高笑いに戻り、そう猛々しく宣言する。

『マイナスオールフィクション』  
『劣化大嘘憑き』』

が、意味は無い。

「……くそが!」

『なあんだ、こつちには効くのか』『だったら後はさつきの過負荷マイナスと言葉スタイルとか言うやつだ  
けかい』

「そこまで知ってるのかよ——だつたら!」

追い詰められた、というほどではないだろうが、まるで奥の手を出すかのように、彼女は右腕を挙げる。何かを指示するかのような、何かの合図かのような。そして、そう思った球磨川禊の思考は、間違っていない。

「言葉スタイル——『官能使い』の実力を見せてやんよおおおおおおお!!」

ぞろ。

ぞろぞろ。

ぞろり、と。人が出てくる。

「因みにコレは独学で知っただけなんだがよ——何かに対抗できるんだそうだな  
?」

出てきたそれは、箱庭学園の全校男子生徒。それも学校舎から、だ。全員こんな時間にまで待機させていたのだろうか。いや、球磨川禊がいつ帰ってくるかなど、分かるわ

けもない。正門でわざわざ待機していたことから、どの辺りからか彼の帰還を知っていて、かき集めたのだろう。

「ま、私にや知ったこつちやねえが」

しかし全校男子生徒、というのは否定すべき言葉だった。人吉善吉の姿は見えない。阿久根高貴も、雲仙冥利も、日之影空洞も、黒神真黒も、蝶ヶ崎蛾々丸も。十二を含めた奴等の面子は大抵見えない。普通だと、例外は人吉善吉一人だけのようにだが。

「さて球磨川。てめえはこの数を——」

「意味ないですよね」

「『意味ないですよね。』ふん、全くその通りだな」

『『劣化大嘘憑き』』

「使えねえ！」

『僕が一人ずつ倒すという無駄な時間を「なかったこと」にした』『さあて水俣ちゃん？』

『僕は君の最後のひとつとしか対抗出来ない』と最初から思ってたんだけど。』『『騙す』能力、』

『合縁忌円』を使ってくれないかな？』

「……………」

『どうしたんだい？』『『合縁忌円』で『騙し』てくれないのかい？』

水俣真美は焦る。



『僕は今僕と同等以上……いや、同等以下の君に会えて不幸しあわせだよ。まさか僕が少し螺子れた戦いをした程度で君が屈したりしないよね?』『めだかちゃんとはまたベクトルの違う君かもしれないんだ』『存分に楽しませておくれよ』

水俣真美は確信する。

球磨川禊は、彼女と同等以下などではない。格が違い過ぎる。核から違い過ぎる。球磨川禊の言う通り、彼女は複数の能力を持つているが故に中途半端なのだ。

『腐封』という異常アブノーマルの欠陥は、過負荷マイナス二つに侵食されて出来上がったもの。『能拘束』という過負荷マイナスの欠陥は、異常アブノーマル一つに関与されて出来上がったもの。『官能使用』は言うまでもない、自身が深く知りもしない何かを、独学で習得してしまつたが故の欠落。

『それとも』『腐封』『能拘束』『官能使用』とやらの異常アブノーマルだか何だかが一瞬で破られて傷心中かい?』『違うよね』『君はその程度で傷心しない』『だつて』

僕以下なんだから。

「……………っ!」

重い。

その言葉が重い。

薄っぺらく聞こえるのに、素晴らしく重い。

出来る事も言われたら出来なくなるような緊張の劣化版の状態だろうか。出来ない事なのに言われてしまつてする気すら失せてくる。彼女は、死にたくなつてくる。

本当は思い通りならば『騙せ』た時点で水俣真美の勝ちだったはずなのだ。なのに何で球磨川禊はどこまでも水俣真美の価値を汚す。貶める。勝つた気にさせない。勝てる気を起こさせない。何せ、過負荷マイナスなのだから。生粋で純粹に、完全どうしようもないな負完全。そのどうしようもなさは周囲すらも蝕んでいく。

『あまり考える時間は作らないでほしいな』『僕は明日も朝からお忙しい仕事が残つてるんだからさあ』『今日はもう帰つてぐつすり寝たいんだ』『ほら、時間だつてもうかなりだよ』

彼は時計塔を指差す。しかしそんなものを見る余裕は、今の水俣真美には無い。何せ、心を読めるわけでもない彼女は、心を読まれるわけがない彼がいつ攻撃してくるのかまるで分からないのだから。

『何だかつまらなくなりそうだね』『ちゃんとしてほしいな』『僕がぺらぺら喋つてるだけじゃ何も面白くないよ』『大体そもそも面白くないんだし、さつさと熱いバトルに入つて』『出来る限り上手い事終わらそうぜ』

ふざけている。いつも通りの、平常運転。ここまでおちやらけた奴に誰が負けるのか、とむしろ水俣真美は自信を持つ。誰もが勝つだろうと。さつきまで悩んでた自分が

馬鹿らしいと。例え勝つても、それが胸糞悪いものになり、虚しくなってきた人間が幾人も存在するという前例を忘れて。

「オオオオウKエエエエエツいいだろうっ！ 私に戯言を吐きまくった罰を与えてやろう！」『合縁忌円』<sup>ホールブックジョーク</sup>で『騙し』てやんよおおおおお!!」

「……あいつが吐くのは戯言じゃないと思うんだけどなあ」

「『あいつが吐くのは戯言じゃないと思うんだけどなあ』。んなわけあるかよ。お前のソレはあくまで名乗ったもん勝ちみたいなどこあるんだからよ、球磨川禊が言ってたって何ら不思議じゃねえ」

「ま、それはその通りですけどね。ですけど、あいつには僕の思う戯言には程遠く口が足りませんよ」

「『口が足りませんよ』って、それで上手くかけたつもりか。戯言にもならねえ、三点だけ」

「五点満点ですかね」

「九百九十点満点に決まってんだろ」

「何でTOEICなんですか。三点とか逆に一問程度しか合わなかったって事じゃないですか、逆に凄いいことになってますよ」

「例のテストで一問しか解かなかったお前なら出来るだろ」

「英語は苦手です」

「お前に苦手じやないものはないのか」

「ないでしょうね」

『やっと本気を出してくれるみたいだねえ』『先輩として僕は嬉しいよ』

「勝手に先輩面してんじやねえよ！」

『合縁ホールブラックジョーク忌円』の汎用性は尋常ではない。如何なる屁理屈も可能にする。何せ、現実を

『騙す』のだから。無論、『大嘘オールフィクション憑き』と同じような使い方もできてしまうのだ。そして

その使い方は、球磨川禊もいつしかはすることとなる。そう、

「まずは最初から大技だ——」

対象の存在を、「虚構なかつたこと」にする。彼女の場合、『騙す』わけだが。

『な——』

しかし、その技を受けた球磨川禊は消える。服も体も、命も何もかも——

真後ろから衣擦れの音。

「やっぱ無駄かよおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

『僕がこの世からいなくなってもそれは結果的に『死』と同義だ——ある条件を満た

さなければ『劣化大嘘憑マイナスオールフィクションき』の効力として僕は死から戻ってくる』『無論』『僕は無かつたことを無かつたことにはできないし』『ないものがあるようには出来ないからね』『君よりは使い勝手が悪いかもしれない』

無駄にスキルの解説をする球磨川禊。しかもそれで攻略の糸口が掴めたわけでもないというのが、これまた本当に厭らしい。と、言つても、彼がどこまで事細かに能力を説明しようと、攻略できるわけもないのだが。

そもそも、球磨川禊を完膚なきまでに負けさせたければ方法は一つ。そしてその方法は既に二度、実践されてしまっているわけで。

「まあ元々成功するとは思つてないね。何せ大技なだけであつて切り札じゃない。最も、大技は全然大きくなかつたようだが」

『次は僕から攻めてみようか』『君は僕と同じだから『劣化却本作り』マイナスブツクメーカーは打たなくていいんだっけ』『なら普通に殴る蹴るの対戦でもいいんだけど』『こんな小さな子を撲殺するというのは聊か僕でも気が引ける』

戯言だ。球磨川禊はそんなこと微塵も思つてはいない。思えない。

言葉に出してただけだ。「絶対にいつか殴殺だが蹴殺だかしかけてきやがる——」  
『さあ、どうだろうねえ?』『僕は誰かさん曰く甘いから』『本当にそういう攻撃をしないかもしれない』

「!?」「思考が——読まれて!?」「いや、待て、何故」「私は、口にだして——

—?—」

『劣化大嘘憑き』』君の脳内での思考を出来「なかったこと」にした』

「——!」 「んな屁理屈でも通るのかよ!」 「ふつぎけんじやねえ!」

『合縁忌円』』は如何なる屁理屈も可能にすると先述したが、無論、『大嘘憑き』及び

『劣化大嘘憑き』』がその使い方を出来ないとは言っていない。それどころか、出来ないわけが無いと言つてしまえるほどののだ。仮にも、一時的にとはいえ、あの球磨川禊が同等と認めた相手なのだから。

『僕はいつでも真面目だよ』』真面目にふざけてる』

「地面に螺子を突き刺して言いやがる——」 「それでもフザケ過ぎなんだよ、最低があつ!」 「ニヤリと笑う」 「否、嗤う」 「実に、気持ち悪い」 「本当に——」

「……なかなか特殊な使い方をしますねえ、球磨川くん」

「俺はどつちかつつと今の水俣真美の発言の方が気になるがな。ふん、球磨川禊も晒つてやがる」

「確かにそうですねえ……最低でしたっけ?」

「実に気味が悪い。最悪と言つても差し支えは無いな」

「ま、これで決着は付きますかね——『騙し』と『虚構化』の闘いは正直MPとかPの削り合いに近いですから、六十時間くらい続いてても不思議ではなかったんですがね」

「『六十時間くらい続いてても不思議ではなかったんですがね』。なんでその時間なんだよ。いや、同意はするが。そこは流石お前の上っ面と激似つてとこだな。素晴らしく常識破りだ」

「僕はあなたに近いと思うんですかねえ……人類最悪さん」

「それならあいつも最弱を名乗ってんだからお前の方が近いだら人類最弱」

「あは。」

球磨川禊はその表情に実に似つかわしいいい笑いを一言、漏らす。

『最低、ねえ』

「な、なんだよ——何か文句でもあんのか!」「お前はどうか考えても最低だろ!」「最悪でも何でも良い、それらの類だ!」「この私でもそう思うぜ、何が同等だ!」「私とこいつじゃあ全然違うじゃねえか!」

『……………』

「くそつ、思考が筒抜けなのは『合縁忌円』ホールブラックジョークを使うに当たって酷くりスクだ」

『ふうん』

「なら——」

しかし、それだけ身構えている水俣真美を無視し、球磨川禊は、

『白けた。』

飽きた。

「……はっ？」

『いやさあ、僕と君は一緒じゃないんでしょ?』『僕の方が下なんでしょ?』

「確かにてめえより下は存在しないとは思うが」「だから何だっというんだ?」「私はコイツに負けるしか——」

『君は過負荷マイナスじゃないよ……』『むしろ過負荷ニアの恥晒ラしだ』『ま、異常アブノーマルを持つてる時点で予想はしてたけどね』『いくら生粋で僕みたいなスキルを持つてるも、君だったんなら意味が無いや』

「何なんだよ……さつきは挑発しておいて、今度は失望かよ。それも作戦か? 大体私は過負荷マイナスのスキルを持つてる時点で過負荷マイナスだ——異常ブラスなんざ関係ない」

『どつちにしろ君は過負荷マイナス失格だ』『理事長の目にも適わないね』『明日からここに来なくていいよ。いや、今から帰宅して今日から来なくても良いね』『あ、退学届とか要らないから。僕から理事長に直々に言っておくよ』



「何を、勝手に——！」

球磨川禊のそのやる気のない言動に、水俣真美の苛つきは増すばかり。しかし、苛ついているわけではないが、球磨川禊も水俣真美に関してどんどんと関心が薄れていつている。面白くない、つまらないのだ。

『僕は悪くない』『こればかりは限りなく君が悪いよ……』『よく今まで他の過負荷が見逃してたねえ……』

「ふざっけんな！ 私の何が悪いんだ！ 過負荷マイナスじゃなかったら何だつてんだ！」「さつきから胸糞悪い——」「何が言いたいんだコイツは！」

『じゃあ一つ質問するけど』『今まで虐められてた事は？』

「ないね。あるわけない。今までの学校全部手中に収めてきたからなあああああ」  
『……はあ……』

先程よりも更に明らかに落胆した様子で、溜息を一つ。

「溜息とは何なんだ」「質問に答えてやったつうのに……」「大体、何をもって過負荷マイナスとするんだか。皆目見当も付かねえな」

『じゃあ教えようか？』『試合放棄したのは僕だからさっきの勝負は既に僕の不戦敗でまた勝てなかったけど』『後輩に教えられるくらいは出来るよ』

「しらつと言う」「何が言いたいんだか全然分からないが」「……良いだろう、先輩らしく、



好き勝手言う、が、だから何だという話でもある。彼女の『騙し』は結局今も解除はされていない。そのため、認識されるわけもなく、当たった螺子ですら認識されなくなる。当たったという事実すら、『騙さ』れる。はずなのに。

その螺子は、消えない。気が付けば、彼女の思考が漏れ出す口も、何も喋らない。

『甘いだけ……』『なんだけど』『……アレ？』『僕は……』

そのことに気付いたわけでもない球磨川禊は、訳が分からないような顔をする。反応をする。

『誰と戦ってたんだけ？』『誰かに会ったせいでもこうなっただけ』『記憶の混濁の仕方が変過ぎる。気味が悪い』

何を言っているのか、球磨川禊が理解していなければ、水俣真美も理解していない。だが、少なくとも戦っていたことを忘れかけられているし、そもそも名前も姿も忘れられ始めているらしいということは分かる。

『よく分からないや』『ああ、いーちゃん』『一応多分もう終わったと思うから帰ってくれて大丈夫だよ』『もう未明だ』

「……ま、それはそうだけどね」

どうということなのか。水俣真美は甚だ疑問符を浮かべる。何故私を忘れてるのか、おいふぎけるなよ、と。喋れもしない口を開いて、当たりもしない手を振って、足跡も付

かない足を動かして。

「君はこれからどうするんだい？」

『僕は仮眠でもするよ』『流石に、眠い』

「君でも睡眠欲は一応あるんだね」

『昔「なかつたこと」にしようとも思ってたんだけどね』『流石に困るかなあつて』

「寝るのも一種の快感だからなあ……僕も寝れなくなるのは御免かな」

「おい、何してる。置いてくぞ」

西東天は車のエンジンをかけながらそう言う。水俣真美は先程、叫んだつもりだったが、彼らにはその叫びは全く聞こえない。加えて、能力をしようにも使えないし、素手での暴力に訴えかけても全く通らない。『能拘束』リスキースキルよろしく、全てすり抜けてしまうのだ。

「はいはい、今行きますよ」

『今行きますよ』ね。何で俺がエンジンをかけれるのかは疑わないのな」

「子供のころから色々ありましてね、その程度の事じゃ驚かないんですよ」

ほのぼののしゃがって、というのがそんな状態に陥った水俣真美の率直な感想だ。

「そういえば球磨川くんは誰と戦ってたんだい？ 僕には終始分からなかったんだけ

ど」

『さあ……』

「いやんも、忘れてる。分らない。何故か？　そして西東天も、先程の戦いに  
関しては大抵を忘れてる。何か、戦っていて球磨川禊が途中で飽きて、色々してい  
たのだという事実は確認しているが、ふわふわとしていて現実的に感じていない。

「俺はそれより最後何したのか気になるけどな」

『何をしたって……』

無論、『劣化大嘘憑き』マイナスオーラルフィクションを使ったことに変わりは無い。が、水俣真美の意識はそこに

あるし、死んだわけではない。ならば、どのような事柄を「なかつたこと」にしたのか  
？

『確か後輩へのお仕置き……だったんで』マイナス『過負荷ミタマみたいな扱いを受けさせるために急遽  
考えたんです』

球磨川禊は実は咄嗟の思い付きで試したのだが、その「なかつたこと」にされた弊害  
はとんでもなく抜群だ。何せ、

『誰かの存在感を記録から何から、「なかつたこと」にしました。』  
のだから。

「ふうん……なるほどな。それで誰かは皆から無視されて、いくら叫んでも気付かれな  
い……」

「過負荷<sup>マイナス</sup>とやらの生涯を送るには最適な処置をしたということなんだね……」

言うならば、世界記憶、と言ったところか。やらかしたことがことなだけに痕跡は残っているが、それをしたのが誰かは分からないし、例え恨んでいても恨んでいる対象が分からなくなる。目的のための手段なのに、目的が消えてしまったのだ。

そして、そんな存在が世界に干渉することは勿論不可能。世界自体が忘れてしまっているのだから、何に関与しようとも忘れられてしまつて、逐一「なかつたこと」にされ続けるのだ。そのため、水俣真美は、これから一生、誰にも。

「なかつたこと」になり続ける。

『ま、そういうことですよ』『それではばいばい、戯言卿』

「またどこかで縁が《合わ》ないことを祈つとくよ、嘘吐伯楽」

『あ、昨日喜界島さんに呼ばれてたの忘れてた』

ブリスフルーザー 虚ろな大嘘への襖  
過負荷

『おや』『こんな時間にどうしたんだい?』

『この話は僕が語ることはないし』『そもそもこうやって括弧付けて話している僕が話せることじゃない』

「だから何だつて話だけどさ」

『ま』『本音で話したくても僕は僕の操縦すら思い通りになつてくれないのが僕らしいんだけど』『でもそろそろどうにかしてほしいよねえ』

「色々と卒業してから何年経つてんだつて話だし。いや、案外一日も経つてないかも?」「そもそもこれだつて本当に僕が語っているのか怪しいもんだ』『だつて僕のそれからの足跡は』『まるで僕みたいに』『なかったこと』『』になつているんじゃないのかい?』

『君が知る僕の情報はそのはずだ』『であれば』『今から語られる話は僕の記録じゃない』『誰かの記録だ』

「でも、僕は誰の思い通りにもなる気はなかったはずなんだけどなあ」

『何せ僕だぜ?』

「もしかして、僕を記録したくないだなんて思い過ぎて、それが逆説的に僕を記録しちゃったのかな？　だとしたらかなり大失敗をしてしまったことになる」

『いやはや』『人生』『難しいもんだ』

『何をやっても上手くいかないのは変わらないや』『何か決心しても変わらない』『でも何故か、上手くいかないにも幅がある』『限度ってやつかな』

『周りは固められているけど、その中でなら自由に動いてしまうような』『ちよつとだけなら思い通りにはなってくれるような』『でも大雑把にはどうにもならない』『そんな感じ』

「まるで水槽みたいだ」

『まるで箱庭みたいだ』

「でもどちらにせよ、僕は強制的に被动させられているような気がするよ」

『神様の意志って奴かね』『神様なんて信じてないけど』『サンタさんとか、そういうまやかしを信じるのは小学生で卒業したぜ』『ジャンプはまだまだ卒業しないけど』

『だって良いじゃないか、ジャンプ』『皆の理想の仮想が詰め込まれてるんだぜ？』『卒業する理由が無いね』

「良い非現実とも言う。友情・努力・勝利、そのどれもが美しい。僕だってその美しさに塗れてみたいもんだった」



『美しいかどうかを除けば案外』『いやどうだろう』『わっかんねえや』『その辺りの判断は君に任せるよ』『ああ、判断したという記憶も「なかったこと」になつてしまふかもしれないけど』

『それとも何かな?』『君は忘れて僕は覚えてるっていうのが不満かい?』『そうだね』『僕も出来れば僕がもつと不味い立ち位置でいたいところだよ』

『その位置にいるからこそ僕だしね』

「でも、いない時はいない。そういう場合は、仕方ないじゃない? 僕にどうにか出来るわけでもないし、折角の有利な状況、楽しんでみたいしさ」

『つつても』『すぐさま終わつてくれるならそれはそれで』『良いんだけど』

『終わつてくれるかどうかも分からないけどね?』

「勝つても負けても勝負が終わつても試合が終わつても、こういう単純な関わり合いは終われるもんじゃないのさ。僕は昔、いや昨日かな。明日かもしれない。そんなことを誰かにマイク越しに教えられたからね」

『誰かが誰かつて?』『それを教えたら誰かじゃないじゃないか』『ぼかすからこそ括弧良いんだらうこういうのは?』

「一つ言つておくなら、純粹に好きな子さ」

『思いつきり傷付けた覚えしかないけど』

「元々僕は惚れっぽいからね。そうやって純粹に好きな子、一体何人いるんだって話だよ。初恋は不動だけどき」

『それでも』『やっぱり』『惚れっぽいことに変わりはないんだよねえ』『その子には花束みたいなものを贈ったりもしたけど』『全くガラじゃなかったなって今では思うよ』

「後悔はしてないとも。当然だ」

『だって』『僕がその時に抱いた気持ちには』『紛れも、なく』

「『ノンフィクション』だったからね」

『にしても僕がノンフィクションを謳うとか』『片腹痛いにも程がある冗談だなあと僕でも思うよ』『何せ僕は元々大嘘憑きだったんだぜ?』

『オールフィクション、出る言葉返す言葉何でもかんでも全部嘘』『嘘で塗り固められただとかそんな甘いもんじゃあない』『それはもう真つ赤な真つ赤な嘘に嘘を重ねた二枚舌から出る絵空事を話半分になん千三つ法螺を吹くようなもんだったさ』

『エイプリルフールにしたって酷過ぎる嘘の吐き方だったね』『今でもそんな感じだ』『元々って言っちゃったけど、案外今も嘘に憑かれていまする気がするよ』

『ああでも』『今じゃあ僕はかなーり』『ちよっぴり』『幸せになっちゃってる節があるから』『その憑かれていまする嘘も段々と劣化していつているのかもね』

『だったら安心だ』『何が安心か、なんて言われても答えられないけど』

「少なくとも、もしかしたら会うかもしれない君は安心なんじゃないかな？」

『例えどれだけ幸せプラスになったって僕は僕だからね』『それとも、君は僕と会っても普通ノーマルなままかい?』『この球磨川禊はその昔、プラスマイナスゼロになることすら許されなかつた身だぜ』

『それにもし君がどちらゼでもないだったならば』『僕に会うと過負荷マイナスに偏マつちやうよ』『それでも大丈夫だなんて言う人がいるとは思わないけど』

『その場合』『僕マイナスと縁が《合》つても大丈夫だからもしかすれば』

「虚数だなんていう、面白い解答をしてくれる人なのかもね」

『だがそれは違う』『安心院さんですら見つけきれなかつた種別の人間が今更いるだなんて』『フィクションにも程があるさ』

『僕といて大丈夫だなんて夢物語』『理想郷でも夢見てるのかな?』『それくらい、僕は折り紙付きの筋金入りで過負荷マイナスなのさ』『どうしても』

「それに、そんな理想郷を築くための歯車歯車が足りなさ過ぎるよ。世界は一人一人が螺子ネジなのさ。だったらもつと、規定きちんとした思想嗜好の規格人達の螺子集めを用意めしないとね」

『それにそんな思想』『頭の螺子が外れた人しか浮かばないよ』『実現できるべくもない』

『どこかの誰かの説得に窘められて』『螺子伏せられて』『終わりさ』

『それに僕はそういう負完全取り返しの付かないスキルな螺子は捨てたんだ』『僕という過負荷マイナスから螺子マイナスという

『マイナス マイナスきれ 能力は無くなつた』『だからって僕は』『プラスじゃないんだけどね』

「僕の貯め込んだ大切な大切は、あの子に贈つといたから。」

『だからといって勿論何も持つてないわけじゃないぜ？』『それは僕の役割じゃない』『そういう役割の人はいなくなつたんだ』『強いて言うなら』『皆幸福だ』

『だつたら僕は何かつて？』『ま』『ゼロでもない、何でも無い何か』『つてとこかな』

「虚無だとかだと、恰好良いよね」

『それでもやっぱり』『安心院さんやめだかちゃんとか』『多分善吉ちゃんも』『もがなちゃんも』『須木奈佐木さんも』『笑い飛ばしてこう言うんだらうなあ』

「何言つてるんだ。お前は紛れもなく良い奴だよ」

『つて』

『善吉ちゃんなんかは強く否定してくるだらうなあ』『安心院さんとかは軽口叩いてくる程度かもしれない』『そう考えると』『僕はやっぱり恵まれてるかも』

「温かい話だぜ、全く。君たちの方が充分に良い奴だつて言うんだ」

『こんなどうしようもないマイナスを、プラスにまでしてしまふほどの大きなプラス』

『とんでもない奴等だよ』『嘘を憑いて接していた僕が馬鹿らしいくらいだぞ』

『ならもつと』『本音で接しておけば』『良かったかな』

「今更後悔しても、何にもならないけど」

『それに時間は有限とは言え無限に近い』『その埋め合わせはいくらでもやってられるさ』『前提として僕は嘘が嫌いなんだ』『僕は僕を許してない』

「僕が、悪いんだから」

『でも僕は悪くない』『僕は甘ちゃんだからね』『例え僕が悪くても僕が悪くないよう、都合よく解釈しちゃうって』『責任転嫁しちゃうんだ』

『君達だつて似たようなことをしたことが無いかい?』『我が身が可愛くて、つい』『誰かをちよつとだけ貶してしまつたり』『自己弁護する際に在りもしないでつちあげをしたり』『主観的な意見で、相手の感情を聞く気が無かつたり』『さ』

『心なしか、そんな不条理を相手に突き付けてしまつたことつて』『ないかな?』『僕はあ  
るよ』『勿論ある』『そういう理不尽を表に出すし』『嘘泣きなんてザラさ』『言い訳とかも皆すーぐしちやうだろ?』『いかがわしいことだつて何度したことか』『インチキだつて罵つたことも数えられないくらいだ。むしろ僕がインチキしていたのにね』

『そうやって墮落するのさ』『自分が可愛いからついつい墮落しちゃうのさ』

『ほら、今君がいるであろう社会の混雑の中でもそんな墮落の結果』『本当の善意じゃない偽善で正義ぶつてる人もいれば』『本当の悪意じゃない偽悪で不良ぶつてる人もいる』『おかしな話さ』

『不幸せそうだよ』『不幸せそうだ』『自分の不都合に合わせて他人を冤罪にしたりする

し』『その流れ弾で誰かが見苦しくみつともなく、他の誰かに対して風評被害を撒き散らして密告するやもしれない』

『大体そういうのは嫉妬が原因さ』『あいつは皆が可愛がってくれるのに、自分は自分しか自分を可愛がってくれないだなんて格差社会だ』『なんてね』

『結論』『人は自分しか信じなくて』『知人なんか裏切るし』『子供なんか虐待するし』『他人なんか巻き添えにするし』『例え誰に二次被害が起きようとも関係無しに生きるのさ』『そうやって生きなきゃ』『やってられないのさ』

「でもやっぱり、心の中では自分が悪いことを分かかってしまっているから、やってられないんだよね」

『その羨望は恋人みたいに愛しいけれど』『ね』

『そう考えると世の中って』『案外単純だよ』『善悪とかさ』『良悪とかさ』『そういうの』『でも人生はそれだけじゃない』『善人だからって人生勝ち組じゃない』『悪人だからって人生負け組じゃない』

『勝ち馬が全員良い人かって言われたらそうでもないし』『負け犬が全員悪い人かって言われたらそうでもない』

『そりゃ勿論』『大抵の人は』『悪いよりは良く在りたいだろうし』『負けるよりは勝ちたいんだろうけど』

『善は善かももしれないし悪は悪かももしれないし勝ちももしれないし負けは負けかもしれない』『そうとは限らないよって話だね』『だって悪いってことは何かをしたってことだ』『だって負けたってことは戦ったってことだ』

『悪があるから善があるし』『負けがあるから勝ちがある』『悪平等だなんてメジやない平等さだね』

「ま、これ全部受け売りなんだけども」

『本当』『こーんな言葉に絆されちゃうだなんて僕も甘々だね』『週刊少年ジャンプに定期的に連載されるラブコメディ並に甘い』『口から砂糖が吐けるくらいの甘さだ』

『でも僕はそんな恋愛漫画の端役でもなければ主役でもない』

『僕は僕の物語の主役さ』『当然だろう？』『君だって君という人生の物語の主役なはずだ』『ああ、僕は主役だし君も主役だとも』

『僕としては、今更気付いたのかい？』『といつたところだけだね』

『友達がいなくなつて努力してなくなつて勝てなくなつて』『僕は主役だったのさ』『主役を張っていたのさ』『驚きだよね』『アレだけの啖呵を切つたのに、安心院さんに申し訳ないや』

「ま、それはそれとしてファーストキスを奪われて奪つたんだから不本意ではないけれど。」

『マイナスだとかプラスだとかゼロだとか所詮は下らない話だったってこと』『そこはあの頃の安心院さんの思考の中でも共感できることの内の一つだったなあ』『でも、それが全て等しいわけではなかった』

『マイナスでもプラスでも』『ゼロかイチかで変わるのさ』『ゼロの先はどんな欠陥が起きようともどれだけ失格しようとも何らかのイチが待っている』『等しくなんかないんだよ』

「不平等という平等。矛盾してるようだけど、これもまた世界の真髓な気がするぜ」

『今からでも安心院さんに教えてあげたいくらいだ』

『でも案外あの人のことだしな』『もう既に辿り着いちちゃってるかもしれない』『ちつくしょー』『あの人に先んじて真相をひけてその情報をひけらかすの』『やってみたかったんだけどなあ』

『ひいこらひいこら僕を崇めて』『傳いてくれるんだぜ?』『全裸パーカー……』『いや、ここは敢えて今までの全てを合わせて裸パーカージーンズエプロン……?』『裸要素が消えたっ!』『なんてことだ!』

『いやそれは置いといて』『僕の趣味に合った姿で僕を崇拝する安心院さんとか』『拝んでみたいもんだったぜ』『本人にいったらそれこそ容赦なく』『一京』『二八五兆』『五一九億』『六七六三万』『三八六五個のスキル全部ぶち込まれちやいそうだけどね』



『全部が全部攻撃系じゃないとはいえ』『しようもないスキルでも攻撃に転化しちゃうところがあるからね』『恐ろしや恐ろしや』

「恐ろしいと言えば、一昔。僕が記憶に無い誰かに京都だったかどこだかに飛ばされた時も、恐ろしく怖い人がいたもんだったね。あの、赤色の」

『その隣にいた無色の人も記憶に何となく残っているよ』『まともに何の制約も無しに殴り合ったら圧倒的に僕が負けるであろう自称最弱さん』『彼はこれまた見たことのない欠陥製品だったなあ』『へらへらしない過負荷マイナスについていか』

『そうだね』『名付けるなら』『否現実ネゲイションかな？ いや、もうちよつと良い感じのものがあるそうなの……』『ま、いいか』『何にせよ彼からは』

「なるようにならない最悪、といった印象を抱いたよ」

『思い通りになるわけがない僕と似たり寄ったりだ』『でも、どこかが違うんだよね』『もしかして彼は裸エプロンや裸ジーンズは嫌いなのかもしれない』『だとしたらソリが合わないのも納得だね』『裸レインコートとか好きそうな人だと思ってたのに』『酷い話だぜ』

『でも盗み聞きした限りでは』『彼らの中での「最悪」って、あの死に装束の人らしいんだよね』『もう、二度として会いたくないあの人』『驕るつもりじゃないけど僕どころか彼にまでそう思わせるって』『相当なものだよえ』

「同族嫌悪と言われれば、それまでな気もするけどね。どっちの人もなんだか周りをめちやくちやに掻き乱しそうな雰囲気をしてたでしょ」

『何もしなくても状況が悪化する』『みたいな』

『え?』『僕もそうだろうって?』『嫌だなあ、僕は自ら引つ掻き回してるだけで迷惑だとかそんなそんな!』『……え?』『マジ?』『存在が迷惑?』『マジかあ……』『あの人達とそんなとこまで一緒だとか思いたくないんだけど』『いやでもまさか』『嘘だよねえ?』『嘘は嫌いだよ?』『いくらなんでも僕がいるだけで迷惑だなんて有り得ないよ』『むしろめだかちゃんの方が余裕で周りを巻き込むよ』

『僕のはそんなパツシブスキルじゃない』『断言するよ』『信じて信じて』

「自分から率先して掻き回していたっていうのも何のフォローにもならない自己卑下な気はする。でも、流石にいるだけでそんなことになるだとか、ないと思うよ?」

『というかそういう質問は求めてないって』『とにもかくにも彼らの話だ』『いや、目が死んでいた彼の話だ』『痛みに慣れてるようだったし案外マゾヒストなのかもしれない彼の話し』

『僕について君が』『ある程度まで知っていきそうだからここまで長々と六〇〇〇文字くらいで話させてもらったわけだけど』『勿論、僕は色んなとこにいたからね』『端的に言えば、あの辺りにも寄ったんだよ』

『そしたら何と奇遇も奇遇の奇跡偶然あらびつくり』『つてな寸法でさ』

『いやあ、まさか「なかったこと」にした本人じゃない人と遭遇するとは思っていなかったんだよね』『何せ』『何回か言ったように僕のあれからの足跡は「なかったこと」にされたかのように雲隠れしているはずだし?』

『だったら今話しているお前は何だなんていう言葉はエヌジーだぜ』『ほら』『あの死に装束の人も言っていただろう?』『物語を進めるためさ』『これは安心院さんと似たところがあるけれど』『重要なことだ』

『それでどんな話をしたのかつて?』『おいおい焦るなよ』『それを今から話すんだからさ』

『と、言っても僕から話したんじゃない』『僕は一応「なかったこと」になりかけている人間そのものだ』『それに』『嘘か本音が分からない僕の言葉で語り部なんて』『読んでも読めないぜ?』『今僕が話していた内容だつて、きつとどこかで八割方無視して読んでくれたなんて注意書きがあるレベルだよ』

「さてそれじゃあそろそろ本題だ」

『本題というか、これこそ注意書きかな』『この物語はフィクションです、つてやつ』『安心院さんの言うなら、現実から切り離して読んでね』『つてところかな』『じゃあ改めて、注意書きを』『いや』『注意言いを』

「これは混沌どよりも這しいよ寄りも」

「本ど当うに負ま完全なに」

「『大嘘憑オールドフィクションき』ではなく」

「『劣化大嘘憑マイナスオールドフィクションき』でもなく」

「『安心大嘘憑エイプリルフィクションき』でもなく」

「『虚数大嘘憑ノンフィクションき』だ」

## 欠陥製品

十二月。街はいよいよ冬本場、イルミネーションで着飾った建物達の隙間から意気揚々と定番のクリスマスソングが流れていく日々。おかげで冬至を越えて夜が長い季節だというのに、視界は一向に暗くなくネオンばかりの明るさにぼくは目がやられてしまいそうだった。

流れていくクリスマスソングを聴きながら、そのクリスマスもあと一日、つまりは今日はクリスマス・イヴなのだと思いに耽る。今は一つまた請負が終わって、その帰宅途中。今回はまさかの九州まで飛ばされて人を一体何だと思っっているんだとしか言いようのない事態に陥ったが、特に何も異変は起きず、何とかぼくは京都の城咲に帰ってきたわけだ。

ぼくが一年を通じて色々あったあの年から、もう既に一年以上経過している計算になるものの、未だこの新しい元骨董アパートを見る度にその色々を思い出す。《満を持しての教習所の普通車卒業検定、ただし大地震による活断層バリバリ》みたいな感じの一年だった。

そういえば、あのよく分からないことが起きたのもこの月だったか。あの時も確か九

州だかその辺にまで車を飛ばすことを強要されて、日が変わったくらいで向こうに着いて。で、そこからまた眠い中で車を飛ばすという危険走行をして戻ってきた覚えがある。

「狐さんともしばらく会ってないな……まあ、あの人はそれで良いんだけど」

会ったら会ったで相変わらず碌でもないことになるに決まっている。今日、そして明日から明後日にかけての三日間、あの人のような人物に会ってしつちやかめつちやかにされることだけは勘弁だ。ぼくはもう今年は友と一緒に平穩に過ごすのである。

とか。

そんなフラグを立てたのが、大間違いだった。

「何であいつがここにいるんだよ……」

そのよく分からないことの発端、虚言使い。いつしかの黒い制服は着ていないが、髪型も髪色も身長も体型もそのままなうえ、あの雰囲気は明らかにソレだ。間違えるわけもない。間違えようがない。どうやら、何かを探しているらしいが、これまた狐さんと同じで碌でもない予感しかしない。

球磨川禊。

箱庭学園、だったか——財力その他が玖渚機関に匹敵しかねないと折り紙付きの変人奇人びつくり箱高校に在籍している、頭の螺子が外れた特級ヤバイ人物。いや、制服を

着ていないということは卒業したのだろうか。彼がそんな年齢であったことがかなり驚きだが……ぼくが言えたことでもない気がする。

しかしあれは、声をかけた方が良いのだろうか。そうだろうな、一日いただけの男だけどあれだけの印象を植え付けてくれたヤバイ奴だもんな、挨拶くらいも絶対にしなはいぼくはすぐさま帰って友と甘い一時を過ごすともう心に決めたのだ帰ろう無視だ無視。

「ま、それを見越して僕から話しかけるのが僕なだけけどね？」

一度ぎゆうと目を瞑り、さあ帰るぞと目を開けて一步踏み出そうとすると、彼は目の前にまで来ていた。一年前は、僕よりも十センチほど高かった彼の身長だが、どうもぼくが若干ばかり伸びたのか思ったよりも首を上になげなくて済む。それでも、ぼくの方が小さいのだが。相変わらず身長が小さいのはコンプレックスになりそうである。

それにしても。

「……喋り方、変わったんだね。括弧付けなくなったのかい」

「もう括弧付ける意味が無いからね」『それとも何かな』『いーちゃんはこのつちの方が接しやすいかな?』

変化した部分を指摘すると、そんな風にすぐさま再現してくる。

「言葉使いとしては確かにそこそこ好感の持てる遊びではあったけどね……別に良いよ。それで? 何しに京都くんだりまで来たんだい?」

帰路の途中であつたため、そのままぼくは歩き出す。と、話しながらでもあつたため球磨川禊はきちんとぼくに付いてきてくれる。正直、友にこいつを見せるのは駄目な予感しかしなないため、付いてきてくれなくても良いのだが。

むしろ、遠くから眺めた時は然程前と変わらないじゃないかと思つていたがこうやって直接話しているとどうも彼は彼でかなりの転換点を経ているようだ。雰囲気も、よく考ええると随分と薄れてしまつている。

「僕の過負荷、『大嘘憑き』は覚えてるよね?」

マイナス

オールフイクション

「覚えてるよ。『劣化大嘘憑き』だとか、『却本作り』だとか、色々持つていたね。確か、

「現実」を「虚構」にする能力だつたっけ?」

すべて

なかつたこと

馬鹿げたスキルだ、文字通り戯言だと思ひながら観ていた。受けた傷を、誰が対象で

あろうと因果律を巻き戻して再生。それ以外にもあの時宮の操想術を「なかつたこと」にしたり、どこの誰だか覚えていないが思考でき「なかつたこと」にしたりしていた、アレだ。

ブックメーカー

『却本作り』は封印系統のスキルだつたか。球磨川禊という一団体と、何から何までのステータスを同一にするとうこれまたふざけたもの。最弱だ最弱だと言っている彼だからこそそのスキルの真価が発揮できるわけだが、どうだろう。それはあくまで彼が本当に弱い場合の話だ。



現に、潤さんは抜け出していたし、球磨川くんの話では他にも抜け出したことのある人がいるらしい口ぶりだった。となると、その弱点は彼も認知しているところなのだろうとも。今更ぼくが注意することでもなさそうだ。

尚、そのスキルの加減で痛みは無いらしいとは言え友に螺子込み螺子伏せたことに關しては許していない。結構根に持つ方だぞ、ぼくは。

「ん？ 何か言いたげな目だね、喧嘩でも売ってる？ 僕、売られた喧嘩は買うけど抵抗せずに気が済むまで殴られた後にその辺の關係ない一般市民に八つ当たりして気を晴らす派だよ」

「括弧付けてなくてそれなのか……気のせいだよ。僕だって売られた喧嘩は色々税を付けた上で転売する派だ。そういう世間話は捨て置いて、その取り返しの付かないスキルがどうしたんだい？」

益体のない応酬を止め、さっさと本題に入る。

「いやいやそれがねえ、なんと。取返しの付くスキルに改造なっされてき。『虚数大嘘憑ノンフィクションき』って言うんだけど。「なかつたことにした」ことさえも「なかつたこと」にできる、っていう」

はつきり言つて、驚いた。まさか、取り返しが付くようになっていたとは。元から彼のそのスキルの扱い方は随分と取り返しが付かなくなっても良いような使い方ばかり

だったが、今までに「なかったこと」にしたことさえも「なかったこと」に出来るようになるとは。

不可逆が設定変更で後からも可逆にアップデートされるなど、ゲームの世界でも早々あるまい。大抵、今までしてきたことの取り返しは付かないものだ。それも過去、何年と経っているか分からないものなど。

「いや、ついで取返しにすら憑かれるようになった、ってところか」

「ええ……そんなに背後霊多いの嫌だなあ。美少女なら良いけど。ああでも、こんな日に美少女に日がな一日べったりくっ憑かれてるってバレたらそれこそ何かに憑かれちゃうかな?」

括弧付けなくなった、という割には然程調子の変わっていないように思える。彼の場合、ぼくと違って自分を偽っていたりしたわけではないのだから、括弧付けるも付けないうも言うほど変わらないのは仕方ないのだろうか。いや、僕も自分を偽った覚えは無いけれど。

戯言だ。

「僕も僕だけど、そういえばいちちゃんもこんな日に何してるんだい? 君は彼女と口り奴隷がいただろう?」

「段々と健全な美少女奴隷になっているよ。じゃなくて」

危ない、うっかりとんでもないことを言ってしまった気がする。

「ぼくはこれから帰るところだよ。彼女のところじゃないけど」

「あれ、クリスマスだつてのに彼女といちやいちやちゅつちゅしないのかい？ 十几年来くらいに互いのことを想いやっているようなそれはもう素晴らしい関係性だと思つてただけどなあ」

球磨川くんが見た友は一瞬だつたはずだが。それも、すぐさま螺子伏せていた覚えがある。聞いた台詞も一つや二つだろう、よくもまあその程度しか聞いていなくてそこまですげなと語れるものである。流石は虚言使い。

「それとももしかして君達はただ単に彼氏彼女なだけで実は良い友の延長線上だつたりした？ それならきちんと否定してほしかったよ」

「肯定した覚えは無い。そもそもとしてその時に肯定できないよ、彼女じゃなくなつたし」

「あれえ？ 僕としたことが相手の関係を見間違ふとは……詰めが甘くなつたかなあ」

「プロポーズしてたし」

「そつち!?!」

あちやー、既にその段階越えてたかあ、と額に手を当てて嬉しそうに、自分に呆れる球磨川襖。嬉しそうに？ それは答えを外した自分ではなく、どうもプロポーズして

いたばくに対して、のようだ。

彼は人の幸せを妬み、不幸を愛する人間だと思っていたけれど、それもどうやらこの一年で随分と変化したらしい。取り返しが憑くようになったことといい、括弧付けなくなったことといい、一年前の彼と同じ人間だと思わなくらいが丁度良いのかもしれない。

「じゃあそつか、おめでとうだね。素直に祝わせていただくよ」

「ああ、こちらも素直にその祝福を受け取っておくよ」

「それにしてもあの子の苗字がいーちゃんに合わせられることになるのかな？ となると、呼ばれ間違いが発生しそうじゃない？ それとも違う方の名前で呼ぶのかな？」

今度は顎に手を当て、如何にも考えてますよと言った動き。既にそのはったりに近い、見抜いているかのような言葉群は間違いだつたという現実が見えていたはずなのに、もうそれは虚構になっているみたいだ。前言撤回、やはりこの男、変わっていない。「その辺りの話はこういうところにするもんじゃやないよ、やめてくれ」

「じゃあ別の話にしよつか。クリスマス・イヴだつてのに帰る時間遅過ぎない？ 大学生だつたっけ。少なくとも学校帰りには見えないぜ」

「突っ込んでくるなあ……その通りだけど。大学はもう中退したよ、今はもう別のことを始めてる」

「というか、高校を卒業したのならば球磨川くんも大学生だと思っただが。いや、今こ  
うやってこんな場所で油を売っているのを見ると、どう考えても大学には通っていない。  
い。そもそも帰宅の電車賃が無いくらいに懐が寂しい男だ、進学したくでもできないく  
らいではなかるうか。」

「へえ。請負人とか？」

「何で知ってんだ本当」

「そう。潤さんにはまだ話してないが、ちまちまとそういうことをこなしていつてい  
る。まだまだ初心者だし、半人前とすら言えないけど、何とか今のところ食っ  
てはいているので問題は無いだろう。」

「人類最強の請負人に憧れて人類最弱の戯言遣いが人類最弱の請負人にジョブチェンジ  
か、戯言だね」

「そうやって人の痛いところをちくちくというかずけずけと螺子込んでくる球磨川くん  
は、虚言だよ」

「割と気にしているところなのに。何とかやれているとはいってもやはり、あの人の万  
能さ加減には及ばない。ある程度までいけたなら、あの人に話して色々協力し合うと  
いうのも夢だけど……いや、世話焼きなあの人のことだ、既に知っていてそのうち僕に  
生死ギリギリでクリアできる請負を取ってきて投げ付けてきそうな気がする。」

前に球磨川くんを送った時も、請け負うんだぜだの何だの、そういうことを把握しているかのような物言いだったし。確かに先んじてライバルになると言ってしまったばかりが悪いが請負人になることまで把握されているとは思わなんだ。

「でもそれなら結構良い偶然だね」

ふと、気分でも変えたのか、という風に彼はそう言う。本当に良い偶然だと思つているといふか、それこそ、丁度良い、というか。前の彼ならばぶつた切つて本題と虚言をませこぜにしていくところだろうに。

根底が変わつてないだけで、本当に外面の表面のそういうところは変わつていない。根底が変わつてないだけで。その根底が結構な問題点だったりするのだけれど。

「今その『虚数大嘘憑き』で今まで迷惑をかけた人達を水に流してもらつていんだけど「なかつたこと」に「なかつたこと」に」

そんな全国ツアーをしていたのか、彼は。しかし、移動賃すらない彼だ、迷惑をかけたと言つても範囲は知れているだろうし人数も知れている。そうなると今頃京都という、九州から考えれば日本を半分も進んでいない場所で燻ぶつているのは少しおかしい。

「二年も経つてるんだからもう終わつてそんなもんだけど」

「時宮、だっけ？ あの人達が見つからなくてね。あと、君も知つているであろう、よく

分からない誰かも、ね」

「ここが最後なのか」

「そういうこと」

ならば納得である。にしても、彼は確か闇口とも会っていたはずだが、そこにはオールフイクション『大嘘憑き』とやらは使わなかった、ということなのか。さしずめ小唄さんが盛大に、否、十全にやってくれたのだろう。

にしても、そうであれば確かに良い偶然だ。あれから一年経って、あれの始末を付けに来たところにぼくが遭遇する。変な偶然とも言う。が、そうなる则下手をすれば潤さんも、それどころか狐さんも現れそうでも帰って欲しいというのも本音。

「そして偶然にもぼくが請負人を始めたから時宮……えつと、刻弥きとみさんと指針ししんさんを探して欲しいと」

「と、誰か、ね」

「それは難しいぞ……その誰かの何から何までの記録を「なかったこと」にした君が悪い。誰か分からないと流石に探せないよ。それにまず、その誰かに謝ろうにも「なかったことにした」ことを「なかったこと」にしてからじゃないといけなくなるじゃないか」

その誰か、男か女か大人か子供かすらもう分かりはしないが、その誰かとコンタクトを取るにはまずそこから始まる。コンタクトを取る頃には、彼の『虚数大嘘憑き』ノンフィクションはも

う発動してしまっているのだ。今のところ一度として使っていない、そのスキルを。

「いつそそれが出来たら楽なだけだねえ。誰かが誰なのか分からないせいでスキルの使いようがなくてさ。ま、その誰かは二の次で良いから、時宮さん達は任せるよ」

「……………今からかい？」

「来年の三月までかな、いや、年末までかな。あと三人だけなわけだし、誰かを抜いてもあと二人だ。それだけの数ならもうすぐにも見つけにいきたいからだね」

今からじゃなくても良いというのは安心した。何せぼくは今も足を動かして、あの元骨董アパートへと帰ろうとしているのだから。球磨川くんが付いてこようと関係ない、とにかく帰宅することが重要なのだ。

「それにそりやあ愛してる人とのらぶらぶを邪魔するつもりなんてないよ」

「その心がけは有難いけどそれならそれで付いてくるのをやめるわけじゃあないんだね」

「何となく気になるから」

変わっていない根底はそこもか。邪魔をするつもりはないというのだから一目見れば帰るのだろうか、それほどにまで気になるものか。というか、帰るってどこに帰るんだ？

「野宿かい、君」



「どうだろうねえ、少なくとも今夜はちよつと出歩くつもりだけど。僕にとつてもクリスマス周辺で言うのは、そこそこ、思い入れの深い日だからね。間違つても誰かと過ごしたい日じゃないのさ」

クリスマスなのに、誰かと過ごしたいわけではないのか。もしかすれば、彼は彼で何かしら、恋愛で大きなことがあつたのかもしれない。彼女を取られたのだろうか？ いや、彼に限って彼女がいたとは正直思えない。片想いの相手が、存分に幸せになつたところを目撃したとか？ それともその人の分岐点だったのか。

ぼくよりも確実に深い理由がありそうだ。だからと言つてここでぼくが「そんなに大事な日なのかい？」とでも聞いた途端、「財布を落とした日だからね」という風なしようなない虚言が帰つてきてぼくが「どうでもいいよ」と叫んで終わり。そういう戯言みたいな男なのだ。

「正直本音を言うと君が友と会うことを許容したくないんだが」

「まあ友ちゃんは絶対に僕に会いたくないだろうね」

「馴れ馴れしく呼ぶなぶつ殺すぞ」

「おーこわいこわい。どつちにせよ僕は玖渚さん……いや待つて、どつちにしろ君と被るんだから下の名前呼びしないとどうしようもないよね？」

「本当だ!?!」

迂闊だった。これは迂闊過ぎた。そうだ、苗字を合わせるのだから友は誰からも友と呼ばれてしまう。畜生、これは考えていなかったぞ、畏過ぎる。まさか合法的に呼ばれない奴等から呼ばれるしかない状況に自ら陥らせてしまうとは、ぼくは馬鹿か？

「じゃあ奥さんで」

「それはそれで恥ずかしいからやめてくれ」

元骨董アパートへと、踏み込んだところでそう言っておく。全く、何が好きでこのような男を友にまた会わせなければいけないのか。多少はその過負荷マイナス具合が薄れているようだが、根底は変わっていないのだからご察しだ。

「でも今夜と明日の夜は俗に言う甘い夜を過ごすんだらう？ なら間違っていないと思うんだけど。それとも何、何もしないの？ ナニも？」

「そういう意味深な言葉をぼくに投げかけるのもやめてくれよ、ぼくはそこまでメンタルの強い人間じゃないんだ」

「逐一注文が多い人だねえ。一概に人の物になってないとしても？ 喜びなよ、今の君達は充分に幸せなんだから。君達はそれを味わう位置にいる。外になんか立つちやいないぜ」

括弧付けてない割には、恰好付けたことを言うらしい。嘘に憑かれている彼だし、取返しの憑く彼だし、もしかすればと勘繰っていたがやはり恰好もなんだかんだ憑いてし

まっているのだろう。

そんなことを考えつつ、ぼくの部屋の前へ。一応インターホンを鳴らしてから鍵を開けて、扉を開けると相も変わらず反応の速いことで、既に彼女は玄関に立っていた。一年経っただけなのにあの蒼い髪も瞳も雰囲気も、随分と落ち着いたものである。ただ、片目だけあの頃の蒼さを保っているか。

「ただいま、友」

「おかえり、いーちゃ——」

しかし彼女の言葉は途中で途切れる。

無論別段、後ろに控えている球磨川禊が螺子を散々に螺子込んだわけではない。そんなことをしなくなった彼なのだ、というか本当に何もしていない。が、彼が視界に入った瞬間に友の顔つきが変わったのである。

具体的には眉をひそめたしかめっ面。とても彼女には似合わない感情の表情である。この一年、徐々に彼女の様々な感情を色々な表情で見てきた覚えがあるが、それにしたってここまでのは初めて見る気がする。

うん。

「気持ちに分かるがだからって無言で扉を閉めようとするのはやめてくれないか友!」

「やだ! 見たくない! 絶対に関わりたくない! 早く捨ててきてソレ!」

「拾ってきたわけじゃないから！ 単に顔見たいって聞かなくて勝手に付いてきただけで家上げる気なんてさらさらないから！」

「すつこい酷い言われ様だね、本当……この一年間、時たま僕のことを思い出しては罵倒してたんじやないかってくらいだぜ」

扉を引いて閉めようとする友と、隙間に片足を入れて何とか扉の閉まりを止めた上でこちららも扉を引いて開けようとする僕。その応酬を見て、球磨川くんはそんなことをぼやいていた。

尚、ぼくはそんなことは断じてしていない。というか正直忘れていた節がある。記憶力はあまり良くないのだ、思い出せる時ならば鮮明によく分からなく思い出せるあの日だが、忘れているときは全く頭に出てこなくなる。

ただ勿論、友を螺子伏せたことに関してはいつまでも覚えてるし許していない。そしてそれは友も同じらしく、だからこそ今こうやって球磨川禊という存在を力いっぱい拒んでいるのだろうか、

その力いっぱいには急に萎れてたのか、ぼくが扉を開けることに成功した弾みで彼女はぼくの胸に飛び込んでくる形になる。僥倖と言えば僥倖だが、やろうと思えばいつでもやれること、これのためだけにわざわざ球磨川禊との再会を僥倖の理由にしたくない。

「話し方が………変わってる……？」

どうやら、友もそれに気付いて力が抜けたようだ。あの時、ぼくよりも彼に対しての事前知識があった彼女なのだから、あの括弧付けた喋り方と性格、言動諸々は色濃く記憶に刻まれていたのだろう。それが今、覆っていることに驚きを隠せないといったところ。

「あはは、僕は僕で色々あったからね。それにしても、それが今の君達の幸せか。良いねえ、久々に良いものを見たよ、僕は。さてそれじゃ、一目見て満足したし、僕はまたそこら辺をほつつき歩いてくるとしようかな。あ、いーちゃん、時宮さん達のことがかつたらまた連絡してくれよ」

呆けたままの友と、見たことのない、それはもう幸せそうな笑顔をしてぼくらを褒めた球磨川禊を見て呆気にと取られていたぼくを放置して、彼はつかつかといなくなった。根底が変わっていないとは言ったが、だからと言って外面が変わり過ぎだろう。あんな笑顔、彼が出来るとは微塵も思っていなかった。

そして。

「君の連絡先知らないよ……………」

この請負には、重大な欠陥があったのだった。

## 人間失格

今年の冬は実に冷え込み、どれだけ服を着込んでも寒さを感じられる。しつかし、何だ。今日は確かクリスマス・イヴとかだったか……ああいや、もうてっぺんを回っているし日付自体はクリスマスなわけだ？

「つたく、そんな日頃に俺はなんでこうして外を出歩いてんのかね」

しかも何となくで京都なんつーとこにまで来ちまってよ。いつぶりだ、こんな場所に来んのはよ。去年の十月だかそこらでかの欠陥製品野郎を助けたとき以来、か？ いや正直覚えていない。もしかしたら記憶に無いだけで一か月前もいたかもしれない。

自分でも把握しきれない自分の行動つてのは流石にどうかした方がいいかもしれない。こんな奴から色んな奴に変な心配をかけるつてんだ、自粛できる気はしないが自粛できるよう頑張らせていたどころ。

そういえば、心配じゃなく迷惑をかけまくるタイプである欠陥製品君のアパートだか何だかも確か今いる市の中にあつたっけか。会いに行こうとは全く思わないが、遭遇したくないとまでは言わない。

どうせ無関係な他人だ、そんな頻繁に鏡を覗かなくなつて良いだろう。それに正直会

うならあの馬鹿げた人類最強みたいな高身長美女の方が良いな。もしくは捨てられて彷徨つてる野良犬。似たような奴よりも好きな奴に会いたいもんだぜ。

とか。

そう、頭の中でぼやいていると、俺の視線の先には一つ、割と目を背けたくなるような意味不明な存在が。何だ？ アレは。白シャツに黒ズボンだけの、お洒落の欠片も微塵と無い服装なのは置いてくとしても、だ。

何故あそこまで欠陥製品を絵に描いたような奴がいる？

人類最強さんと人殺しをしない約束をしてから随分と経つが——ここまで、日頃殺されていそうで、殺しても良さそうで、殺しても問題なさそうな存在を見たのは初めてだ。欠陥製品は違う。あいつは、殺さないといけなくなっちゃまいそんな存在だ。が、今俺の視界が捉えている奴は、殺さなくても殺しても変わりないような。

何をして、どうにもならなくなるような。虚しくなるような。そんな印象を、受ける。

「うん？ どうしたんだい、そんなに僕のことをじつと見つめて。もしかして僕のファン？ お洒落ガンバリストくん」

「何だお前!？」

何故その呼称を知っていやがる!？」

違う、それも驚きだが驚きべきは俺の方を見ていなかったにも関わらず、そこそこの位置にいたにも関わらず、意識の隙間を縫って突然俺の目の前にまで移動したことだろう。人体に不可能なことではないが、だからといって普段から炸裂させるような術じゃない。

「僕は球磨川禊。何でもない、ただの過負荷だよ」

……マイナスとは何だろうか。それを自己紹介に使った辺り、欠陥マンの類なのは分かる。あいつのは確か、戯言遣いだったか。かはは、傑作過ぎる。そういうところまで似てんだな、こいつ。

鏡に映されたものを絵に描くたあ不可思議な現実だが、写真を撮られることだってあんだから不思議な幻想ってほどじゃあない。にしても、こういう存在がまだいるとは全く以て驚きだぜ。

「そうか。俺は零崎人識。何でもない、ただの人間失格だ」

「なるほど。よろしく、ぜろりん」

「本当に何だお前!?!」

何故その呼称を知っていやがる第二版!

その呼び名をする奴がこの世に二人もいるとか御勘弁願いてえ!　そして何故だが分からんが確実にこいつはその系統の呼び方をする気がする!　それそのままではな



いだろうが確実に俺にとつちやあ不本意な呼び方で。だ！

「だから僕は過負荷ほくだつてば。人識ちゃんそが人間失格うであるように、さあ」

ほらな！

「初対面だつてのに馴れ馴れしい奴だなホントよお……」

「そう？ そんな気はしないけど。こう、毎日通勤通学の電車で、窓越しに視線を合わせてしまういつもの人みたいなの、そんな感じがするけれど」

「言い得て妙だな鏡映しの似顔絵野郎。つたく、お前アレか？ 欠陥製品と知り合いか？」

「欠陥製品つて？」

素直に聞き返してくる。無駄に知りもしないであろう呼び名を知っていたあたり、こちらが適当に呼んでいる相手のことも把握してくれるもんだと思っていたのだが案外そうでもないらしい。

まあ、普通こんな言い方されて誰だか思い至るわけではないわな。何にせよぼつたり初めて会った奴に俺は何を期待してんだつて話だ、全くつて言うならこれこそ全くだ。俺も随分と他人を変な風に信じるようになってしまった。

「あー、何だつたかな。い……いー？ やべえ、あいつの名前本気でど忘れした」

欠陥製品と呼ぶことに執着していた時期があつたせいで忘れちゃった。「い」から始

まるのは確かなんだがな。何だったか。いつくん？ いっきー？ いーたん？ いの字？ いのすけ？ いー兄？ いーいー？ いやここまで色々思い当たる節があつて何で俺は出てこねえんだ。

「ああ、いーちゃんのことか。さつき会つて来たところだよ。らぶらぶするらしいから冷やかしてきた」

「思ったよりも細部まで首突つ込んでんなお前……………」

らぶらぶつて何だよ。言葉で言うより可愛くなくともつとエゲツない生々しい何かな気しかしてこねえその単語、逆に傑作だぜ。しかもあいつがそんなことをするのか、確かにそれは冷やかしたくなる。見物とも言う。

どうせあの赤色ならそのことも知つてんだらうし、もしまた会う機会でもありやそんな時にでも訊いてみるか。そのもしがもし過ぎて会わない可能性の方が高いんだけどな？ ま、そこはそれ、なるようになってくれや。

「それで？ 俺なんかに言われたくはないだろうけど、あんたはあんたでこんな時間になんかこんなところほつつき歩いてんだよ」

「んー、餌？ 餌？ 前にここに来たときは僕目当てで来てくれた子がいてね。もしかしたら、一年経つた今でも適当に夜中に、それも一人で歩いてればそういう人から襲つてきてくれるかなつて」

こいつ目当て？　で襲ってくる？　何だそりゃ。こんな奴、間違つても殺したくねえ。殺しても良いとは思うが、殺したら最後、その後の人生がしつちやかめつちやかにされてこつちの精神が殺されそうな奴だつてのに。

っーか。

「殺し名のこと言つてんのかソレ？」

「殺し名……ああ、そういえば似たようなものらしいね。闇口だとか、アレでしょ？　闇口さんはたまたま巻き込まれただけだから違つて、僕が用があるのは時宮さんなだけど……何だつたかな。呪い名、だつたっけ」

どうやらどつちにも面識があるらしい。それにしたつて、流石は絵か。一つずつとは言えどつちの集団にも会つたことがあるうえで俺を引き当てるか。それもほぼ偶然、自分からそれらと会うことを目的としている時に。

「呪い名で合つてんな」

「お？　何々、もしかして知つてたりする？　時宮刻<sup>きせき</sup>弥<sup>なみ</sup>さんのこと」

「残念ながら知らねえ。まず俺はどつちかつつと闇口衆の殺し名関連の人間だ、それに時宮はちと知り合いにいづらくてな。そいつらに会つたら殺せと言われてる奴が知り合いにいるもんでよ」

殺し名と呪い名の対極、というやつだ。仲の良いところもあるが、こと時宮とその対極

である匂宮は相性が悪過ぎる。言つた通り、匂宮の奴等は時宮を見かけたら問答無用で殺戮を始めるくらいに仲が悪い。

尚、零崎たる俺の一賊にはその対極が存在しなかつたりする。ただ、まあ、人間失格と欠陥製品の無関係性さから見ると、対極と言えなくもない機関だり何だりが存在していても正直おかしくは思えないところではある。

「なあんだ、知らないのか、それは残念だ。……いや。案外、残念じゃないのかも？」  
 「人から残念って言われるのはちと嫌だが、撤回してくれんなら良いや。だが何で撤回した？ 別段俺は今あんたに有力な情報を何一つとして追加してないと思うぜ」

まともに他の奴等とも連絡を取つていた零崎が生きていたならそりやあ確かにこの球磨川禊とかいう野郎に協力できるかもしれないが、俺にそんな伝手はないし、協力する気もはつきり言つてない。

残念と言われて仕方が無いうえに、がっかりだなんて言われても文句は言えないくらいの立場だぜ。なのに何故か、この男はそれを撤回した。特に何かしらの情報が今の俺の言葉から把握できたわけでもなし、何ぞや周囲にそういう奴が現れたわけでもなし——  
 いや、そこは否定しよう。

現れていた。

三本ほど離れた街灯で照らされた地面に立っている。闇との区別がつかない黒髪に

光の反射が講じたのか生氣のない白色の肌。そして、『死神』の名に恥じない黒い外套をはためかせ、無駄にでかくて機動性も悪そうな大鎌デスサイスを持った男が。

「石風調査室……………」

「やっぱり誰か寄ってきてくれたね。もしかしたら人識ちゃんも一緒にいたから寄ってきたのかもしれないし、って思って撤回したんだよ」

俺だつて恐怖は感じていないし、至極冷静だが。それにしたつてこいつのおちやらけ具合はとんでももないな。相手は『死神』。こともあろうか、運命に背くから。生きていべきでないから殺す、殺し名だぞ。序列七位、最下位とは言つたつてこいつらだけは別格で特権階級そのものだ。

そんな奴がわざわざ来たつてことはつまり、殺しに來たつてことで。ああ畜生、どうするか。この男狙いならまだしも、万が一俺まで巻き込まれてみる。流石に石風相手に殺さずして振り切れるか正直自信は無え。

「やあ、えつと、石風さん？ 僕は球磨川禊。ちょっと尋ねたいことがあるつていうか、訪ねたいところがあるんだけど」

そして普通に質問をするか普通。不通過ぎんだろ。思い通りにならなさ過ぎる、本当に何なんだこの男。

「私の名前は石風世石せいし。あなたが球磨川禊などどうでも良い——あなたは、生きて

いてはいけない」

「なあにそれ。生きてちやいけない人間なんている？ 僕は全く心当たりが無いぜ、そんな奴。全員生きてりや幸せプラスなんだから、わざわざ殺して不幸マイナスにする意味が無いでしよ。片腹痛いぜ」

そしてその調子のまま、何も臆さず一步前へと出る。おいおい、こいつ正気か。流石にどんな奴でもあの鎌持つてる馬鹿見たら驚くか怖がるかするだろ。笑いながら近寄るとかどこの真紅だよ、お前から出てる雰囲気はむしろ真逆だろうが。

「おい、あんまり近付くのは得策じゃないぞ」

殺し合いならばともかく、話すのであれば特に。何せ相手は殺しに来ているのだ、話を聞く必要性は皆無。今だって、制止だか静止だか知らんがああ石風が唐突に動いて球磨川禊の首を刈り取る未来だって十分にあり得るのだから。

「あはは、その辺は大丈夫だよ。僕は命とか色々捨てがちだけど、捨えないわけじゃないからさ」

説明になつてねえ。どういふことだ。

「ま、でもちよつと用心はしところか」『大体、命を軽く見てる人なんて一握りさ』『何だったら僕が命をどれだけ重く見ているか』『この身体の強さで証明したつて——』

喋り方が少しばかり変わったか、と思つた頃には本当に球磨川禊の首は飛んでいた。

眼にも止まらぬ速さでその大鎌は横一線、まさに一閃。綺麗な首切り死体の出来上がり。血液の出方も素晴らしく美麗としか言いようがない、噴水。

しかし、その首は地面に落ちた音がしなかった。

どころか、血だまりすら出来ていないし、彼の服には血痕も付いていない。それにまた一步踏み出し、不敵に嗤う。傷跡なんてものも無ければ首も切られていない、皮一枚ではなくまるごと肉がくつついている。首を切られたのが嘘だとしても、なかつたことだとも言うかのように。

おいおい、流石にそれは、傑作度合が過ぎ過ぎてている。

『オールドフイクション大嘘憑き』！ 僕の首斬られを』『なかつたことにした！』

「んなんとんでもスキルがあるなら最初から言え……心配することうちの身にもなつてくれよ」

「おっと、それはごめんね。最近誰かに見せる機会もなかつたからね、この過負荷スキル。説明するのも元からだんだん面倒倒になつてたし、忘れてたよ」

またしても話す調子を変えてちゃんと謝ってくる。何だこいつとは何度も言つていたし思つていたが、ここまで来るといよいよ意味すら分からない。体質とかそういう常時発動型パツじゃなく、出夢の一喰イテイシクワンいみたいな必殺技アケテイブのスキルなのか。

「じゃ、久々の説明とさ。僕の過負荷マイナス、『大嘘憑き』は何と「現実」オールドフイクションを「虚構」なかつたことにす

る、でもその「なかったことにした」ものは「なかったこと」にできない、取り返しの付かないヤバイスキルさ」

「……時間の遡行ってことか？」

「難しく言うたちよつと違うけど因果の越え方は近いかな。僕は何でも戻すんだよ」

そうなると、実質殺すことは不可能じゃないか。これまた、ここに来てとんでもない野郎が現れたもんだぜ。殺し名の天敵も天敵、言うなれば「死なない」存在。それを殺そうつつう石風が目の前にいるのに、だ。何の偶然なんだか。

「だから、何だという。それならば、殺し続ければ良い話だろう」

石風調査室の人間はそんな見解を述べる。本来ならば零崎姓の奴でもそんなことは出来るわけがないんだが、『死神』の名は伊達ではないと言いたるところなのだろう。もしかすれば石風調査室の室員全員を呼んで交代々々、永遠に殺し続けるつもりなのかもしれない。

そしてそのためか、また一段と速度を上げて球磨川禊へと鎌を振ろうとする。  
が。

『オールフィクション』  
『大嘘憑き』。その鎌をなかったことにした」

身も蓋もないものを「なかったこと」にする。

「エモノを取り上げるたあやつてくれるな。さしもの石風さんでもこりやあ手の打ちよ



うがねえか？」

素手で人間一人を殺し続けるなんて真似、確実にその手が壊れること間違いなしだ。俺なら『大嘘憑オールドフェイスき』というスキルが分かった時点で撤退する、んな無謀な行動は取りたくねえ、博打ですらねえんだから。

「構わん。それならそれで——」

「しつこいなつつつたんだよ。生きてはいけない？ 馬鹿か、このやべえ野郎は生きてはいけないわけじゃない。『死神』ならしゃんと見極めろや」

生きてはいけないと思うってしまうような野郎は別にいる。この球磨川禊という男は、そいつに似てはいるがそうではない。違う。生きていなくても良いんじゃないか、とは確かに思わされるし殺してしまっても良いんじゃないか、とも思わされる、が。

それは生きてはいけないというわけではないし、殺さないといけないわけではない。そもそもとして殺すのをほぼ不可能にするかのようなスキル持ち、早々に諦めるのが正解のはずだ。何がそこまで殺意を加速させるんだか。

「まだそれでも目が曇ってるってんなら俺が相手してやる。生憎、こちとら殺人することを禁じられてる身だが、ま、少なくともてめえのその腐った目玉くらい抉って解して並べて揃えて晒してやんよ」

「そういうのめんどくさいから良いってば」

相手を見据え、ナイフを構えようとしたところ、唐突として目の前の男はいなくなつた。

「は？」

え、おい、今度は一体何を「なかつたこと」にしやがつたんだこいつは。折角俺が傑作にキメて恰好付けたつてのに、何てことをするんだ。

『安心大嘘憑き』。石風世石、彼そのものを「なかつたこと」にした。さて、こつちのスキルは説明しないから分からないだろうけど、急いでここを離れようか。ああいう何も教えてくれなさそうな手合いには興味が無いんだ」

「それは良いけどよ……」

つまるところ、あいつの存在自体を「なかつたこと」にしたらしい。死んだと言つても良いだろう、死体は無いが。そう考えると完璧な殺人だ、とんでもねえな過負荷<sup>マイナス</sup>つてのは。

しっかし、あつさりと人を殺したわけだがそれで良かったのだろうか？ 何せそのスキルは「なかつたことにした」ことは「なかつたこと」には出来ない、取り返しの付かないスキルだとか何だとか言っていたじゃねえか。

いや、言っていないかつたか。

今こいつが使つたのは『安心大嘘憑き』だ。『大嘘憑き』じゃあない。急いで離れよう

と言っていたり、あたかもまだ現れるみたいな言い方をしているあたり、おそらくは完全には「なかったこと」にはしないスキル。

こいつ、そういうスキルを一体いくつ持つてんだ？ バリエーションが既におかしいだろ。「なかったことにした」ことが「なかったこと」になるスキルってんだから、自在じゃねえか。時間制限があつてその時間を変えられないつつう欠点はあるみたいだが、それだけで。それだけで相当なアドバンテージになる。

やろうと思えば自分の存在をそんだけの時間だけ、「なかったこと」にして相手を翻弄するなんていう馬鹿げた真似も出来なくはないだろう。自分を「なかったこと」にする、死亡判定が出てスキルが曖昧になつちやつたりするのもかもしれないが、可能性はある。

「そんなふざけたもんを持つてる癖に体力はカツスカスタあな！ 傑作にも程があんだろうよ！」

「いや……本当………運動とかまともにしたことなくてさ………うん………高校の体育の成績も、全部サボつてたから危うく留年を喰らうとこだったりしたよ……」

今は球磨川禊を担いで走っているとどこか酷い要望だ。そして俺の方が身長が低いというのに担がせるとはどういう了見だ。馬鹿馬鹿しいぜ。馬鹿らしくなってくるぜ。

「ああ………うん、これだけ離れば十分だよ………ありがとう、人識ちゃん………」  
「そう思うならその呼び名は改めて欲しいとこだが」

言われたところで止まり、降ろす。場所は奇しくも欠陥製品と出会ったあの橋だ。確か四条大橋だとかそんな名前が付いていたか。正確には邂逅したのは橋の下だが、まあそれなりに思い出浅い。

「んで、こつからはどうすんだ。時宮を探してんだろ？ 石風が来たのは驚いたが、あの調子じゃあ次どこが来たって話に取り合ってくんねえぞ」

「あはは、やだなあ。何日かいればきつと誰かは取り合ってくれるよ。一応いーちゃんにも請け負ってもらってるし、問題ないさ。なんとかなるって」

「何もなんとかならなくなりそうなのがあんただと思うんだが………ま、俺の与り知るとこじやねーな。それなら俺はここでお別れかい？」

口惜しい気もするが、気がするだけだ。気の迷いレベルの。あの欠陥製品と同じで、俺とこいつもあまり長く一緒にいる意味が無い。むしろどんどん悪化していく予感がある。制約付きとは言え殺し名である俺と、殺されても殺されても殺されないこいつ。

とんだ戯言だな。

「そうなるねえ。また会うことがあればよろしくだぜ、ぜろりん。次は良い傑作を見せてくれ」

「ああそうかい。もう会いたくねえよよろしくしねえ、禊ちゃん。次も悪い大嘘に憑かれてろ」

## 結晶皇帝

京都という土地柄でありながら、珍しくこの時期にちらほらと降る、白い雪。この辺りでは確か一月くらいに降るものだと思うのだが、変な季節もあるものだ。もしかすれば今、どこかで何かが起きていて、変なものが降るような面白おかしいことが起きているのかもしれない。

主に、戯言遣いのお兄ちゃんの周りで。

しかし、文字通りのホワイトクリスマスとは言えど、私もあの人もこういうイベントには疎いように思える。毎年、我が兄、萌太が何かしらプレゼントを買ってきていたりしていたからこそ認知していたイベントだが、去年からはそうではないわけで。

特に去年はまず近日にあの意味不明な忘れたくても忘れられない、戯言遣いのお兄ちゃんに在りもしない汚点を詰め合わせて悪化させて混ぜ合わせて何もかも混ぜこぜにした上で全てを台無しにするかのような存在がいたせいでもある気はする。見ようによつては殺しても殺さなくても何も問題は無さそうな存在だ。

が、アレは殺すに限る存在だと私は思う。そもそも、何故生きているのか。どう考えても人生において全ての試合も勝負も敗北をしていて全世界における負け犬みたいな

雰囲気でありながらまだ死んでいないのは自然の摂理に反しているだろう。

「二度として会いたくない……………」

「そんなことを言うとか会いたくなつちやうのが僕なわけなんだけど」

「は!？」

驚いた。

私の顔の真横、右にいきなり横向きのその男の顔が。近過ぎる上に唐突過ぎる。ふぎけるな、腐つても闇口衆、対敵対存在感知はいつでも気を張っているというのに、こんな近くにまで寄られるなんて。それもこんな男に。

「な、何なんですか、何故ここに！ 貴方はあの時、戯言遣いのお兄ちゃんに連れられてどこぞと知れぬ場所に帰つたのではないのですか！」

「いやあ、ちよつとした野暮用でね。ここがその野暮用の最後の地なんだ、それでほつき歩いてたら何と目の前にとんでもない美少女の後姿があるじゃないか、声もかけたくなつちやうよね」

どういうことだ。どういうことだ？ 野暮用？ しかも、声の調子が少し違うらしい。それに、雰囲気も。一年前とは打つて変わって、とまでは言わないが、柔らかく……いや。憑き物が落ちたかのようになっている？

「まるで今日の雪のようによいや雪化粧をした遠方の山を地平線に置いて白銀の世界から

純白の光彩を浴びせたかのような白磁みたいに透き通った儂げでありながらもそれこそ色が抜けたことを思わせるほどにまで清楚さと純朴さを兼ね合わせた白が広がっている綺麗な肌のうなじに、光を感じさせない漆黒なものにも関わらずこれでもかというくらいに艶やかで艶めかしさも誘発させていて見た人に闇夜を連想させてしまいかねない危険さを漂わせておいても尚その深く墨を差した影のようできて深く清らかでもあることを突き付けてくる濡れ羽の黒で染められた美麗な髪の流れ、そしてそれらの相反していて反転していると言っても過言ではない白と黒という対極の色味を限りなくふんだんに使われた彩色である癖にだからこそとても言いたげなほどにまでその秀麗さを導き出していて見る者見た者全員を魅了しかねない雰囲気醸し出しつつ且つその絶妙に絶妙という絶妙を絶妙させたバランスを崩さないどころかそれ以上にその魅力を引き摺り出している何もを見透かしていそうなしかしだからといって人の髓までは覗かないことを決めていると分かる瞳に目鼻立ちに顔立ち。ここまでとんでもなく端麗な美少女のそれはもう風光明媚そのものと言っても全く言い過ぎでないことを体現した存在の後姿というどう考えても見た者は立ち止まって拝み咽び泣いてから地に平伏して感謝の言葉を述べ連ねるのであろう僥倖を手におきながらその存在に声をかけないだなんて思考に行き着く男は人として存在する価値は無い上にそんな思考は思考とは言えるわけもなく考える輩である人間としての存在価値が問われるとしか言い



様が無いから僕は声をかけたわけなんだけど」

「はっ。」

私はそのような追加情報を知りたくて黙ったわけではない。そもそも、このような男にどれだけ甘言を捲し立てられようと全く靡かないし心に響かない。嫌悪感があるわけでもなく、相手は心の底からそう思っていそうだということが何となく分かるが、それだけだ。

しかし、心の底から思うことをそのまま言うような人間だったのだろうか、この男は。もしかすれば、この人はこの人でこの一年のうちに何だかんだ色々あって、少しは心変わりをしたのかも知れない。

「加えて何とその完璧に完成されつつも今でもその完成具合が完全に増していくというのだから未恐ろしい。次いでそれを台無しにするわけもない服装のセンス。白色ワンピースとはよく分かってるじゃないか、イーちゃんの差し金？」

「そういう話をするために貴方は私に話しかけたのですか」

だとすればすぐさまお帰り願いたいのだが。

「いや？ 褒めに来たのは本当だけど、まあ、話す話題が別にないこともないかな。にしても、初対面の時にまるで嫌われてるかのような対応だったのにきちんと話してくれるし敬語なんだね。僕泣きそうだよ」

「……………仮にも年上でしようからね。それに、前よりも何というか、空気が違う。差し出がましいことを訊きますが、勝ちましたか？」

「うん。一度だけ、ね」

勝てた、のか。生涯無勝という只為らない雰囲気存分に醸し出しておきながら、一度だけとはいえ。そういう言い方をするということは、試合に負けただけど勝負に勝つただとかではなく、試合にすらも勝つたということ。素直に、驚きだ。

「ああ、そういうえば僕の名前を名乗っていなかったね」

「名乗らなくて結構です」

『しちむきかみせき剝神削』』それが僕の名前さ』

「虚言ですわね」

「戯言だよ」

虚言にも程がある。どこまでこちらの世界のことを知っているのか定かではないが、こともあろうか飛ばされてる $\square$ の名を冠する名前を名乗るなど。ここまでの人間であれば有り得そうな気がしてくるが、間違いでも在って欲しくない。

「それで、貴方はそんなどうでもいいことを言いに来たのですか」

「うん？ うーん、正直そうっちゃそうなんだけど、まあ、本題が無いことも無いかな」

おっと。正直そういうことしか言いに来ていないと思つたのだが、案外本当に何か話

しかける用があったらしい。そういえば、野暮用だとか何だとか言っていたか。おそらくはその野暮用というのも本当なのだろう。となると、この男、喋り方の調子もそうだが口に出す言葉もそれなりに変わっているらしい。

何の心変わりがあったのだろうか。

「ほら、崩子ちゃんって殺し名？　だとか何だとかの一員でしょ？」

「帰りますね」

「ええ……」

絶対に関わりたくない。そんなことを自分から訊いてくる人間といて良いことなど一つも無いのだ。どう考えたって碌でもないことになるに決まっている、加えてこの男が言ったのだぞ？　何がひっくり返っても最悪に近いシナリオを描かれる未来は確定事項。

「そんなつれないこと言わないでくれよ。僕は時宮さんに会いたいだけでさあ。迷惑かけちゃったから、その償いをしに来たんだよ？」

全く以て信用できない。多少は性根が変わったことは認めるが、だからと言って罪償いをするような存在にも見えやしない。むしろ罪に罪を重ねに来たと言われた方が納得がいくくらいだ、吐くならばもつとマシな嘘を吐けという奴である。

「昨夜もそれで零崎って人に会ってね。そしたら丁度石風さんって人も来て。全く話に

取り合ってくれなかったから勝てそうもなかったけど、ま、そんなことは置いといて」  
既に馬鹿なことになってしまっているじゃないか。私は嫌だ、そんな状況を作り上げてしまう奴の傍にいたくはない。何が悲しくて殺し名序列三位と七位を引き合わせ——  
殺し名の例外的一賊と殺し名の特権級死神を巡り合わせるような存在の近くに  
いなければいけないのだ。土下座されたって御免である。

そしていくら引き留めたいからと言って人のスカートの裾を掴まんで止めるのはやめてくれないだろうか。しかもきつちりしやがんで……いや、位置と角度的にスカートの中身は見えていないのだろうか、それでも何となく嫌だ。気持ち悪い。

「離してくれませんか。貴方と一緒にいるとそのうちその話のようにすぐにでも別の殺し名の方々が——」

「どうも。『掃除人』、天吹聖送。せいそう そのこの汚物、あなたを殺しに来ました」

「こんにちは。『虐殺師』、墓森関間。せきもん 拷問しに来てやったぜ、そのの糞野郎」  
言った傍からこれだ。

二人とも、目線や言っていることからして仮名・剥神削のことしか眼中になさそうなのが私にとつては救いか。それにしたつて、序列六位の天吹と序列五位の墓森だと？  
昨夜来たのが石風と言っていたが、どんなパレードが始まると言うのだから。

それも、この男はいるだけの存在にも関わらずそのようなことをされているわけで。

殺した方が良いのでは、と一年前に言ったのは私だが見たわけではなく見る前から殺すためだけにこの場所にいるかのような物言い。筋金入りの殺され屋か何かか？

しかし当の殺戮対象はスカートを摘まんだままだんまり。

「……良いね、これ。次のトレンドはこれだねこれ。スカート摘まみ。とつても良いぞ」「よくこの状況でそれを言えましたね!？」

虚言だとか戯言だとか以前に馬鹿かこの男は?!

「えー。だつて良くない？ 分かんないかなあ、この良さ。何なら説明するけど」

「しなくて結構です現実を見てください」

「仕方ないなあ……確かに、変に崩子ちゃんを巻き込むわけにもいかないし」「ま』『だからと言つて、君達の相手をまともにするわけでもないんだけど?』」

不意と。

喋り方を、一年前のソレに戻す。流石は天吹と墓森と言つたところか、その調子の切り替えだけで何やら危険かもしれないと察せられたらしい。『掃除人』の称号に相応しく清掃員のような恰好をして箒を持っている天吹と、『虐殺師』そのものと言える血塗れの拷問器具の数々を所持している墓森、どちらともに瞬時にそれぞれの武器を構えた。

しかし、それでも何も恐れずかと一歩、足を踏み込む男が一人。

『おいおい何だよその武器は』『チリトリも無しに埃を掃くのかよ君は』『だとしたらこれ

また随分と馬鹿馬鹿しい人だ。まるで経験値をくれないスライムみたいだぜ」

何故スライム扱いをわざわざしたのか。

『そつちの人もそつちの人だ』『何その武器？』『血塗れとか厨二恰好良いの骨頂かよ』『バトルアクションものの漫画だったら全く盛り上がりがないクツソしようもないとここで咬ませ犬になりそうな奴だぜ（笑）』

「便器に詰まって死ね」

「五万年苦痛でもがいて死ね」

どちらもその煽りが靦面だったのか面白いくらい息を合わせて超高速でその男を殺していた。『掃除人』はその箒の柄で男の喉を貫いて。『虐殺師』はそのフォークとペンチと針のムシロとで全て男の心臓を貫いて。結果、その散々貶した武器が突き刺さったままの穴からはだらだらと血液が垂れていく――

が。  
それらが地面に付くことは無かった。

『大嘘憑オールドフイクンき』、『面倒臭いや、説明要る？』

☒剥神削がそう言う。見てみれば、血液は疎か、身体にも服にも穴は開いておらず、刺さっていた武器なんてものもない。しかもそれらが殺し名達の手元に返っているわけでもなくて、見たまま、まるでそれそのものがなかったことだったかのような現実。

「何を——しやがった!」

『何も何も。言つたじやないか、『大嘘憑き』だつて』

オールフィクション

「それだけで分かるわけがねえだろうが! 何なんだよそのオールフィクションつてのは! 俺の逸品共を全部消しやがって、返しやがれ!」

そう激しく抗議するは、墓森司令塔。血塗ればかりとなると錆び始めていて優れものでは無さそうな気がするのだが、どうもあの状態こそが彼らにとつては状態の良いものらしい。厨二恰好良いの骨頂かよというツツコミに対しては同意していたのだが、案外きちんとした理由があるのかもしれない。

「あんだだけ恰好良くしといたつてのに! またペイントし直すの大変だろうがよ!」

無かつた。しかもペイント。拍子抜けが過ぎるぞ。

『やっぱリアル恰好付けだったんだ?』『いやあ御免御免、僕あいう恰好付けてるのつて苦手でさ』『僕が恰好付けてないのに相手が恰好付けてるとかムカつくじゃん?』

「当たり前だろ! 女兒のスカート摘まんで喜んでる奴が恰好付けてたらこつちが困るつてんだよ!」

そして律儀に応答する墓森司令塔。拍子抜けが加速していく。無論そちらの意見にも同意しできない、あの状況で恰好付けているなどとほざかれた方が反応に困る。いや、いつそその方がそんなわけがないだろと一蹴しやすいのか?

『何てことを言ってくれるんだ君は!』『スカートつまみが恰好良くないだど?!』『どこを見てそう言える!?!』

「どこをどう見たって恰好良くねえだろうが!　むしろダサみの極みだろうが!」

『何をう!』『スカートという世間一般上では女性しか履くことを許されていない男女差別を存在から象徴しているかのようなその女らしさそのものを捲るのではなく摘まむことによつて逆説的に尋常ならざる背徳感と罪悪感を産み出ししかし摘まんでいるだけなうえパンツを見るのが目的ではなくそれどころか摘まんでいる本人の目線と意識は全くパンツに行っていないが故にされた女性は何とも言い難い気持ちに陥り周囲のスカート捲りなんかをしてきたしよもない男共は目的と手段が入れ替わつてしまつているような気がして気が気でなくなるこの行動のどこが!』『摘まむことにより自分好みのパンツが見えなくとも良い感じに太腿との視界のバランスが取れ場合によつては自ら絶対領域を作り出したり最高の色の采配を作り上げられ加え相手の女性の下腹部には若干の空気を感ぜさせた上でのやはり見え見え見えていないというマツチングを現実に引き摺り出しているこの行動のどこが!』『恰好良くないだど?!』

いや全く恰好良くない。

そしてまた私のスカートの裾を摘まみながら言わないで欲しい。何が何だか分からない能力についてでも考えていたのか黙り込んでいた天吹正規の方の開いた口が塞



がつていないし、反論することを諦めた墓森司令塔は至極嫌そうな顔をして見るからに拒否感を示している。

「……………すまない、墓森。私にこの男は手に負えない……………離脱させてもらう……………予想以上の汚れがこびりついているらしい……………無理だ……………これ以上見ていると綺麗にする前にこちらがヘドロ塗れになる……………」

「お、おお……………俺も正直無理強いはしねえわ……………うん……………」

というかドン引きしている。当然だ、こんなことをそれはもう盛大に力説されてしまつては引く他ない。私も正直今すぐにもこの場から立ち去りたい。戯言遣いのお兄ちゃんの元に行つて今すぐ癒されて浄化されたい。

そして気付けば本当に天吹の人間は帰つていった。それほどにまで剝神削の言動は耐え難かつたということなのであろう。そしてその事実を本人が認識できていないというのがこれまた手痛い。自覚していればそのようなことを言えるべくもないが、それが仇になり過ぎていて。自覚してくれ、頼むから。

「俺ももうこいつの殺しはすぐに終わらせてえから……………これで行くか！」

と、天吹が姿を消したことを理解してから新たに何かしらの武器を取り出し、目の前の男へと飛び掛かる。アレは何の拷問器具なのだろうか。首輪に両端がフォークのよいうな棒が付いたものに、籠手やお面。長い錐のようなものもあれば、純粋なナイフと思

わしきものもある。尚、血塗れではない。

しかし、それらは全てが全て、男に喰らわすことも叶わない。私から見れば、それらは唐突に空中で消えて、その違和感を即時感じ取った墓森がその場で止まったことが理解できた。とは言えど、私も彼も、何故いきなりその道具達が消えたのかは理解できておらず。

『オールマイクシオン大嘘憑き』『君の持っていた武器を』『なかつたことにした』

「なかつたことにした」。

そう言った。

なかつたことにした？ いや待て、それは流石に馬鹿げ過ぎている。どう考えても、などというものじゃない。どんな人間にだってそれを考え付くことは不可能だ。意味が分からない。

なかつたことにするだと？ それはつまり、何でもかんでも消え失せるということではないのか。先ほどの傷と武器を消して、今のは武器を消した。武器という固形だけならばまだしも傷も消せたということは、その対象の範囲は相当なものはず。武器、傷、記憶——いや。

命さえも。

消せてしまうのではないのか？

「なかつたことに……だど？ おま、お前、何してくれてんだ。ふぎけんな、ふぎけんなよ……今までの歴史でどれだけ拷問器具が役に立って来たと思つてんだ！」

墓森司令塔の塔員はまたしても憤慨し、再び幾つかのそれらしい危惧を出して駆け出す。今度はペンチの大型と、三叉のペンチ。だが、それもまた消える。これはもう驚く必要もないだろう――

『『大嘘憑オールドフィクションき』。その武器もなかつたことにした』

「……………!! ふ、ふぎ……！ ま、まさかお前！ この世から全ての拷問器具を失くす気じゃねえだろうな!」

『……………ふうん？ なるほど、この世からか……それも良いね!』『君の持つてる分だけで勘弁してあげようと思つたんだけど、そんなキラーパスを出されちゃったから』『応えるしかないよねえ?』『いやはやしかし』『昔にもそんなキラーパスを出された覚えがあるかな』『結局あの時に「なかつたこと」にしたものはゼーんぶ安心院さんに元通りに塗りとくられちゃつたんだっけな』『流石だよねえ』

飄々と、そう言いながら一つの長い長い螺子を、どこからともなく取り出す。どこから出した？ もしかして、その能力は時間すらも、なかつたことにするとも言うのか。そして、そんな疑問に対して答えてくれるわけもなく、その螺子の先を地面に付け、少し埋まつたところで腕を乗せて立つたまま寛ぐ。

「や、やめろ！ 拷問器具つてのは、俺みたいな奴にとっちゃ」

『大嘘憑き』！ 全ての拷問器具をなかつたことにした！』

「!？」

螺子が全て地面に埋もれる。

相手の言うことを途中でぶつた切つて、本当に、そうしてしまったようだ。青褪めて全身をくまなく服の上から叩いてはポケットの布を引つ繰り返し、上着を脱ぎ、袖を捲り上げて、肌の露出を増やしていく。そしてそのどこにも、彼が探しているであろうものの姿は形も影もない。

「お、ま………か、返してくれ！ あれは、俺にとっちゃ宝物みたいなもんで、子供の頃から大事にしてたんだ！ 親の形見なんだ！ だから、か、返してくれよ！ なあ！」

『おいおい』『馬鹿言つちやいけないぜ』『そんなもので君は人を殺そうとしたのかい？ うわあ人の風上にも置けない人だ。よくそんなにいけしやあしやあと言えたもんだよ』『大体そんなこと誰が信じると思ってるの？ 馬鹿じゃないの？』

「あ、ああ、何とでも言ってくれ！ 俺を殺してくれたって良い、だから、だからせめて一番最初の武器達だけは！ 俺の手元じゃなくていい、せめて世の中に返してくれないか！」

……傍観者を気取っている私が言うのもなんだが、もうこれではどちらが悪役なのか

全く分からない。墓森司令塔の人間が通常考えればおかしいことを言っているのは分かるが、心がかかなり籠っている。しかしそれを咎めているはずの男は見るからに悪役という風体で、どちらが正義なのか全く見当が付かなくなってくる。可哀想、などではない。何だこの、気持ち悪いのは。

良いも悪いもないまぜに、というか。悪いことをしているはずの人間が、悪いことを言っているはずの人間が何故か良い人に見えてくる。良いことをしているはずの人間が、良いことを言っているはずの人間が何故か悪い人に見えてくる。

『そんなに懇願したって無理なものは無理さ』『オールフイクション大嘘憑き』は「なかつたことにした」とは「なかつたこと」には出来ないからね』『そもそもとして無理難題なのさ』『それにやっぱり君が悪い。』『どうしようもなく悪い。』『なのに戻してくれだなんて、甘いと思わないかい？ コーヒーにミルクもシユガーもシロップも全部入れちゃう人よりも甘々だよ』

「それでも……!」

『何つって』

「が……?」

「はっ。」

目視できたのは肉片と化す墓森。いきなり体が膨れ上がったかと思えば、皮が破れ、

肉が裂け、欠陥がはち切れて、血液をぶち撒ける。その残骸が飛び散りまくったところで視認できたのは何やら先程まで持っていた武器群の数々で、見ていないものもちらほら。それに明らかに数が多くなっていて、形と大きさが合わないものもある。

体内に入れていたとは考え難いし、その男が全てなかったことにしていた拷問器具があるというのはおかしいし、あれほどの量を体内に隠し持っていたとも考えづらい。であれば、あれらがいきなりそこに現れた、というのが正しいわけだが……なかったことにはなかつたことには出来ないとも言っていた。

ならば、やはりおかしいわけで。

とか。

現実の視界情報に私の理解が追い付かないうちに、気が付けば墓森司令塔の姿は元に戻っていた。

そこに出てきた器具達は周りに散らばっていて、当の虐殺師は白目を剥いて口を開けて泡を吹いて失神している。失禁している。でもその周辺に血は飛び散っていないし、肉片は一つもない。服が破けているわけでもない。どういう、ことだ？

『虚数大嘘憑き』。「なかつたことにした」拷問器具達を『なかつたこと』にした！』

「じつ………という………と、です………か………？」

理解が。

追いつかなさ過ぎる。

『ん?』『ああ、そっか』『……わんこちゃんはいーちゃんや人識ちゃんほどアレなわけじゃなかったね。何、だったらここからはサービスだよ——』オールワイクシヨン『大嘘憑き』。君の今の記憶を、「なかったこと」にしてあげる」

「は——」

意し、き、が。

「ま、生涯無価値からの餞別だとも思っておくれ。いや、スカート摘まみの良さを分かってくれた謝礼かな。何にせよ、もうおねんねしな、美少女ちゃん。今までの放送は、グラブルスクラージュ《砂利奴隷》からの提供でした、って感じて忘れちまいなよ——

## 赤き征裁

「で、そのあと放置するわけにもいかななくて、いたんのところにもでも渡しておこうかと思つたら次々と殺し名・呪い名が現れて追いかけて回されて困つてる時に私に出くわしたと。最高に意味分かんねーなお前、最高かよ」

「そう思うのなら！ 是非とも！ 助けて欲しいんですけど！」

クマーは息も絶え絶えに、その最劣な運動能力でかろうじて奴等の攻撃を全て上手いこと避けつつ私と話す。よくやるもんだな本当。その状況で私に依頼をしてくるつー胆力も中々のもんつーか何つーか。

とりあえず視認できるのは六人。薄野武隊、咎風党、死吹製作所、拭森動物園、奇野師団、罪口商会。追いかけて回されてるのと等速で走つてるうちに聞いた話じゃあぜろりと闇口の娘とは会つていて。んで、石風調査室と天吹正規庁、墓森司令塔の人間は撃退済。

その前にいーたんと玖渚ちゃんにも会つてるつてんだからすげえ縁の《合》い方だよなあ。

「まあ！ お金とかは無いんで！ 依頼したくても出来ないんですけどね！」



「あー良いよ良いよ、久々の依頼で気分が良いしやってやろう。どっちをすればいい、その娘の送迎か、あいつらの退却か」

言つた通り、最近、私への依頼は段々と少なくなつてきていて困り果てている。これじゃあ請負人をしている意味が無え、請負人であるための存在意義、仕事が出来ないつてんだからどうしようもねえよな。《私専用の天守閣建立計画、ただし地球上のものは使えません》みたいなつ。言つてて悲しいぞ畜生。

「どちらでもお任せしますよ、どちらでも僕は助かるのでー!」

それにしても、クマーも随分と素直に物を言うようになったもんだ。昔ならまず追いかけて回されているという現状を作り出さなかつただろうし、行動原理からかなり変わつてしまつていられるらしい。元が元々凄まじいくらいにまで螺子れていたのだから、元通りにまつすぐ、となれば当然の結果か。

「じゃ、どっちも——とはいかなさそうだな。あの殺し名と呪い名が混じつてなんて言やあ良いのか見当も付かねえ謎集団、全員が全員何言つたつてクマーからターゲツトを外しそうになさそうだ。行けそうかよ。期待してるぜ、人類最弱の虚言使い」

尚、今現在人気はどこにもないのが救いか。いやまあ、仮にもあいつらはその道のプロなのだし、人払いなんかも完璧にやってのけてるのだろうが。私がいるところから察するに、完膚なきまでに、とまではいつていないわけ。

仕事が無いからって暇になってその辺ほつつき歩いてた私も私なんだがな。それでクマーと会ったつてのはめつけもんだが、一応今日クリスマスだぞ。そろそろ陽も落ちて、数々のイルミネーションが目立ち始めるネオン街。

そんな日にあれだけの人数を用意して殺そうとするとか正気か、全く。

「いやいやいやいや——哀川さ」「私の名前を苗字で呼ぶんじゃないやねえ」「潤さん。期待してるだとか何だとか、そんなこと言われたら」「括弧付けるしか!」「無いでしょう!」ふと。

また、調子を戻して。そう言う——良いねえ、そういうの! 最ツ高に恰好良いじゃねえか!

『あ、でも崩子ちゃんは任せますね』『怪我させるといーちゃんにどんなことされるか分かんないんで』

「恰好付き切らねえなあお前は!」

ただどそういうところも好きだぜ、惚れ惚れする。相も変わらないうつの間にか掌に収まっている螺子に、その飄々とした態度と不敵過ぎる笑み。いーたんとはまた違った、それらしく似つかわしい、筆舌し難いほどの至高の表情。

『それじゃ』『自己紹介、行ってみよーか!』『僕の名前は球磨川禊、愚か者と弱い者の味方だぜ!』

「……それに乗る理由は無いが、まあ、殺す相手への名乗りは無視できないか。私の名前は薄野醒儀。正義のために殺す、『始末番』だ」

「正直このような相手に対して自分の名前を教えるというのは些かどころか盛大に気が引けるのだが。むしろそんなことをした方が身のためにならないと予言が渦巻いている——しかし、薄野が言うのであれば乗じてはおこう。私は《予言者》、名前は咎風閃述」

「何とまあ、薄野と咎風は正直ですねえ。ああ、僕は死吹尖架、《死配人》をやらせていただいておりますとも」

「……………俺としては名乗ることに同感なんて出来やしないんだが。しないと駄目か」

「こつちの名前は《飼育員》、拭森瀬和。世知の名前は奇野世知さ」

「勝手に紹介してんじゃねえ」

「はあ。作った武器を散々に自分好みに塗りたくる墓森が盛大にやられたつて聞いたから参加したただけだけど、まあ。武器が螺子たあひねくれた奴もいるもんだね。ふん。ああ。あたしの名前は罪口青誠。ふう」

過負荷につられて、次々と自己紹介をしてくれる。タキシードの決まった男にローブ姿の性別不明、パントマイマーかと疑いたくなる動きを連発する謎男と気怠気な作業服

の男、首を座らせない方が落ち着くのか逐一首を傾けまくる女、こちらもまた気怠気がどちらかという面倒臭がりそうな裸サスペンダースカートの女。

そんな感じでどう見ても通常生活において会ったならば関わり合いになりたくないというたん辺りが心の中で叫んで避けようとするような奴等ばかりだが、こうしてクマーのノリに付き合ってくれるところを見るに案外律儀な奴らばかりらしい。人は見た目に寄らねえな。

『ふん、ふんなるほど。でもこうやって文字数を稼いだところで』『一人一〇〇〇文字くらいでしか相手してあげれないからそこは勘弁しておくれよ』『誰から行こうか』『流石に全員一氣にだとかはやめてね』『君らオツム弱そうだし』『気が付かないうちに互いに潰し合いとかしちやいそーだから!』

にしても、括弧付けただけでここまで言うこと言うこと全部変わっちゃうのか。一人くらいなら私の方にも向いてくれるんじゃないかねえかとちと策を練ろうと思っただがこりやお手上げだ、絶対に誰も私の方に見向きもしねえ。

こうやって嘗められるのは嫌いだ、仮にもこちとら美少女一人担いだ女一人、殺し名・呪い名の連中なら一人でも仕留めきれそうなものだろうに、目撃者を消すだとか何だとか来るはずなのに、何も無しにこうして傍らにしゃがんで観戦が出来ちゃう。

ゲームで言うなら超高性能なヘイトスキルだな。それがあいつのアクティブスキル

とかじゃなくて自分で引き摺り出して霧囀気とマッチングしているだけの、性格が滲み出ているだけというのが素晴らしい。

「貴様のような悪逆非道を繰り返す卑劣漢がいる現実など認めない——安心しろ、痛みは一瞬だ。死」

『そういうのは求めてねーから』『つて石風さんにも言ったはずなんだけどなあ』『伝わってなかったかな』

開幕、『却本作り』を一刺し。一〇〇〇文字使うって話はどこに行つたよ、正義とか如何にもクマーが嫌いそうだから分かるが、だからつてここまで一発とは。あーもう見てらんねえよ、正義漢つて面した薄野の奴がもう既に何もかも諦めきつた顔をしていやがる。生きることすら諦めていそうだわありや。

『今の様子を見るに僕の言つてたこと』『まああああつたく伝わっていなそうだ』『僕が何しにここに来たかつて知つてたりするのか』『ねえ』『死吹さん』『だっけ』

「……………時宮を探死お死に来た。と、いう話はなは聞いていますが……………だからと言って、僕達が教えるとおお思いですか。僕達は貴方を殺死お死に来たのですよ」

『…………お』『これは』『何』

途端、クマーの動きが歪になる。死吹の動きと連動している——のか。確か、「身体支配を駆使用する」《死配人》、死吹製作所。そうか、あれがその身体支配とやらなのか。鏡

映しなどではなく、右手を上げれば右手を上げている。

『あ』『ぐあ』『痛——』

ごきりと、何度か鈍い音がしたかと思うと両者、有り得ない形となっている。いや、関節を外せば有り得くはない形か。だとしても、死吹の方が顔色一つ変えずにやっているため、あちらはそういう駆動に慣れていることが見て取れる。

「ほらほらほらほら、まだ死にませんか。まだ死にませんか。僕はそろそろ限界です、さあさあさあさあ」

『あ』『は』『いやあ』『これは』『ちよつと』

が、クマーはそんなことに慣れていない。慣れている理由もあるわけがなさそうだし、あのまま、苦痛でもがいて死ぬのがオチか。何だかんだ異能バトル展開の多かつたこの世界、あいつの『却本作り』ブックメーカーについては誰も言及していないが、それを解明する前に殺そうとするとは、嗚呼。

読みが甘過ぎる奴等なこつた。

「死ぶといので、道連れで妥協死ま死よう」

ばぎん、と。首の骨が折れる音が二つ。

「……………あー、死吹が道連れにしないと死なないって、見た目の割には結構強い奴だったみたいだな。滅茶苦茶弱いくせに、弱いからこそ強い、みたいな文言をあいつからは

聞いたが……ああでも、何でもかんでも台無しにするつつうのはまだ見てね」

『大嘘憑き』  
オールフィクション

「!!」

二つの首折れ死体を眺めて、感想を漏らしていた拭森のフラグをきっちり回収するクマー。はっはっは、流石だぜ。道連れで死のうが何だろうが、身体支配されてようが何だろうが、「現実」を「虚構」にするそのふざけた能力。

もしかしたら歪過ぎるし能力自体を「なかつたこと」にしている可能性も考慮してたんだが、やはりまだ捨てていないらしい。というか、強化されているか。前は確か『劣化大嘘憑き』で、若干ばかり制約が厳しかった覚えがある。

「死んでも死なないとか、どういう——いや、それならば俺の方が有利だな！」

そう言い、拭森は驚きついでに勢いよく、その手刀でクマーの心臓を貫いてくれる。なかなか鮮やかな手捌き。だがそういう純粋な殺し方はそれこそクマーに効くわけがないはずだが。

『……あれ』『何で僕、君と握手出来てないんだ』

クマー自身は限りなく素つ頓狂な発言をしている。えーと、死吹の身体支配みたいなもんが確か拭森にもあったか……何だったか、《飼育員》の……何をして殺すんだったか。そこそこ面白そうだけど微妙そうとも思ってた覚えがある。

「いっつも拭森の噂は聴いても視ても違和感だにやあ。世知、そういうの認識しきれなくて分かんないさ」

「分からなくて良い……脳内干渉するわけだが、俺は拭森でも落ちこぼれだからな。その周囲にも脳内干渉して認識阻害しちゃうんだよ」

おお、そうだそうだ脳内干渉によつて攻撃された自覚を一切与えずに殺す。ただ、それだとやはりだからと言ってクマーに突き刺さるようなもんでもないな。しかも流石は絶世の過負荷野郎、それに気付いてもう行動に起こしてやがる。

拭森は螺子を何本も体に螺子込まれた状態で話していた。それに気付きもしない咎風、奇野、罪口。ふらりと体を揺らしたかと思えば拭森は地面へと倒れ込み、代わりにクマーがぬらりと立ち上がる。勿論、顔には最高に螺子繰れた笑みを浮かべて。何を「なかつたこと」にしたかと言えば。

『安心大嘘憑き』  
エイプリルフイクション

さしずめ、

『君の痛覚を「なかつたこと」にした』

つてところか。

『そして』『大嘘憑き』。君達がその攻撃を認識でき「なかつたこと」にも、した』

おっと。そうか、倒れても全く心配しない奴等がいるのはおかしな話だ。であれば、



そりやそういうことも「なかつたこと」にしている。ふうむ、やつぱり拭森なんかよりもクマーの戦いぶりの方が幾重にも面白味がある。それに、『安心大嘘憑き』エイプリルフイクション。あれは一体普通の『大嘘憑き』オールフェイクションとはどう違うのか。

なじみんから聞いた通りの週刊少年ジャンプファン、きちんとそういう引き延ばしをしてくれる。

「……何で君が生きてんのか全く分かんないけど——生きてるならば殺すまで！喰らえ、世知お手製のお薬!! 『シビア』!」

『お』『お』『おおおおお』『これ』『は』『何』『——ツ!!』

何やら唐突に奇野が取り出した瓶の液体を思いっきりかけられたクマーは、頭を押さえて液体を払うようにぶんぶんと上体を振り回す。苦しそう……ではないな。むしろ若干喜んでやがる顔だアレは。そうだと殺すための薬じゃなさそうだが……何だろうか。

「別名・辛酸想起剤! 堅苦しくて言いづらいから世知は「嫌なこと思い出させ薬」だなんて呼んでるよ! 効能は勿論その名の通り、嫌な過去を思い出して精神的にメンタルダメージを喰らわせること!」

……何だソレは。最高に無意味な攻撃じゃねえのか。

「そして続けて、こちらのお薬! 『ダサン』!」

加えて何だその世知辛いシリーズ。名前にかけてんのか。名前にかけてんだよな。

『おお』『おおお』『おあああああ』『あ』

今度は手に何やら軟膏を付けて、クマーの心臓をまたしても貫いている。すると何たることか、白目を剥いて涎を垂らせつつ体全体を痙攣させるクマーが。あ、動きが止まった。そして多分心臓も止まった。

うわー、流石は括弧付けてても恰好付かない超新星、死に方が超ダセえ。

「こちらのお薬は単純明快、純然たる苦痛をその胸に！ 具体的には心筋の動きに不定期的な緩急を付けて心室細動を強制的に引き起こすもの！！」効力が一番高いのは勿論心臓にそのままぶち込む！！」

『い』『これが』『恋……………！！』

「何言ってるの世知にも分かるように言ってる」

誰に向けての説明だか知らんが、奇野がそう言っていると不意とクマーは蘇って、そんな言葉を口にする。恋ってなんだよ。どういう経歴があつてお前の中でその結論が弾き出されたんだよ。

『あ、でも君スカートじゃないから良いや』

「どういう理由——！！」

滅茶苦茶テンションの高い女だったからか、そのツツコミにかまけて地面へ四つん這

いになり悲しむ姿が。というか割と真面目に今何が起きたのか出来ないできやしねえ、心を読めないクマーの考えてることなんて分かるべくもなかったりするんだが。

「……一応訊いところ。何で恋になった」

『いやあどうも、今僕括弧付けてますから』『括弧付けてない時』というか、括弧良くない時の感情が想起されちゃって』『具体的に言うとな崩子ちゃんのスカート裾を掴まんだ時なんですけど』

「シーンが既に理解できねえ」

ただ言わんとすることは分らないでもない。要は、その思い出したことと心筋の痙攣が結びついてドキドキ動悸だと勘違いしたと。阿呆か。いや馬鹿か。終始おちやらけているような奴だとは思っていたものの、ここまで目の当たりにさせられると展開が素早過ぎて付いて行けそうにもねえじゃねえかよ。

咎風は咎風で静観を決め込んでいるし、罪口は罪口で傍観だ。手を出そうという感情が一切感じ取れねえ。殺しに来たわけではないのかもしれない。ここまでやってきておいて、殺す気も何もないとは思うんだけどな。

それに――

「ああああああああああああああああ!!」

途端、さきほど倒れ込んだ拭森が叫び出し、手足をばたつかせる。螺子込まれた場所

が痛いのか何なのか、形振り構わず足掻き倒している。と、そのうち、絶命。した時には螺子は「なかつたこと」になつて居るのか、跡形もなく消えているし、拭森は綺麗な顔で死んだように寝息を立てていた。

アレが『安心大嘘憑エイプリルフィクション』、という奴だろうか。痛覚は「なかつたこと」になつていたはずだが、今の様子を見るに、おそらくは時限式でそれが更に「なかつたこと」になるスキル。時間は……ほう、丁度三分か。こりやあなじみんが何か一個スキルを渡して作らせたもんかね。

クマーが自分でスキルを改良してそんな面白可笑しい超展開のもんを作るとは正直思えねえ。そういやあ、なじみん元気にしてんのかなあ。最近、というか去年のあの依頼の時から専ら会つてねえや。

『ふう』『さて、お次は……無い感じかな』

「……ああ、私は貴公を殺せるとは思っていない。よしんば殺せても、この者達のように全てを台無しにさせられて終わることは予言しなくとも目に見えている」

「あたしもお手上げ。ええ。だつてあたし、罪口つて言つても本当に武器作りにはか能が無くして人殺しなんて出来やしないもの、うう。まあ。ここは一つ、あたし達の降参つてことで。うん」

『くっ……！』

ずしやあと。

盛大に音を立てて、ものの見事に片膝を地に付けるクマー。項垂れて、その顔は実に悔しそうに眼を口をキツく縛っている。何か攻撃を受けたわけでもないと思うのだが、それにしては表情が如何せんマジ過ぎるきらいがある。

『何て寛容さ……ッ！』『負けた………!!』

どうでも良かった。

『僕みたいな矮小十把、器の小さい男じやあ勝てる見込みがない……！』『また勝てなかつた………!!』

確かに人格勝負になつたらお前はどの誰にも勝てないだろうよ。それにしても、随分な悔しがりようだなオイ。いつそ楽しんでんじやないのかつてくらいだぞ。咎風は呆れて帰り始めてるし、罪口なんて興味なくなつたのかそこら辺に打ち捨てられてる無傷の薄野、死吹、拭森、奇野の奴等から武器を幾つか奪つてるし。

「ま、いや。おいクマー、いやんとこ行くんだろ。私も今暇だし、一緒に行こうぜ」「ええ、そうしましょうか、潤さん」

うわあ身替わりクツソ早えの何の。もしかして「また勝てなかつた」つて言いたかつただけなんじやないのか。

## 噓吐伯樂

「……私はもうお前とは関わりたくないと目の前で叫んだ覚えがあるんだが。何だ、一年越して野球拳が出来なかったことがそんなに悔しかったのか。そういう肌の露出を賭けることは青誠せいせいの奴としてくれないか」

その一年前に色々であったせいでその時にいた京都で路頭に迷うこととなり、何とか千本中立売通りの少し高めのアパートにて姉と共に住むことが出来るようになってから一年が経過した辺りでとんでもなくとんでもない予感がしたために、それを回避しようとして模索したものの全て失敗。

深夜も深夜、もう少しでクリスマスも終わるであろう時間帯に一年越しに彼らと顔を合わせる事になるうとは、正直思わなかった。いや、思っていたのだけれど、思ったくなかったのだ。

球磨川禊。

私の人生がとち狂った最大にして最低の分岐点にいた男。と、『いーちゃん』もいるらしい。前よりも髪が少しだけ短くなってさっぱりし、案外一般人向けの体裁を保っているか？ 私からすれば相変わらず言い表せないおかしさが滲み出ているが、まあ、通常

の比とは気付かない程度だろう。目の前の男よりはマシだ。

「酷いなあ、僕は僕が「なかったこと」にしたことを「なかったこと」にしに来たつていうのに。やっぱり君も断るのかい？ 時宮刻弥ときみやさん」

……喋り方が少し変わったか？ どうでもいいか。

「その名を名乗ることはもう出来ない、時宮は除籍させられたし刻弥という名前もその姓のオプシヨんだ。今の私は上辺かみへばる春兆波はるせなみ、というかここに来たのならば苗字は見ていだろうが」

「ああ……はい、うん………ぼくは見てますね……それはもう毎日のように……郵便受けのネームプレートとかで毎朝のように………」

「は？」

『いーちゃん』は随分と気怠気、というか自分自身に呆れ返っているような、やるせなさを感じる顔と声のトーンでそう言う。のように、とは付けているが見る限りそれそのものということなのだろう。つまりは。

……は？ である。

「同じ建物に住んでいたのか……」

「そうなりますねえ、ええ………はい………」

巡り合わせが変過ぎる。変則的過ぎる。そりゃあ球磨川禊にも二度として会ってし

まうわけだ。一年前の時点で既に私の運命は組み込まれてしまっていたわけである。このようなどうしようもないとしか表現のできない性質を体現している人間一人の近くに住んでしまつては当然の結末を迎えたわけだ。

タイムリープ出来るならば是非でも自分に忠告しよう、もつと安い場所で我慢しておけ。そうすれば変な巡り合わせも無ければこの男が京都に舞い戻ってくることも無いし、ここが目的であることを悪寒してしまふことも無いしそれで知り合いも知り合いでもない関係無しに殺し名呪い名をけしかけられることも無い。

「にしても、あの数時間だけで閻口、時宮に関わつたと思つたら今度は全員と関わり合つたつてのが流石だね球磨川くんは……あの人間失格にも遭遇したのがこれまた。崩子ちゃんを昏倒させるわ、単独で潤さんにも会うわ」

トラブルメイキング能力が強過ぎるんじゃないのかい？ と別に返答しなくても良さそうな言葉を、『いちちゃん』は独り言のように連ねていく。潤さん、とはあの《死色の真紅》のことか。つまりは球磨川禊もあの存在と知り合いと言うことで、まあ何とものんでもない関係だことで。

「本人達から話は聞いている、相変わらずふざけた戦い方をしたらしいな？ ビデオ通話越しですら分かるほどに大抵が『いちちゃん』と見間違うレベルで死んだ目をしていったというのが……私はまだ軽度で済んでいたという事実がまた胸に来るぞ」



「無い胸に？」

「よし今すぐ「なかったこと」にした私の操想術を返せ、ぶっ叩いてぶっ飛ばしてぶっ殺してやる」

「お、やっとラストツーでそう言ってくれる人が出てきてくれたよ。ほら」と。

私、に。

私の胸、正中線上、心臓腑に完全命中。螺子が文字通り螺子込まれる——ヘッドの型は分からない。が、どうせ碌でもない型だろう。何より、今までの低頭や丸皿とは違う、一本ラインの入られたなべ。

刺された感触というのを説明するのも変な話だが、前とは違う感じがする。前はそこそ、この世の最悪と最低とを混沌の鍋に放り込んで煮詰めて固めて粉碎してその破片だけを集めてもう一度溶かして煮たような感じだったが、今はそれを粉碎せずに更に何かふざけた調味料を無理くり混ぜ合わせたせいで反物質が出来上がったかのような。そんな、感じ。

『虚数大嘘憑き』。君の操想術を「なかったこと」にしたことを「なかったこと」にした」  
 確かに、操想術が戻ってきた感覚はある。あるが、如何せん発動しているのかどうかは分からない。何せ、姉の指針……否、今は穴凧だが。あの姉の操想術を突破して恋に

落とした『イーちゃん』がいるのだ、確証は無い。強いて言うならば、球磨川禊に通じていけばいいのだが……………。

「まあ、僕に発動されても困るから僕に効か「なかつた」ことにもしているんだけどね」  
そう甘くはないらしい。私達姉妹はその術を制御しきれず常時発動しているがために落ちこぼれだったわけで、姉妹同士でも互いの姿を視認できていない。ここ一年ほどは、姉は私を認識できていたようだが、私は出来ていないのだ。

嫌いな奴の姿がまるで家族のように馴れ馴れしくしてくるといふのは全く慣れない。いや、まるで、ではなく真正銘家族ではあるのだが。

「ああ、姉にも会っていくか？ 球磨川禊には関係のない相手と言えばその通りだが……………思い出話をしに来たのなら相手にはなれるだろう。特に『イーちゃん』に関しては会っていつてほしいのだが」

「……………ぼくですか。何かしましたっけ」

姉がどうなっているのか分かつているのか、思いつきりすつとぼけやがった。こいつ、方々で自分は普通だの一般人だの色々言っていたと聞いていたが確信犯だろう。自分が漫画的アニメ的小説的ハーレム主人公の位置にいれることを理解しているだろう。

「何かした。ああしたとも、おかげであの姉は前以上に周囲への興味が無くなった。操想術が自動で使用されている以上、同じ過ぎる人間が通常社会に組み込まれることは出

来ないし、元から働ける状況でもなかったからな。私もそんなに興味は無かったんだが」

時宮を除籍させられて、金の伝手無し。加えて私は操想術が「虚構」なかつたことにされていたが故に普通に社会に溶け込めることが分かってしまったし、で必然的に出稼ぎをするしかなかったわけだ。

尚、今も操想術を発動させ続けている姉は何もしていない、所謂ニートである。仕方が無いが、事ある毎に『いちちゃん』の素晴らしさを聞かされる身にもなってほしい。

「あれ？」となる、君達の操想術は「なかったこと」にした方が良い事だったりする？」  
どうも、理解したららしい球磨川禊の質問。

「そうだが。私も先程勢いで返せと言ってしまったがこれではパートに出れなくなったな。何にせよ、適当に次の仕事を探すだけだ」

「……やつとこの長い旅の目的がきちんと果たせたと意味が無いどころか悪い方向だったとか傷付くなあ……」

そうか、この男にとってはそうなるのか。私からすれば今まであったものがいきなりなくなつて環境も変わっただけで、それが元通りになつていくだけなのだが。そう考えると文字通り、戻なほつていくわけで。良いじゃないか。

「それよりも『いちちゃん』、寄つていけないか。寄つていけ。寄れ。責任を取れ。とて

も姉が面倒くさい。寄れ。頼むから寄れ」

「絶対に嫌です帰りますそれじゃあ」

「球磨川禊、何でもしてやるからその男を引き摺ってでも寄って行ってくれないか」

「えっ本当!?! 寄る寄る寄る寄る!」

「ほんと君は自分の欲望に忠実だなあ!!」

話しているうちにずりずりと、じわじわと後退っていく『いーちゃん』がぼつと後ろを向いて走り出したところで球磨川禊にそう持ち掛けると問答無用で『いーちゃん』の右足を螺子切って止めた。引き摺ってでも、と言うか何と言うか。

しかもその傷も一瞬瞬きをするうちになわ戻っている。

「いやあ、女の子から、それも金髪碧眼の美少女合法ロリから「何でも」なんて言われると心がうきうきしてつい犯罪とかやっちゃいそうだね」

「君は存在が犯罪だよ。存罪だよ」

ううむ、この男、止めを刺したり凌辱をしたりするわけでもなく野球拳などといきなり言い出すあたり、何でもしてやると言う尻込んで多少ゆるい要求をしてくると踏んでいたのだが、今思うと浅はか過ぎたか。

裸エプロンとかさせられかねない。合法ロリとか当人を目の前にしてとんでもないことを口走っているし、裸ジーンズもあり得る。全裸パーカーとか? にしても、この

男にとって私は一応美少女の範疇に入るのか。パートの連中だとか、そういう反応をしないので、そこまで自身の容貌が優れているわけではないのだと思つていただけだ。

「まあ、金髪碧眼だとそういうフィルターもかかるか……」

純粹に、珍しいから可愛く見える。特別に思える、とか。それから後はあれだ、この男の周りにいる女が絶望的か。何が絶望的かは言わないが。ただ、《死色の真紅》は凍てつくような美人だと聞いたことがあるのだが、そう考えると違うのかもしれない。

「うん？ えーつと……上辺春さん、もしかして僕が本心でそう言つてないと思つてる？」

「いや、今のお前ならば本心なのだろうよ。一年前ならば冗談だと思つているが、今はそういう状態だろうか？」

「あははー、どうだろうねえ？ 僕は僕でも思い通りにならない自動操縦だからね、冗談かもしれない」

お前の冗談は存在だけにしろ。

「ああ、今やつと合点がいききました」

ふと、『いーちゃん』がそう言う。今はもう玄関で靴を脱いでもらつて、廊下を歩いて姉のいる居間の扉を今まさに開けようとせんところなのだが。私と球磨川禊の会話を

何か思い出したことでもあるらしい。

「最近、近所のスーパーでやたらとアイドル的な感じで噂されている金髪美少女って貴女のことだったんですね」

「私そんな持ち上げられてたのか!？」

初耳なんだが！

「というか何だ、同じスーパーにいたのか!? 巡り合わせというか、よく今まで遭遇しなかったなという感想が出てきてしまうほどだぞ、感嘆するわ! 遭遇したらしたで気まずいわけだが……いやそうじゃなく、じゃあパートの奴等は噂しておきながら私に對しては普通に接していたのか、凄いな！」

「変態は変態であるからこそ、それを隠して振る舞うべきだとは言ったもんだからね、上辺春さん相手には紳士で在り続けたんだろぅねえ」

「君が言うとは何故か説得力があるんだけど、何、球磨川くん、幼女趣味があつたのかい?」「うーん、それは怪しいとこなんだよね。僕って元々惚れっぽいからさ。で、僕に對してちゃんと相對してくれるのって純粹過ぎる人とかだから、必然的にそういう幼めの子とかが多くてさあ。まあそういうわけじゃないんだけど」

違うのならば何故そう言った。

「というか、いーちゃんの方が幼女趣味……じゃないか。君も割とたまたまそうなっ

ちやつた系か」

「言わんとすることは分かるけどそうだ、ぼくもたまたまそうなつちやつた系だ」

「いえーい」

「いえーい」

ノリ良く二人はハイタッチ。仲良しか。仲良しなんだろうけど。明らかに似た者同士、同族嫌悪も許さないレベルでの、同一存在と言っても過言ではないくらいに気質・性質が同じな人間なのだ。一年前ならば多少は違っていた印象を受けるが、今となっては見た目と喋り方以外で区別が付かなかつたりする。

そんなことは置いておいて、何はともあれ『いーちゃん』を姉の宥凜に合わせる方が先だ。あの姉のことだから、『いーちゃん』を見ただけで取り乱しそうな気もするが、まあ。それはそれということで、御開帳——だが。

「……………誰？」

そこには姉ではなく、金髪ボブカットで翠眼垂れ目、私とは違ってふくよかに育つた体を強調するかのような胸の開いたふわふわ桃色ワンピースを着た女がいた。誰だ。私のこの部屋にいるのは姉、私にとっての嫌いな奴、要は球磨川禊・制服バージョンがいるはずだったのだが。

誰だよ。

「えー、ひつどいなーきざっちゃん！ 私は私だよう、誰？　なんて今更他人行儀に！」  
 は？　クソうざい奴だな何だコイツ。

いや見当は付いているのだが、こんな喋り方でこんな動き方でこんな性格でこんな外見をしていたのか。何にせよ腹が立つ。正体が分かっても腹が立つ。その外見とは初対面だしその性格とは初対面だよクソアマ。いやそういう言い方をすべきではないのだが。いやしかし。いやだが。でも。

「……………おい球磨川禊、さつきなかつたこと「虚構」にしたことがもう一つあるな？　言

え」

『『大嘘憑き』、君にも、君のお姉さんにも操想術が効か「なかつた」ことにした』

悪びれずに言う。

畜生、こいつもこいつで腹が立つ。先に言ってくれないか、おかげで覚悟が出来ていなくてすさまじいヘイトが私の中で姉へと向かっている。何故だ。何故なんだ。何でこんなのが姉なんだ。私はこんな奴のために稼いでいたのか。

「一年しか変わらないだろ、何でこんなに体の成長に差が！」

「ほえ!?　えっ何、きざっちゃん私の姿見えてるの!？」

片や身長一四九のまな板、片や身長目測一八〇弱の西瓜つてどうかと思うんだ。どこでここまでの差が付いた。一年だぞ。一歳差だぞ。なのにそれがどうしてこうなった。



畜生、世の中全部恨んでやる。幼少期から育つて分かつていたのならばまだしも、この年になって露見したというのがくる。心が痛い。無い胸が痛い。

「てゆうか何、何で球磨川禊がここに——」

うざいのが喋り方だけで、恰好までうざくなかったのは救いだなと自分の心を落ち着けているところで、我が姉は球磨川禊の存在に気付いて私の後ろを覗こうとする。覗いたところで、思考停止。だろうな。そうだと思っていた。

『『いー………ちや、ん』が………何で、ここ、に………?』

どうやら停止しきつてはいなかったらしい。

「えっと、そうですね、ちよつと色々こんがらがって、押し切られて、螺子切られてというか」

「わああああああああああああああああああああああああああああ!!」

叫びだし、背中をこちらに向け、蹲る。恥ずかしいらしい。ぼそぼそと聞こえる声から察するに何故ここにいるのか哲学し、先に知らせなかった私に対してちよつと恨み、球磨川禊に会ったことを全面的に呪い、『いーちゃん』の目の前に出るに相應しい恰好・化粧をしていたかどうかを自問自答しているようだ。そしてその『いーちゃん』はどうやら先程の球磨川禊の行動に対して不満たらたらしい。

「さて、じゃあ私は………で。『いーちゃん』にも色々あるだろうからな、どうぞ私の姉に

完膚なきまでに事実を伝えて絶望させてくれ。球磨川禊、お前はそのまま廊下だ廊下。そこで何でも聞いてやる」

と、言うのと球磨川禊は直立不動。期待したような眼差しがかなり鬱陶しいが、まあ、言っている内容が内容だし仕方あるまい。そして、私は『いちちゃん』の後ろに回り込んで蹴つて居間に入れて扉を閉める。

尚、姉はあの日以来『いちちゃん』についての情報収集をしていないしそもそも目を向けようとしなないため、かの男が周囲の女性関係をどう終結させたかを把握していない。そもそもとしてあの姉は他人の情報を閲覧するのが好きではなく、あの十月前後に『いちちゃん』が取った行動も完全には把握していないのだ。

なので、言わずもがな。『いちちゃん』が今の境遇を全て説明すればあえなく失恋、絶望のち悲哀の嵐待ったなしの確定、心の天気予報というわけである。それがどう爆発するのかは分からないし、もしかすれば姉も悟っているのかもしれない。

「で、お前は一体何をやっているんだ球磨川禊」  
「え？ スカートを摘まんでいるんだけど」

確かに私の今日の服はスカートだが。尚、本来は今日は休むためにだらけた服装をしていたのでキャミソールの上にパーカーを羽織っている次第。男を招き入れる女の恰好ではないが、男二人が男二人だし、私とて仮にも元呪い名。

ただまあ、急いで取ったスカートがよりもよってミニスカだったのが痛恨のミス。というわけでもなかったりするが、まあ、スカートを捲るわけではなく摘まんでいるだけなので良しとしよう。何故摘まんでいる状態で静止しているのかちよつとあんまり全く全然よく分からなさ過ぎるとはいえ。

「……何でもしてやると言つたはずなんだが」

「うん、だからスカートを摘まさせてもらっているよ」

どういう論理だ。

いや待て、そういえば、唯一この男に戦いをまともに挑んで無事に撤退してきた天吹の報告にあつたな。自己紹介をしている時に随分な美貌を持った少女のスカートを摘まんで満足そうにしていたと。それか。こいつさてはそれにハマったのか。

だから何なんだ？

「裸エプロンとかを本当にやらせられると思つていた私の覚悟とは一体……お前、本当に変わつたんだな。趣味も含めて」

「何言つてるんだい、僕は昔から僕さ。そうじゃないと僕じゃないじゃないか」

うん、そういうウザい感じに面倒臭い御託を並べるのはお前らしいがな。

「にしても、基礎的にはお前も男、何でもすると言つた女が一番警戒すべきことを要求すること覚悟していたんだが」

「うーん、そういう生々しいのはちよつと……」

顎に手を当て、困り眉で軽く首を捻る。まるで私が異常だぞとも言われているかのような反応で若干ばかり苛立つものがある。やはりこの男、素の状態でも人にヘイトを向けるのは変わらないのか。それこそ私達姉妹の欠陥した操想術のように常時発動型なのか。

「ま、スカートを摘まむのがお前の望みだったのならばこれで終わりだな。もう会わないことを祈つとくよ」

居間からの喋り声も、一時驚く声が聞こえたりしたような気もするが、啜り泣きも聞こえなければ重苦しい雰囲気でもないし、『いちちゃん』から別れを告げる言葉も聞こえてきた。潮時と叫びたところ、私としてはようやく球磨川袂から解放されるのか、といった感じだが。

扉が開く。

「どうだった、『いちちゃん』。面倒くさかったか？」

「思った以上に冷静なようでこつちが驚きましたよ。一応、二人分の生活費を一人で稼がせるのはやめるように言っておきましたけど、それ以外に關してはいち生活、僕が首を突っ込み過ぎることではないので。それと、まあ、ちよつとした宣伝と伝手にもなつてもらおう方向性で」

ちよつとした宣伝と伝手。ふむ、元とはいえ呪い名、『いーちゃん』が直接的に噂するよりも、私達が何かしらぼかしたり脚色したりした上でまことしやかに伝えていくという形が似合う話もあつたりするか。有効活用する気満々だなあ、自分への好意を。

好意というか、崇拜、妄想みたいな節もあつたが。しかし、面と向かつて話した『いーちゃん』が冷静だつたというのなら、その節はそもそもとしてあの姉の性格が混じつていただけなのだろう。

ああ、私はむしろこれからの方が悩ましいのか。今更、やつと、姉と姉妹らしい生活を送らねばならない。そのような義務感に駆られるものでもないが、気が重くなるものでもないが、どうなることやら。

「それで、球磨川くんは一体どんな要求をしたんだい？ いややつぱいいや教えてくれない。なんかしようもなさそうだし」

「しようもないとは何事か！ いーちゃん、君にもスカート摘まみの偉大さを教えてあげようじゃないか！」

「結構だよ」

これ以上意味の分からん変態なのかどうかわからない変態を増やそうとするな。この周辺界限で女性のスカートを摘まむ謎の不審者が現れたらどうする。『いーちゃん』に限つてそこまで露見するようなことをするとは思えないが、球磨川禊がどこまで洗脳

するかも定かではない。洗脳するとも限らない？ いや絶対こいつは洗脳とか余裕でするタイプの人間だ。

「そんなことより、君の目的はまだ果たされていないだろう。時宮……上辺春さんともう一人、いるんだろう？」

「……そういえば私に対してラストツーとか言っていたな。まだいるのか？ その、「なかつたこと」にした対象が。だとすると途轍もなく不憫でならないが」

「ん？ ああ、うん。いるよ、一人。僕でもまだ確実には把握できていない、一人」

把握できていない？ これまた不思議な言葉を使う。まるで対象がどこにいるのか分からないという風だ。この男ほどどこにいるのかよく分からない風来坊そうな奴ですら行き先を把握できない存在など、世界中の誰もが見つけられないんじゃないのか？ 「相変わらず把握できていないのかい。ならどうするんだ？ 一応、ある程度はそつちの人も探そうとしたんだけど、全く分からなくてね。その存在自我以外は記録から何から何まで「なかつたこと」にした人となると、その記録に齟齬が生じないか、とか思ってたんだけど空振りだったし」

どうも『いーちゃん』にも搜索を頼んでいたらしい。というか搜索したのか。何だ？ 『いーちゃん』はさては何かしらを搜索したりする探偵なんかを目指しているのだからか？ しつくりこないな。依頼を受ける事務所を構える風体が特に……依頼。依頼

か、ああそうだ。請負人、というのならば、少しだけしつくりくるか。

あのドキツイ赤色に比べて、無色過ぎるが。

「あーそれがねえ、アテはあるんだ。というか出来たんだ、うん、これに関しては上辺春兆波さん、貴方に感謝しなくちゃね」

「は？ 私はその消去された？ 存在だか何だかへのヒントを与えた覚えは無いぞ？」

「僕のために呼んでくれた変人奇人びつくりパーティ、呪い名？ 殺し名？ そんな人たちごった煮の彼らだよ。彼らを仕向けて、僕を殺してくれたのがヒントになった。いやあ、久しく死んでなかったからね、あの空間のことを忘れていたや。全く、彼女はいつだって僕を捕らえているなあ」

死んでなかった、という飛んでもない言葉の力を發揮している文章は置いておき、どうもこいつは死んだ際に何かしらの空間に飛ばされることがあるらしい。それも女関係だそうだ。なんだ、こいつにぞつこんなメンヘラくさい女もいたんじゃないか。だから私の過干渉を断ったのか？ そういう風にも見えなかったが。

「なら、君はもうその存在にアクセスすることが出来ると？ ぼくはもう御役御免か」

「うん、そうなるね。久々に会えて楽しかったぜ、いーちゃん」

「はは、やつとかい。僕は最初から楽しかったぜ、球磨川くん」

「まるで打ち切り最終回で別れる、宿敵と書いて親友と読むみたいな関係性をカッコつ

けて滲ませているのは結構だがここはまだ私の部屋の中だからな？  
やれ」

恰好付かなさ過ぎだろう。

せめて外に出て



## 病的

「久し振りもクソもねえ、ふぎけやがって天下<sup>てんげ</sup>天下<sup>てんげ</sup>の過負荷野郎が」「畜生、まだ自分の身体が気持ち悪い。何なんだこれもう」「全てを全て良いも悪いも縋い交ぜに台無しにするたあ聞いてたが、自分の存在自体をそうされるとは思わねえよ」「クソ」

『虚数<sup>ノンフィクション</sup>大嘘憑き』——なんて説明しなくても良さそうだね。うん、久し振りだぜ水俣ちゃん。折角可愛い女の子でもあるんだからそんな風にクソクソ悪態付かない方がいいと思うよ、全く」

「ここにここにここにここにこここ噛いながら言うんじゃねえ。そりや確かにお前のそのクソふぎけた能力<sup>スキル</sup>はどういうもんかは知ってるがよ」「悪態については反省する気もないね。あかないね」「絶対に嫌だ、これは私のアイデンティティ——」「つてわけどもねえが」

「君の場合、生来の性格だろうし治らないのはそうだろうねえ」

「つうかお前に可愛いと褒められても何も嬉しくねえな」「驚くくらい嬉しくねえ、むしろよくそんな風に言えるよな。逆に惚れそうだわ」「とりあえずぶん殴っていいか?」「前後の流れが繋がってないよ、とか僕にツツコミ役を投げるのはやめてくれるかい。

僕はその辺不慣れでねえ。にしても、それはまだ喋りづらそうだね」

そう言い、再び、螺子を構える球磨川禊。と思っていると、気付けばソレは私の身体に螺子込まれている。本当ふぎけた能力だ、私の思考以外、存在も能力も行動も記録も干渉も全部全部「なかったこと」にし続けやがって。

あそこまで永続的に「虚構」に出来る馬鹿げた能力だと知っていいりやあ勝負なんてしかなかった、いや気付かなかった私が悪いのか。仮にも一時的にこの男から直々に對抗できる能力と言われた能力を持っていてと言われたのだから知っていて然るべきだったわけだ。

ああクソ、忌々しい。

『虚数大嘘憑き』。君が思考でき「なかったこと」にしたことを「なかったこと」にした」言われて気付く。確かに今私は、口を開いていない。喋っていない。そういえばそんな虚構化の履歴もあつたか、忘れていた。だああ畜生、人の気にしていないことすらほじくり返して抉り返して螺子り返してどきくきにませこぜにどうでもよくしやがる。

「それで？ 私に關しては戻して欲しいかどうか訊かずに勝手に使いやがって」

「その辺はいーちゃんに言われた通り、どうしようもないからね。開き直って勝手にすることにしたんだよ、君には色々と話すこともある気がしないからね。開き直って勝手にすることにしたんだよ、君には色々と話すこともある気がしないでもないし」

絶対に話すことがない奴だこれは。私としても言いたい文句は多量にあるが話した

いことは何も無い。にしても、何の因果か知らねえが私が思考しかできない状態だと球磨川禊の周囲、数メートル以内にかいられなかったことを把握しているとは。

あれか、安心院なじみとかいう奴に教えてもらったクチか。ちと違うが、その私からすれば然程親しくもなければ詳しくもない間柄の人間からのイメージだと全知全能と言った具合だが。何より去年の生徒会長決めの選挙でもそんな感じだったぜ。

思考しかできないのに視認はできるつつうのは如何せん気持ち悪いがな。匂いも捉えられるし音も聞こえるとかいう説明するに筆舌し難い実にふざけたとしか言いようのない状態。どうしろってんだか。

「んでえ？　これでお前の御高尚な自分勝手な自業自得な自己中心的な罪滅ぼし全国ツツアアアは御終いなあわけだが？　どうすんだよ、これから。どうせ行くアテも無えんだろ球磨川あ。大学も会社も全部落ちたとか言ってたしよ」

「ん？　じゃ何、君が実は大富豪の娘で僕を拾ってくれでもするのかい？」

「は、お前みたいな野郎、<sup>フットマン</sup>従僕としても雇えねえよ」

敷地内に入れるのも御免だね。

「あはは、そうだろうねえ」

軽く笑い、足を踏み出してどこかへ行こうとする。

「……結局どうすんだよ」

「どうもこうも無いさ。僕は球磨川禊、そんな名前を持っていただこの誰か。適当にほつつき歩いて、座って、立って、食べて、寝て、起きて、生きて、住んで、倒れて、死ぬだけの男さ」

「……………お前つてさあ、昔から鈍いとか言われたことなかったか？」

「無いねえ。あるわけ無い。僕はまず誰かから好意を持たれるつていう主人公体質は持ち合わせていなかったんだ。そして今でも持ち合わせていないし、僕自身持つていないと思いい切っている。無いのさ、そんな事実」

「……………女心を分かるつてか？」

「分からないなあ。僕は男心どころか自分の心すら分からないような人間だ。黒髪の女の子だとか、お人好しの女の子だとか、安心できる女の子だとか、宝のような女の子だとか、立ち上がるような女の子だとか、言わずもがな、どの女の子が好きな先だったのかすら僕は知らない。」

「……………だったら」

お前とは違つて女として、女心を多少は分かっていた私から言わせてもらおうか。

お前と違い最低じゃない、その辺の粋がってただけの私から言わせてもらおうか。

『言わなくて良いさ。』

「……………は」

「言わなくても分かっている——わけじゃないけれど、僕は球磨川禊だ。そこを忘れてもらっちゃあ、困る」

「だから、曖昧にして、適当にして、台無しにして、何も正解にせず、そこら辺に散らばらせていくつてのによ？」

「良いじゃないかそれで。御目が高かったり、瞳が良かったり、なじんだり、今だったり、斬れそうだったり、機会があつたり、先だったり、半袖だったり。どんな女の子でも、どんな女の子からでも、僕という過負荷ほくは過負荷そとしか記憶されないままで良い」

本當、自分だけに都合の良い野郎だ。

「それで良くないつつう女がいたらどうすんだ」

「その時はその時さ。そんな子なら、もしかすれば、僕を」

見つけられるかもしれないね。

そんな言葉が聞こえそうになつた頃には、そんな言葉を吐きそうな声は聞こえなくなつていた。後ろを振り向いてみると、そんな声を出しそうな背中は見えなくなつていた。周囲を見渡してみても、そんな背中をしていそうな男はいなくなつていた。

あいつはスキル名を発しなくてもスキルをいくらでも使える——螺子さえ、出す必要もなくスキルを使ってしまう。だから、私はあいつがスキルを使つて消えたのか、偶然意識を縫つて消えたのか、判然とはしない。

更にはそのスキルが『大嘘憑き』オールフィクションなのか、『安心大嘘憑き』エイプリルフィクションなのか、『虚数大嘘憑き』ノンフィクションなのかさえも私には理解できる範疇を越えている。

最後まで、嫌味な野郎である。

「……け。」

お前の人生をここまで付き合わされた身にもなれや。

そんなお前をひいこら探そうとしている女だっている。そいつが果たしてお前を見つけれられるかは分からんが、少なくとも私はそいつに手を貸しはしねえ——好い加減なまんまで良いってのがお前の望みだつてんなら、それくらい従つてやろう。

私だつて、少しくらいは過負荷マイナスなんだ。それに。

「お前をスキル無しで見つけられるような女なんざ、例え特別でもいて欲しくねえもんだね。」

全国ツアー、楽しかったぜ、クソ野郎。